

# 塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
平成四年四月十五日 印刷  
平成四年五月一日発行 (毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通卷七八〇号



日川協加盟

No. 780

五月号

# 暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会(句会)の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願ひ申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/2頁六、〇〇〇円 ③ 3/4頁一、二、〇〇〇円

② 半頁九、〇〇〇円 ④ 一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月25日

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇—一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

## 移転のお知らせ

このたび左記のところへ事務局を移転いたしましたので、  
ご通知申し上げます。

〒530 大阪市北区天神橋二丁目北二一—一七〇—二

(地下鉄谷町線南森町三番出口北二〇米東側スラッイン南森町七F)

日本川柳協会

電話 (〇六〇) 三五二二—二二二一  
FAX (〇六〇) 三五二二—二二二一  
振替口座 (大阪七) 三五七五



## 第7回国民文化祭・石川92 短詩型の美文芸大会 川柳募集要項



未発表作品(厳守) 各題二句(二題一人選)

課題及び

一次選者

宿題(事前投句)

「交流」大森風来子・田口 麦彦

「ことば」渡邊 蓮夫・木野由紀子

「名人」白井 花戦・丹羽 斐舟

宿題(当日投句)

「松」黒沢かかし・佐伯みどり

「織る」橋高 薫風・野口 初枝

「山田 良行・石川 三昌・津田 三郎、他九名。

平成四年四月二日(休)〜六月三十日(火)(当日消印有効)

※ただし、海外投句作品は応募期間内に必着のこと。

千円(ただし、海外投句者は無料)

応募料は郵便小為替にし、作品に同封して御送付ください。

所定用紙または二百字詰原稿用紙を使用し、住所、氏名、

性別、年齢、電話番号、大会当日参加の有無を明記。

賞(予定)

文部大臣奨励賞 国民文化祭実行委員会会長賞 石川県知事賞

第7回国民文化祭石川県実行委員会会長賞 石川県教育委員会

教育長賞 根上町教育委員会教育長賞 (出)全日本

川柳協会会長賞

〒九二九〇—一 石川県能美郡根上町中町子九五

根上町教育委員会内「国民文化祭 川柳大会」係

TEL 0761-551-1693

主催者

石川県 石川県教育委員会 根上町 根上町教育委

員会 日本川柳協会 石川県文芸協会 石川県川柳協会

第7回国民文化祭石川県実行委員会 第7回国民文化祭根上

町実行委員会

(川柳大会・吟行)

(合同大会・懇親会)

日時 平成四年十月二十九日(木) 十時〜十七時

会場 根上町立浜小学校特設会場(石川県能美郡根上町中町力一四)

日時 平成四年十月三十日(金) 十時〜十四時半

会場 金沢市観光会館(石川県金沢市下本多町六番丁二七番地)

# 紫とスランブ

## 西尾 葉

緑が日に日に濃くなってきた。早春に目立つた鮮黄の花々の舞台も去り、代つてほのかな薄紫の花の色が目にはやさい。五月という季節は、ムラサキの色に包まれる。

テッセンは垣根に蔓を伸ばして、濃い紫の六弁花で咲き、花大根は畔や道端に一面に咲く。アヤメ、カキツバタはいずれ劣らずあでやかで、裏の山では桐の高木に筒形の花が空に浮かぶ。

本来はムラサキは草の名であって、色の名ではない。むらがり咲くからムラサキという説もある。古代中国では、聖人君子の用うべからざる色として必ずしも

珍重されなかったが、日本では王朝を代表する至高の色になった。「花も糸も紙もすべて、なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ」と枕草子は言う。

草臥れて宿かる比や藤の花

有名な芭蕉の句である。貞享五年四月、大和の八木あたりでの作という。

××××××××××××

スランブというのがある。

あれは仲々辛いものである。辛いからよけい安易に楽しようということになるが、そうなるとかえって脱却出来ないのがスランブだ。ところが、これじやいかに、よし苦勞に直面してその中に自分を没入させてやろう。そう決心したとき、実はスランブから脱却出来る光明が、すでにさしてきているときといつてよい。作句を始めて五年に一度か、十年に二度、周期的にスランブになる。いわゆる壁に

突き当るのである。つき当たった壁を破つて向うへ進まねばならない。はね返されたらそれまでである。どうしてもつき破らなければならぬ。つき破るのはどうするか。手を拱いては破れない。句会へ足しげく通つて他人の句にもまれないはならない。また好きな先輩の句集を徹夜して読了しなければならぬ。

よくこんな話をきく。スランブを脱却するために、一つ山へ登つて心機一転してみようなどと考える人があがるが、あれは嘘だ。レクリエーションになるが、スランブ脱却にはならない。ただただ、まつしぐらに行くんだ。体当りで、苦しいところへ飛び込む。するとその気魄だけで、壁は破れるのである。スランブから脱却できるものである。

これは八十三歳になった私自身に言いきかせている言葉である。

座右の句

勲章の欲しい七歳七十歳

(薫風)

私の句

ちちろ虫 階下に妻という他人

瀧北博史

# 川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

## ■巻頭言 紫とスランプ

遺言との出遇い

西尾 栞 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

野村太茂津 …… (2)

自選集

西尾 栞選 …… (4)

川柳の群像 平賀紅寿

東野 大八 …… (44)

■古川柳 柳籠裏三篇研究 (十二丁)

水煙抄

黒川紫香選 …… (48)

秀句鑑賞

同人吟  
水煙抄

大矢 十郎 …… (43)

句評リレー

西出楓楽・三宅保州・舟渡杏花・高杉鬼遊 …… (68)

大空のこころ (17)

橘 高 薫風 …… (81)

## 遺言との出遇い

野村 太茂津



もつあかんと覚悟したので。

「わかれの言葉」を書きのこします。

あなたは、私のわがまま生活で長い間苦労をかけて、何一つ楽な目をささず、一生のどたん場になって思いもよらぬ大病にかかり、あなたは寝食をわすれての介抱をしてくれたことを、心の底から感謝しながら、一足お先きへ失礼いたします。

あなたは、遺族年金その他で、貧しいながらも暮らして行きますから高嶋さんへお願いして、この町内(こないない町内)はありません)でおらしていただき、健康に注意して達者で長生きして下さい。

たいへんお世話になったこと幾重にも感謝して、おわかれいたします。

清次

妻へ

以上は、川柳界の小林一茶と言われている私たちの先輩、須崎豆秋さんの遺言です。

四月の本社句会で高杉鬼遊さんから拝借し

銀河系	河内天笑選	(74)
茴香の花	八木千代選	(78)
■ひみこさろん「若葉の頃に」	町田達子・小白金房子	(80)
「音楽」	渥美弧秀選	(82)
一路集「休む」	北川竹萌選	(82)
「速い」	阿部柳太選	(82)
初歩教室「揺れる」	吉岡美房	(84)
四月本社句会		(86)
各地柳壇(佳句地十選/青枝鉄治)		(90)
■川柳こぼれ話 私の川柳修行	田中正坊	(103)
柳界展望		(104)
五月各地句会案内		(105)
■編集後記		(106)

座右の句

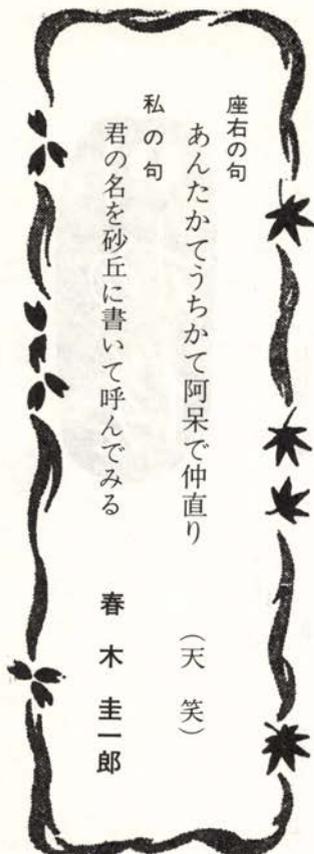
あんたかてうちかて阿呆で仲直り

(天笑)

私の句

君の名を砂丘に書いて呼んでみる

春木圭一郎



た全文で、そのあとに、朝日新聞(昭和四十二年七月十六日)「日本の年輪」川柳のコラムから、馬場博治記者の述懐を、鬼遊さんがメモされていますので、それも記述します。

『遺書という暗さはまるで無い。語りともいえぬその表現の流れ、転調のあざやかさ、私はそこに、川柳を知る手がかりのようなものがあると思った』以上

そこで私が何故この欄に載せたかと申しますと、五月四日は豆秋忌、誕生は明治二十五年九月十日、忌日は昭和三十六年、六十九歳でした。私は前月、みどりの日で満七十七歳、幸いにも健康に恵まれ、来月六月十三日—十四日は、第十六回全日本川柳和歌山大会の実行委員長をお引き受けしています。

大会の準備運営は、堀端三男氏が事務局長として万全を期し、全力を注いで努めてくれていますので、私は、お一人でも多く和歌山へ参加して戴こう、「一人でも多く」と希って各社・各句会を走り回っている時、鬼遊さんから、この「豆秋遺言」に出遇いました。

私の遺言は、既に七年前(古稀)に書き直してありましたが、これを開封して書き直し、先々月から少しずつ書き溜めていた私の生かされてきた歴史(自叙伝)に編入して遺そうと考へ、この大会と喜寿を記念して、句文集とともに遺したいと思っています。須崎豆秋句集「ふるさと」を読みながら。



西尾 葉選

島根県 堀江正朗

少年の日よ見えた日よ桜咲く

正論を吐いて盲人忘れてた

失明にのつべらぼうなことが増え

世の流れ竹踏みながら踏みながら

愚痴こぼすよりも軍歌で背を伸ばす

春に手が届け大きく深呼吸

島根県 佐々木 芳 正  
ハナハトですかいえサイタサイタです

備忘欄に書いてケロツと忘れてた

代償を求めぬ母の五十肩

法灯の重さ知ってる五条袈裟

仲人の褒め過ぎでした離婚沙汰

ジレンマの夜が更けていく癌告知

和歌山市 木本朱夏

猫を呼ぶ声に始まる母の朝(立春の朝 母急逝)

立春の別れとなりぬ寒桜

花びらのような微笑の残る顔

百合匂う母の在さぬ夜の底

春の絵に母の帽子が見当らず

間歇泉のように悲しみ溢れ来よ

唐津市 久保正敏

足の指貸そうと妻が過去を言う

ナツメロが好きな飯場の欠け茶碗

賞味期間捨ててハイミス今の地位

都合した好意を女弄ぶ

銃痕を曝すと菊の紋が浮く

裏切りの明日とも知らず老いの野火

今治市 矢野佳雲

無駄みんな除くと生きるのさえ無駄で

頂点に立つといくつも影が出来

握ったら飛び出しそうな紙コップ

貴方との縁で優しい姑が出来

休め休めと日本この先どうなるの

山に来て作法はいらぬ岩清水

吹田市 山本 希久子

逆らわずおこう丸いテーブルに着く  
尋常でない別れなりエアポート  
別れましよ理由などない千切れ雲

折れてくれる母あり里へ続く道

なたね梅雨早目早目の母の思慮

政治家の無理を聞かぬのも情け

藤井寺市 吉岡 美房

水ごころですと札束書いてある  
擦り切れてしまった襟をどう正す

五十歩が百歩を責める猿芝居

限界へ男涙の鬚を切る

大阪で蛸焼き食べて来たはなし

妻の忌の幾度めぐる花の冷え

松江市 舟木 与根一

日本の広さは雪と花便り  
日溜りでパブルの桁を数えてる

のら猫のほうごもてる春の宵

花咲かすことも大根知っており

少女から脱皮してゆく流し雛

十六のお嫁だったと聞く米寿

竹原市 小島 蘭 幸

蘭が届いて蘭の花言葉を知らぬ  
ホワイトデーやさしい男などいらぬ

父の忌よ古い時計はまだ動く

銀の色紙は恩師の匂い恩師の忌

集団登校古い屋並が続くなり

花粉症になってしまった鬼瓦

下関市 石川 侃流洞

神様へ内緒遣伝子組みおわる

馬に性合わせるコツも武豊

焦点を少しずらして揉み手する

黒幕のその黒幕にドンが居た

シヤネル5の嘘から骨が溶けかかる

詰め将棋のようにはいかぬ詩心

美禰市 安平次 弘道

ちっばけな秘密へ眠り浅くなる

伝言板消して別れを意識する

偏差値で子の未来図が描けますか

面白い言葉男の意地が安っぽい

バックミラー覗くと浮かぶ罪の数

大阪市 江城 修史

白い旗まだまだ振れぬ腎不全

善人であるからいつも疲れ果て

腎不全お金が欲しくなりました

今だけの今日の命をいとおしむ

振り向けば背中ばかりの寒い街

特高の復活あるやも知れぬ国

愛の奇蹟 男の髭がよくのびる  
丸木橋渡る男の子を宿す

堺市 板尾 岳人

悪戯して叱られているかしわ餅  
鉛筆を削って亡母を恋しがる

抱かれても紙人形の無言劇

松原市 玉置 重人

お水取り済んで油断をしましう

椅子ひとつ空いて喜劇の幕があき

隠しごとないとは味気ない夫婦

大切な一日なのに短すぎ

外股で歩いていきます均等法

米子市 林 荒介

木の橋を渡って春に逢いに行く

平熱平脈秘密は何もありません

病院の特別室のかくれんぼ

旅から旅ポストの赤にほっとする

旅立ちの鈴が湿って来たようだ

倉吉市 奥谷 弘朗

幸せを他人にあげる人に成る

うらぶれた心故郷の灯が癒す

気遣いと言えずマニアといつてやり

口紅があまり喋るといやになる

黙礼の美人どなたと妻が聞く

なにながなくても春には春のすしがある  
人ひとり許せば天が高くなる  
横に振る首も時にはもっている  
老骨が軋んで明日の絵が画けぬ  
五人の子守る灯台守りとなり

岡山県 嘉数 兆代賀

老夫婦さみしい話でねてしま

奈良市 宮口 笛生

野良猫に飯やっている老夫婦

三月の畑菜の花ネギ坊主

莓ハウスの温度が冬を狂わせる

一服のコブ茶大安匂わせる

死ぬほどに愛してるなら死ねばよい

名古屋 越村 枯梢

大正生れ脳裏離れぬ枯すき

猫の恋 猫は必死に生きている

やがてやがてと言つて傘寿を迎えたり

檜山行の荷物に煙草たと詰め

倉敷市 小野 克枝

歩道橋叩いて渡る生きている

波の無い性で支えた母の道

真四角な炬燵で夫婦演じ切る

道標の向きを変えたら虹が見え

負けそうな女きれいに笑います

大阪市 西出楓楽

鳥取県 新家完司

自分を見捨てられたら楽になれるかな  
去る者を追ってはまった落し穴

見ておこう特別養護老人ホーム  
橋の名も知らず毎日渡っている

水音のきこえる町で安らぎぬ

旅人が海の青さを言っている  
わたしより若い男が死んでゆく

姑の位置で振ってるむしろ旗

望遠鏡のぞいて春を待っている

大安のロビーに落ちている喜劇

我田引水漏れてる水に気がつかず

松江市 柳楽鶴丸

豊中市 安藤寿美子

影法師お前も頭が禿げたかい

渋滞のまった中に佐川急便

神頼みそんな記憶はご座居ません

実梅とる梅林ですと不愛想

三猿主義それじゃ何も出来ません

ミニクラス会になつて立ち話

セクハラでお咎めのない春一番

ばあさんがトミちゃんスミちゃんと呼び合つて

均等法男女逆転のドラマです

定年で男のおい消えていき

島根県 小砂白汀

豊中市 田中正坊

オカリナの妙音古代を呼びもどし

ユダキつと一人は混じる男の輪

粗大ゴミそのうち文化遺産です

点火せぬのろしを今も抱いている

暖冬も三寒四温を手放さぬ

憲法を学び直している不幸

兎も角ものらりくらりと生きてやる

泥靴で憲法蹴るな小沢クン

軍隊の水虫つれて五十年

女ひとり明日は誰のために生きる

鳥取県 土橋螢

八尾市 宮西弥生

恋はまた陽炎となる別れなり

回り道回り道してひとり旅

待ちぼうけ狂奏曲を聞いている

大の字に寝ころぶ畳の間が一つ

春の乱 私だけが風邪をひく

寝ころんで上司の噂旅の夜

しまったと気付くお礼をもう一度

春の窓固くしめとく花粉症

息子たちがいるから今日は日曜日

富山市 舟渡 杏花

投書欄 みんな迷っているんだね  
あなた分 生きるこの世に疲れ気味  
いろいろの匂いと出会ふ街が好き  
聖書開く 伴せになれそうもない  
愛語百遍 憎いあなたをまた許す

堺市 藤井 一二三

誰も怨まず捨て犬の眠りこけ  
悲話いまに城梅林の続く果て  
金屏風背に盆梅の畏まり  
女の先生だけを泣かせて卒業す  
さいごの最後おんなが悪い籤を引く

堺市 高橋 千万子

真実を語れぬ女と深い仲  
許されず許さず二人の春終る  
がたがたになつても医者へ梯子する  
出産のよろこびへだてない嫁姑  
どさくさもよしよろこびの日が暮れる

堺市 楊井 二南

底意地を張らねば急場凌げない  
同罪にされては困る桁違い  
東奔西走老化防止に事欠かぬ  
薄墨で描かねば渦が活きて来ぬ  
祝電を打って出席見合わせる

堺市 黒田 真砂

病む友にリハビリ中の見舞状  
乾燥機かけて楽しい夢を待つ  
夢二の絵見て想い出す亡母の櫛  
コーヒーの香り楽しむ今朝の冷え  
良き友に恵まれ湯の旅よくしゃべり

堺市 一瀬 福一

裏庭の柿を盗みに来たカメラ  
ウインクに答える財布軽すぎる  
白髪がなんだ十代からあつた俺  
出戻りの嫁に渡した蔵の鍵  
決断は明日にまわして濁り酒

堺市 柿花 紀美女

手あぶりの火鉢に和む通夜の席  
ライバルが大きく見えて気が焦り  
悲しみも喜びもくれた子は父に  
真夜中の心音を聞く生きるとは  
戦時下の苦悩もおぼろ日向ぼこ

島根県 堀江 芳子

七十の情熱とかすペンの先  
戦盲の夫にも春の跳ねる音  
溢れでるポットも笑うことが好き  
専業主婦かるがる言つて座にあまえ  
縁先に春陽のんのん茶筌かな

廿日市市 林野甦光

島根県 西村早苗

面映い顔で勝馬披露され

花吹雪の中で擬宝珠ただ無口

紙を折る女の指が人を恋い

ライバルの隣に妻が写つてる

出世した男に義理がからみつき

今治市 越智一水

ごめんなさいそのひと言へ出る笑い

すみませんと言つて図々しい女

耕運機春だ春だと音を立て

変る世にやっぱり勝つた智仁勇

ライバルの指名を鞭のように受け

西条市 片上明水

酒飲まぬ子も居てそれも気にかかり

置物の向きを回して客を待つ

昨日した強い握手をもう忘れ

縁を切る別れ小さい小さい判

栄転の酒注ぎ足され注ぎ足され

大田市 藤田軒太楼

熟年の気配り隅々へ行き届き

熟年の風格新春の床を背に

年金のお蔭風邪氣いたわれ

結構な話じゃないかと指丸め

来宅の御師がなんと保険屋さん

烏ふと夕陽を受けて押し黙り

いつか秋トンボと話す草を刈り

メロン切る賑やかな娘がまだ嫁かぬ

まに受けてはじばかりをかいて居る

たった一つの別れ言葉が出て来ない

高知県 赤川菊野

世の移りじつと見下す天守閣

頂上の一步手前にある油断

前進をせねば地球に置き去りに

他人なら許せる事が許せない

孤の城を時々鬼が来てのぞく

東大阪市 森下愛論

独居老人税金をちと値切り

戦中派言われたくない背を伸ばし

黒ネクタイ締めるだけとはなった齡

墨をすり終つたら書く氣失せ

朝帰り叱つてくれる者もなし

奈良市 天正千梢

雪しんしん昔話を手ばなさず

民話読みつつ今夜はしっかり積もるだろ

急流下り運命共同体の水しぶき

ジグソーパズル完成しない旅なかば

ふところに反旗を入れて千鳥足

奈良県 上田 翠光

死神のニアミスならん胸苦し  
巻き戻して吾が生きざまを洗う日々

シルバー住宅の心配りに目を凝らす  
人の世の最終コーナーひた走る

金婚の背を流し合う露天風呂

奈良県 田中 紀美代

やりくりはもう止めました春だもの

美しい嘘が出かかる花の前

妻と娘の話すむまで昼寝する

うちの犬 美人に会うと立ち止まり

仲良しの隣に言えぬ友が出来

奈良県 長谷川 春蘭

足踏みをして電車待つ間の寒もどり

余生なお世渡り下手の春の風邪

寄せ鍋に心をほぐし身をほぐし

チューリップ親指姫も目覚む頃

姉のような母より離れ卒業す

笠岡市 松本 忠三

パチンコにも名人がおり食事中

漬物の石じいちゃんには無理だろか

旅は道づれ喧嘩をして帰り

じいちゃんは除外孫まで馬鹿にする

講演に欠伸が移る三列目

柳井市 弘津 柳慶

補聴器の返事大きく返って来  
胃腸薬飲んで今夜は早寝する

気晴しに温泉旅行誘われる  
空想はうれい事が続いている

かあちゃんよ私も喜寿を迎えたよ

大阪市 河井 庸佑

叱られるうちが花だと諦める

良い方に解釈をする余裕見せ

肝心な言葉足らずが生む誤解

冷静になれば何でもないと話

親の目に自信過剰を危ながる

大阪市 津守 柳伸

また少しかしこくさせる申告期

芯強い女が迷う渡月橋

雪吊りが車窓で見えぬ兼六園

梅水仙桃もせわしい花暦

ホスピスに行くまで我慢する気儘

大阪市 藤田 頂留子

運転席子らにはふれたいものばかり

底辺でまだ明日あると負けおしみ

テストケースにされそこでこは黙つとく

不況風ちよつと淋しい鯉のぼり

いつごろか夢が野心にすり変り

大阪市 神夏磯 典子

大阪市 中 西 兼治郎

山々は緑溢れて花粉症  
一日が重い言葉の行き違い  
神だつて祈願の絵馬にのせられる

棘を抜く技が上手になつて姑  
みそ汁を注ぐ幸せがある茶の間

大阪市 本間 満津子

忘れずに命の大地春巡る  
掌を合わすと亡母はいつでも来てくれる  
忘れたいことはちやんと覚えてる

別な私に相談をするひとり言  
新札がいそいそ出て行く三四月

大阪市 北 勝美

白魚へ四つ手網の早い春  
白木蓮妖しいまでに月おぼろ  
切れ味を音で聞いている鉤くず

寝ころべば西方浄土という姿  
莫山の心和ます書百話

大阪市 井上 白峰

老いてなお背伸びしている影法師  
建前と本音で議論噛み合わず

老いてなお女誇示する白い足袋  
手の内を読まれ無心を言い出せず

例えばの話で急所衝いて来る

エレベーター恐い凶器になる深夜  
まだ死語にしてはならない孝の文字  
口きかぬ妻と今日から根比べ  
恋知つて母にはすまぬうそもつき  
見栄と義理一緒につつむ祝金

大阪市 榎本 落児

神様も私も嘘をついている  
アベックの視線それぞれ別のとこ  
新聞のチラシに妻の朝がある  
結水の湖にも生命溢れてる

消去法私に何が残るやら

大阪市 北山 悟郎

税務署はつじつま合えば仏様  
相合傘片身が濡れて心地良い  
幸せがこんなに旨いお赤飯

椅子深くかけて血汐しずめてる  
自信過剰突然崖の上に立つ

大阪市 上田 柳影

食欲はまだまだ落ちぬ万歩計  
お茶漬でよいと三次会から帰り

鳩時計鳴かなくなつて冷える部屋  
もう一度会いたい傘を借りてゆく  
通勤のラッシュに嘔二つ三つ

大阪市 板東倫子

寒椿 岡田嘉子を悼む夜  
親不在教師不在の教育論

日章旗 新人類が揚げてくれ  
自分史の中の男はみなずるい  
大学卒の紳士老獪な知能犯

大阪市 稲本凡子

今日習った英語を試す幼稚園  
風邪熱がわたしをまたも甘くする  
狂わせたお酒に知らん顔される  
体調を崩すと耳鳴り威張りだす  
何所までが仕事でしようか午前二時

西宮市 林はつ絵

一斉に枯木が芽吹く負けられぬ  
この先に何か芽がある通せんぼ  
賢母と言うレットテルの色塗り替わる  
氷山の一角風に知らされる  
アイデアが湧くかも知れず公園へ

西宮市 奥田みつ子

三寒四温 春へわたしも揺れている  
年金が急に身近になって春  
とびきりのツキを拾いに街へ行く  
時々二十歳の頃を散歩する  
空港へ降り平凡な顔になる

西宮市 門谷たず子

すこし弱味があるのでだまって聞いておく  
言葉尻に本音がみえて寒い風  
厄はすんだが息子の踏絵まだつづく  
キッチンの椅子にわたしの自負がある  
鍋も茶碗も一人の音です夫の留守

西宮市 西口いわゑ

あの頃にもどってみたい伸びたゴム  
コンパクト女の欲は果てしない  
やぶ椿今年も待っていてくれた  
ゆりかもめ私もゆれる春の鬱  
花の芽と春の話をしています

西宮市 瀬尾六郎太

東西伽藍有縁の古都の町  
梅地下に信号機欲しラッシュアワー  
雪文化大原大倉裏舞台(札幌)  
よくあるね上が上なら下も下(政財界パブル橋)  
泥に泥 目を病まないかムツゴロウ

尼崎市 春城武庫坊

焼酎にびつたりりの菜閏二月  
啓蟄に春セーターを出して着る  
新語辞典の中味狂わす週刊誌  
刷毛持って昨日の恥を消しに行く  
下駄の音好きな木屋町春の雨

尼崎市 春城 年代

暗闇を這いずりまわる夢ばかり  
夢占いのその正体を見きわめる  
あなたとわたしのおとぎばなしに咲く椿  
目白ひよどり庭は椿の真つ盛り  
沈丁花 亡父を偲べというように

尼崎市 奥山 美智子

万歩計 青葉若葉が目にしみる  
こいのぼり私の夢も泳がせる  
企みを持たぬ時計がちと遅れ  
願いごと たたけよさらば開かれる  
途切れても一途に紡ぐ愛がある

尼崎市 田中 薫

人形のうしろ姿にある涙  
なれそめのことなど芋の焼けるまで  
人並みの欲でバブルの波かぶる  
傷ついた方は憶えている痛み  
従順でないのも群にいる羊

宝塚市 吉田 笑女

焼きたてのパンも売ってる散歩道  
散歩には何時も持つてる小銭入れ  
遺されて泣くも笑うも独りぼち  
勘違いしたのか小雪舞い戻り  
夫の死後 嫁の口数急に増え

伊丹市 山崎 君子

散歩みち春の出逢いが待っている  
暖冬で中途半端な冬支度  
昆陽池の永住権をもつまがも  
里帰り過去が出てくるみちをゆく  
花だけを賞めて帰った御用きき

神戸市 山口 美穂

まだ揺れているのに決意として書く日記  
小さい嘘ひとり歩きで変身し  
たくあんを老母が羨む音で噛む  
代役がないので忙しく元気です  
反対の意見が咽にひっかかり

神戸市 中村 ゆきを

菜の花の天にUFO浮ばせて  
祝辞ながなが代議士すぐ帰り  
金婚式あの山越えて谷越えて  
掘りおこし春三月の道つまる  
上役の都合で人事くるくると

宝塚市 丸山 よし津

気休めの数字出してる万歩計  
自分史の汚点きれいに塗り替える  
仕舞湯できれいに流すきょうの傷  
偏差値も社会に出れば風化する  
争う事嫌いで輪から一步出る

姫路市 人見翠記

春の雪梅見の客も雪宿り

流れるは思い出のタンゴ血は躍る

もう履けぬダンシングシューズ捨てられず

驚きはドナルドキーンの古典好き

隠居部屋雛の掛軸春の風

姫路市 大原葉香

たった一人の愛を待つてるポタン穴

地表の風 天上の風相容れぬ

切れた尻尾の方に幸せ残っている

どうもがいてもけし粒程の命です

夢は夢他人に話さぬ方がよい

姫路市 丁坪サワ子

ハートチョコ米寿の胸にもさざ波を

骨パット外してからの貞女です

母と娘で見る目が違う婿えらび

有名税のように従いてるスキヤンダル

世界一周リユック一つで孫娘

姫路市 中塚遊峰

それからを本音で言わす聞き上手

残り火をせめて趣味にと燃やす老母

罪一つ花心に秘めて修羅も老い

古希峠 日めぐりまさに矢の如し

諸行無常我が散りざまをひしひしと

羽曳野市 田中透太

ライバルの歩幅気になる登り坂

昨年約束守る花の下

葉桜の道にも春の後遺症

加速をつけて娘が嫁に行く

もう少し馬鹿になったら癒る傷

羽曳野市 榎本吐来

説教の途絶えた父を値踏みされ

饒舌の過ぎたネクタイ締め直す

自慢話ちよっぴり嘘も混ぜておく

リップサービス過ぎたお酒が醒めてくる

朝刊へ朱線を引いているやる気

羽曳野市 吉川寿美

方程式解けて世の裏人の裏

人妻のフランス小咄聞いている

よってたかって手垢まみれにする噂

郵便受けが今日も叛いて黄昏る

ぬるま湯の中で妥協を強いられる

松原市 小池しげお

唇が厚くてなぐさめなど言わぬ

口ごもる返事に水をむけてやる

銀行へ入る真似したこともあり

古くさい知恵で納得させてくる

飯粒よ目が潰れると聞かされた

富田林市 松本 今日子

雪の降る景色の中の観覧車  
若い人羨んでいる暇はなし

まだ若い思っているだけ母の肩  
道連れになつてあげたい人がいる

明日香路に降れば昔の雪になる

富田林市 片岡 智恵子

冷凍庫探しにいった雪だるま  
入り陽真つ赤若いつもりの春の服

来た道はいずれ一人で帰る道

鮫鱈のだらり怠惰平和主義

天に極楽 地に杭州と言わしめる

河内長野市 井上 喜 醉

切り札を奥歯の中に噛んでいる  
悪友が一番先に来た見舞い

巢立ちする翼試練の向い風

好きなだけ喋ってストレス持たぬ妻

欲求不満ためず夫婦で旅ガラス

河内長野市 植村 喜 代

金メダル日本の顔も若さから  
その先は見えているのに騙される

教科書もなくて親は子を育て

人はみな何かの縁で友が増え

失敗も恥も芸人芸増やし

東大阪市 崎山 美子

嫁の笛にあわせて踊る三世代  
上手下手よりも心のかくし味

初舞台義理の花束ひとつだけ  
結局は嫁に従うことにする

車椅子嫁に押されて今日も暮れ

阪南市 坂口 公 子

飾らない母が自負する白い袴  
絡みたい気持ち抑える遠花火

自叙伝の紛飾くらいなら許す

いい話聞き洩らしたと薄い耳

辛口の方へも回る風見鶏

箕面市 坪田 紅 葉

節分がすんだ頃よりマイペース  
まかせたら私がするより行き届く

シルバーを取りあげすぎる世の流れ

何とでも言うなら言えと午前様

ティールーム久しぶりです街の音

高石市 浅野 房 子

夫婦離互いの皺は言わぬこと  
取り敢えず切符だけ買う夢芝居

年寄りの烙印押され出る医院

春の画廊小さな義理を一つ買う

匙加減少しゆるめて様子見る

高槻市 川 島 諷云児

親よりも頼りにしてる友がいる

針箱に妻の涙が溜めてある

ときめきの夢ならなん度でも見たい

我が家でも敷居の高い時がある

年金を飲みにも悪友やって来る

八尾市 古 川 覚然坊

ひと山の野菜が続く孤老生活

長生きをして淋しさに物足らず

お茶摘みの唄甦る宇治の春

京の春 衣裳合せの舞妓さん

口止めをするはしゃべれと言うしるし

八尾市 宮 崎 シマ子

花粉症になったは去年とおなじ日

四五本も思ある傘がたまってる

母の愚痴初耳のように聞いてやり

思い当る節に相槌おしまない

方言になって和解の方へ向き

八尾市 鷺 見 章

蜜豆で誘っておいてプロポーズ

算盤はきっちり弾く叩き売り

靖国で会う約束を永らえて

麦秋の畦にラジオのモーツァルト

カルチャーの男一人は黙すのみ

八尾市 片 上 英 一

嗚呼上野 中近東が乱れ交う

なんと言うことなく過ぎて誕生日

寅さんの恋ならいつもしています

シェイプアップじつと観ているタマとボク

相性ってあるものですね血の絆

八尾市 山 下 美津留

駅裏の赤提灯で蘇る

よちよちも混じる散歩で和やかな

借物の臓器で今も元気です

年金の暮しへ桜待って居ず

鬼の面作ると妻に似てしま

八尾市 高 杉 千 歩

鬼さんに留守ばかりさせ五月

晩学はカタカナ文字に悩まされ

お遊びが仕事になって正誤表

ブランドに凝ってパートに精を出す

残り火をかきたてながら英会話

八尾市 吉 村 一 風

居らぬ時ほめた言葉が活きてくる

聞く耳を持つと世間も広うなり

ほほえんで歩けば風も柔らかい

信楽の笑った狸みつからぬ

幸せは隣に来てるかも知れぬ

由緒ある町名変えて西東

寝屋川市 岸野 あやめ

わたくしの本籍今はビルの中

駅前通り銀座とつけて田舎町

時代劇若殿様は握り箸

欠席裁判街の雀は噂好き

寝屋川市 江口 度

快適な暮しオゾンに穴をあけ

住みわかる動物の知恵学ばねば

いつからか我慢してるのはオトコ

申し訳ほど醤油をかけてくれる老妻

ずばら屋の太鼓も温泉旅行とか

寝屋川市 柴田 英壬子

五月病にしておきましよう深い悼

賤や賤舞えば主人が出ぬものか

青年がやさしいチーズ造る丘

ゴシツプを軽くないなして住み替える

春愁やハウレン草をゆですぎて

寝屋川市 稲葉 冬葉

銭湯へ通うわたしの散歩道

百歳の申告お疲れのないように

玉子酒 亡夫の夢を見せてくれ

夢に見た千灯供養の灯が揺れる

針供養 姑は達者な指を持ち

寝屋川市 平松 かすみ

お化粧のその手も年を重ねけり

助手席の無口ときどき覗かれる

噂種まいてるのはご本人

寝たきりも地球も病んで困ったな

ゴシツプは太平洋をひと跨ぎ

守口市 羽原 静歩

第九条 有情無情の風が吹き

きんさんときんさんが乗る五月の渡し舟

孫が来て仏の花をかえてくれ

鯉のぼり風がないのか昼寝する(幼稚園)

参観日イミテーションの指輪はめ

守口市 結城 君子

今年また命ありけり沈丁花

映像のいざないミクロの世界まで

ゆきくれて引き返す道わからない

ガラス展夢遊病者のように見る

シリウスも見えず都会の空陀し

守口市 森川 まさお

救急車通ると犬が唸りだす

風邪心地花屋の前で立止まる

この陽気表札見ながら散歩する

病人は語らずカーテン青にして

イエスノー戸惑いながら春になる



岸和田市 植山武助

世を拗ねたように悠々自適する  
体調はよく似て六十路を話し合う

金に不自由しない干支だと言ってくれ

解説は当り障りのない言葉

大部屋から個室へ移る人の口

岸和田市 福浦勝晴

侵略国の走狗となりて恠怩たり(第二次大戦回顧 2句)

昔見た水の蘇州は夢のごと

深夜目醒めニヒルの壁と対話する

見え見えのお世辞並べて見舞客

影だけが俺を信じてついでくる

岸和田市 島崎 富士子

倅せは庭でウグイス聞く住居

掃除機もお年 時々うなります

国なまりだんだん心が温くなる

おとぼけの顔も出来ます老いの知恵

口達者孫はテレビのコピーです

岸和田市 原 さよ子

嬉しさがうっかり口をすべらせる

孫の無理聞いて与えて叱られる

早春の朝餉の彩は菜種漬

るんるんの春へ悲しい花粉症

春うらら孫のお供の演奏会

岸和田市 古野ひで

その香り亡母の面影沈丁花

塩昆布深い味付け老母のもの

ふるさとに老母は質素にひとり住み

春雨の温みに息吹く森の精

夫逝きしこの空白を何としよう

岸和田市 清野こう

口惜しさに泣いていどんでいる気鋭

漂流の命支えて来た気鋭

二月堂修二会本行火が躍る

お葬式なつかしい顔かおと逢う

むかし姑 老いては嫁に聞く苦情

岸和田市 高須賀 金太

二番手がぼくの性には合っている

二人だけの暮らしぼちぼち準備しよう

むずかしい理屈はいらん野草です

労使協調とても聞こえは良いけれど

菜種梅雨初恋の女のことなど

岸和田市 芳地 狸村

江戸時代の顔が並んだ石燈籠(春日大社)

暗夜行路生んだ机が光ってる(志賀直哉旧居)

味のあるせりふに酔っている役者

まさかとは思うが検査の結果待ち

一言が多くて悶着絶えません

レ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

政界は腐敗 律気な木瓜が咲く  
目の光る脇役がいる旅一座

運命の出会いだなんて大そうな

ホームレスのおっちゃん鳩 僕もいる

ご近所に宅配便がよく止まる

大阪府 靱 山 隆

満願の日の参道は花道だ

若草の色に雷鳥羽つくろい

暁は覚えてからの一眠り

傷一つ影の長さがつきまとう

少年のようにときめく老いの思慕

和歌山市 堀 端 三 男

受験期になると学文路の切符売れ

明けぬ夜は無いと辛抱論される

ブランドを纏うてころろ飢えている

まつり上げられて梯子も外される

根掘り葉掘りひとりのわけを聞く他人

和歌山市 若 宮 武 雄

その話もう止しましょう春の宵

せち辛い世を見限ったちぎれ雲

かと言って自分の背なをまだ知らず

過疎に泣く里の空気の甘いこと

わが肚を見きわめたくて目をつぶる

和歌山市 福 本 英 子

のぞみまだ捨てぬ点滴落ちている  
ボーイソプラノいつかは叛く喉仏

あやふやな席で離せぬ広辞苑

突然の知らせが続く落ち椿

このローン終ればきつと春がくる

和歌山市 内 芝 登志代

リボンつけ新車も今日はお嫁入り

出世より優しい顔待つ里の母

パパの靴ちゃんと揃えて女の子

説教をする身となって黄昏る

苦勞した母のおかげで今日を生き

和歌山市 松 原 寿 子

輝ける一樹よ春はすぐそこに

絵ハガキと和み貴方の声を聴く

約束をしている指が血を慕う

コバルトブルーの海へふたりの影折れる  
火のような鼓動たしかに十指にも

和歌山市 垂 井 千寿子

子の夢の役に立つなら担がれる

飾られた言葉にいつか泳がされ

今日もまた無事に過ごした弥次郎兵衛

真相のページは白い日記帳

辛い点男につけてまだ独り

和歌山市 細川稚代

相槌が細くなるから切る電話

空っぽになるまで話す友が居る

五十年経って好きだと言われても

菖蒲咲く頃に会えると言う便り

意見まだはつきり言えるロバの耳

和歌山市 桜井千秀

母に似ずよかつたなんてズバリ言う

大根おろし指までおろさなくつても

小出しした話に尾鰭つけられる

モノモライ治してくれた柘植の櫛

存在の価値は認めている自分

和歌山市 山川克子

気が楽になるならお泣きなんて酒

無駄遣いではないこれも授業料

遠い日の記憶の中の白い花

青い芽の主張かくより抱き上げて

浮き浮きと春には春のテンポで詩

和歌山市 福井桂香

ためらえば戻るほかなしかもめ達

マゼランも知らぬわたしの夢航路

燃え尽きることが本懐かもしれぬ

モディリアニめくる女も長い首

さわさわと笹かまぼこを口に入れ

和歌山市 田中輝子

渦中から生還誇り高き父

四季折々の花と互角に生きている

ムダな日は一日もなし誤字脱字

お互いのためと遮断機おりたまま

手を洗う明日の絆を信じ合い

和歌山市 山田高夫

それでいて蚤の夫婦の息は合い

お茶漬けの味で夫婦という絆

人の噂の七十五日 目を瞑る

亡母の顔飾ると部屋が温くなる

肝移植地獄のエンマどう裁く

和歌山市 青枝鉄治

よもぎ餅その彩りに亡母がいる

白酒に酔うてこの娘もいける口

半眼の仏に邪心見透かされ

偏差値のいくさ始まるランドセル

またしても株と総理は下げている

和歌山市 内田結実

木苺が熟れるわたしは片思い

あなたから電話の来ない長い夜

さくらんぼあなたの誘い待っている

ネクタイを選ぶおんなの幸おもう

できすぎた嫁 意地悪がしたくなる

海南市 三宅保州

お互いに少し不幸で仲が良い  
振り向いてくれたら従いて行けるのに  
死にたいと平気な顔で言うおんな  
どん底に堕ちても空は見えている  
胃袋へ自問自答が苦すぎる

有田市 松井かなめ

音痴のうた聞きあきて孫寝つかない  
一夜寝てゆるす気になり皿洗う  
私も老女と呼ばれ死火山か  
この年で人の入院見舞う幸  
古稀の旅 妻したがえてお殿様

和歌山県 西口忠雄

くず籠の中へ道徳心も入れ  
トンネルの悩み知ってる青い空  
口だけは嫌われ役にまわる姉  
聖戦はこゝも悪役ばかり出る  
そらどすえ綺麗な訛りでビル合戦

米子市 小西雄々

口紅も美川憲一なら許す  
記念日へ幸せを足すペンを持つ  
途中下車してから出口見失う  
民芸の技術ほそぼそ裏通り  
カルチャーへ何時しか火花散らす仲

米子市 林瑞枝

水都いま五つの橋に降る星よ  
暖色がいっぱい遠い絵のなかに  
宮沢りえの衿から覗く火の柱  
綿菓子のように変身して見よう  
しめやかな旧家の蔵にあるむかし

米子市 石垣花子

種袋の口がゆるんだ南風  
絵馬の数 神も手抜きがしたくなる  
ゆずられた財布案外軽かった  
いかげんな男に貯まる花名刺  
歴史ブーム平家村にも陽があたり

米子市 澤田千春

鳥影を追うまるで恋人追うように  
仏の好きな昔の歌を供えたい  
雨つぎ池の血圧あがりだす  
山越えて姑の笑顔に逢いにゆく  
想い出の山の吊橋落ちていた

米子市 青戸田鶴

ほんやりと山が霞んでいる平和  
約束が重なってくる花暦  
税務署の中は意外に温かった  
連翹の自己主張には負けてくる  
割りきれぬ想いでみんな散ってゆく

米子市 寺 沢 みどり

いのこずち付けて野遊び隠せない  
庭の絵は池を満たしてから描こう  
満潮へ島はおちおち眠れない  
親友の手術も知らず日向ぼこ  
そう言えば微かにあつた胸さわぎ

米子市 田 中 亜 弥

聞こえますか野がいつせいに息を吹く  
笑い上手な姑でわたし救われる  
島にパチンコ屋ができてから狂い  
分校で巣立つは僕の姉ひとり  
箱のすみで安産ですか油虫

米子市 政 岡 日 枝 子

父母の脈を探ればケンカ好き  
底に光る本を読む  
病室のリング リングのままくさり  
ワルツ踊っているが過労死寸前だ  
疲れ果てた影が律義について来る

米子市 川 上 より子

輪廻の音が混じっているな春霞  
つくしんぼみつけた報のははのふみ  
小姑の肩が上っている彼岸  
樹木医に出合い命をうたう桜  
急逝の母にあやかられて困り

米子市 光 井 玲 子

身内より心の通う友がいる  
誇りかな家中みんな睦まじい  
姑さんと呼ばれて照れた日も遠く  
情報過多バンクしそうな脳細胞  
生真面目な言葉と妥協してしまふ

米子市 新 正 子

掌中の珠ももうすぐ二十四  
知り合えばとてもやさしい鬼だった  
三の矢を放つ準備にとりかかる  
息継ぎを教えて海へ送り出す  
宴から役目が続くのし袋

米子市 金 山 夕 子

人間と言う怪物がにんげん襲う  
雛うらら椿餅からさくら餅  
知識を知らない振りして聞く会話  
教わり上手 教え上手に無駄はない  
神を尊び夜の寝床に包まれる

米子市 茂 理 高 代

模様変え陽気になればしたくなる  
儲かる話心がずるくなつて来る  
消毒をして孫に面会する時世  
通い合う歩幅で歩く鴨一家  
芽吹くよに宥めて種を蒔いている

米子市 白根ふみ

一坪の庭が芽吹いて止まらない  
掘炬燵身の上話ためて春

北帰行いつもの春をとりもどす

風になり無口な人が光りだす

目刺し焼く遠い浜辺のゴム草履

大和高田市 岸本 豊平次

人生の試練早いか遅いだけ

住友の家訓と同じに書いてある

受験シーズン思い出させる沈丁花

今日もまだ売れてはいないショーウインドー

枯れ草を布団に土筆目をさまし

玉野市 小谷 仙山

最後の一言あれが逃げ道だったのか

自己主張出来る限りはやりました

雲一つ迷いが一つとんび舞う

弱肉強食あまりに敵が多すぎる

こわがって面白がってかざら橋

香川県 松村 迷観子

闘いは自分に勝ってからにする

幸運と隣合せて居る不運

段々と会社カラーの顔になり

人様の血で生かされている命

ああしたいこうもしたいと置炬燵

松山市 谷 真風

沈丁を一枝活けて二月だな

露の臺のあさきみどりに迎えられ

何もかもゆるす緑の野のなさけ

るるるるる風は吹いても丸い風

背景に六法全書 広辞苑

宇部市 平田 実男

ポケットの中で緩んで来た拳

袖引いているのに妻のしゃべり好き

子にもブランド着せて家計は火の車

喘息を直してくれた左遷の地

人間も野菜も温室ものが増え

唐津市 田口 虹汀

美しい欲が三面鏡に出る

貪欲の背丈を測る尺がない

摘む度に段々欲の芽が伸びる

雉子にも劣るニュースの母性愛

眼底の遙か彼方の不整脈

唐津市 仁部 四郎

一族の知恵を集めて初節句

無駄話世間話で解いた謎

休日の鏡に俺の主義の彩

連休の朝つれあいに齢を訊き

楼門の縁起は読まず時計読み

唐津市 山口 高明

わたしから逃げる貴男の影法師  
世の中を拗ねてネオンの零れ花  
幸福が二倍双子がまた産れ  
夢で見る貴男は何時も後ろ向き  
止り木の客がお布施でお勘定

唐津市 浜本 義美

点滴が縮む生命をまた伸ばし  
つぎはぎの野良着に遠い旅の夢  
啾々と夜汽車見送る無人駅  
竹の皮肉の値段で買った過去  
遅しき芽ばえ啓蟄の土を割る

唐津市 浜本 ちよ

賛成にばかり手を上げ下級武士  
花でさえ明るい方を向いて咲く  
腕前はどうかあれ気っ風の良人大工  
賑いを見せた座敷を片付ける  
人の性数に溺れて身を流す

呉市 槇田 英詩

椿よ少女よ何も慌てて咲かいても  
あと幾度の四季か失うものばかり  
氣息奄々水車に雨が降ってこぬ  
ウーマンの口鉄砲に音をあげる  
ほどほどの酒量の老いのやさしい目

竹原市 森井 菁居

友情に甘え伸び切れないでいる  
手を抜いたツケがその内やってくる  
策士の孤独灰皿だけが知っている  
四捨五入すれば二十歳の自覚かも  
自宅通学親孝行と思いたし

竹原市 時広 一路

何も策なくても心持っている  
小気味よい毒舌耳を離さない  
雨止んで池は優しい貌となる  
騎馬武者の幻想豊か阿蘇の旅  
一切れのメロンに二千五百円

竹原市 岩本 笑子

魂の彩かも知れぬふきのとう  
とても豊かな国で酸性雨がそぼる  
瓶詰め帆船も見ると北斗星  
一番に芽吹くドクダミ草の春  
夫唱婦随時には水をかけ合つて

竹原市 信本 博子

喝采に尻込みをする馬を買う  
タヌキに化かされたふりするキツネ  
ひつついたラップへつる五月病  
ガラクタが入っているがルイヴィトン  
人の罪とくして海の鉛色

竹原市 岡本清水

必勝の解説本は文字でない  
徒花の憎らしいまで美しく  
産んだ親それはやっぱり鬼ヤンマ  
さやかにもしらしくあり片思い  
好き合つて連れ添うたとて五十年

竹原市 三宅不朽

金はもう借れんな父の健忘症  
飲めぬ愚痴いまさら言われても妻よ  
いい娘だな目刺だいい好き旅が好き  
ひかえめに こにこにこと老い給う  
藍きりり疼く乳房とはみせず

島根県 松本文子

そしてわたしは花束を抱いている  
夢売りの声を探しに路地の裏  
燃えたなら消せる程度の炎です  
乾盃が好きで月の出待っている  
中流の財布に鈴がついている

出雲市 園山多賀子

汗をして未だ倅せの種を蒔く  
残り福当てにするほど欲はない  
亡父よ亡母よ海の深さに悔いがある  
付和雷同決意に白い嘘がある  
自己陶醉呆けが近づく音がする

出雲市 吉岡きみえ

今年から長寿の箸に変えて食う  
なにごとも経験と言う指の腹  
スパイスの効かないわたしになりました  
流れ藻の従うほかなし郷に入り  
ひとりでも三時と決めたティータイム

出雲市 金村青湖

早春の樹から母似の娘が巢立ち  
早春の記憶を抱いて椿落つ  
三月の日記は期待ばかり書く  
桃咲いて生命の丸味を磨く  
春や春百花の中に自我を置く

出雲市 石倉芙佐子

たった一度の命散らした万朶の桜  
四分の一ほどの倅せに溺れてる  
隣から息子の部屋はよく見える  
鉄板の上であなたを焦しても  
冗談が過ぎると思う春の雪

出雲市 小玉満江

禍々しい老後は考えない事にする  
正徳という年代の先祖様  
玄関で油断のならぬ声がある  
ごめんなさい言えば涙が先に立つ  
サクラサク一家にもどった笑い声

出雲市 板垣夢酔

貯蓄もうやめたグルメ巡り旅

勘忍袋持たせて帰す里帰り

脇役の汗で主役が光ってる

地獄からやつと帰れた大手術

出るは出る金の亡者の議員たち

出雲市 久谷まこと

青葉風心の渴きまだ続く

猿知恵はこわさ知らずの有頂天

いきさつはどうあろうとも義理立てる

決断を急ぐとつむじ逆まわり

小言にも裏では温い血が通う

十和田市 斉藤 効

雪見ラリー辿り辿るははしご酒

流水の軋む音をも春の音

春うらら獣医は種を付けて行き

上京のロビーの隅に津軽弁

農業に哲学があり焼芋屋

十和田市 阿部 進

意地悪い波に足元すくわれる

振り上げた握りこぶしが宙に浮き

過疎の村選挙になれば活気見せ

いただいた恩を返せず古希迎え

二兎を追う女子大生が通い妻

弘前市 真喜内 實

そよ風を待つには丁度よい峠

ねこやなぎ新入社員娘らの列

竹の持つ命が息吹く男の子

十年間狭霧の中に居て真面目

家は繭 なかユートピア長い春

弘前市 小寺花峯

子育てを終えて日めくり軽くなる

幸せを妻と分け合う児の寝顔

空白のページに明日を賭けてみる

日曜日休んで欲しい鳩時計

不揃いの箸で卵かき混ぜる

弘前市 村田善保

抜け道を知らぬ律義な駄馬の汗

本論に入り空気も冷えてくる

脇役の彩が溶けない泥絵の具

コスモスと夢二の女似て淋し

いつまでも妻が黒子で居てくれる

黒石市 相馬一花

力んでもパパは赤ちゃん産めません

レントゲン恋の病が写るかも

自販機はいくら呑んでも叱らない

乳牛も派手なブラジャーしたくなる

自由席美女の隣が空いている

五所川原市 加藤 彩人

津軽路を春は一気に駆け抜ける

逢いに行く女は春の風が好き

嘘秘めた女のうなじ白すぎる

貧乏ゆすり出世に遠い席で老い

孤高を持して背骨が痛くなり

五所川原市 對馬 一閃

手抜きなど知らぬ両手がささくれる

雌伏する野望流れを変えたがり

暖冬に持病が痛む雪女

地吹雪の底から津軽三昧が鳴る

地吹雪をさか手にとつた祭り好き

京都市 都 倉 求 芽

お天気がよいと言葉も軽くなる

白木蓮 春をゆつたり座らせる

苺ブーム本当の苺が見当らぬ

「ひまわり」が地球を画布に雲自在

せめて着る楽しみだけを透析の妻に

京都市 山 本 規不風

国際会議中 紅白梅を見て通り

初恋が近所に生きている証拠

思い遣りも らしさも欲しいのはこちら

温い言葉で裸の社長蘇る

孫の家建てて三軒目に続く

京都市 松川 芳子

平凡な夫婦ですぐに許し合う

女神とも思うナースの二十四時

父ちゃんは働き蜂の群にいる

自分だけ若いつもりのおばあちゃん

勲章の一つ二つは母の胸

鳥取県 松下 たつみ

ふる里は本音で生きる人ばかり

指切りをする信用を笑われる

美辞麗句敵も味方も入りまじり

白黒はつけない方がまじだった

技巧派の笑顔の怖さ知っている

鳥取県 林 露 杖

春の宵独り酌む酒花菜漬

山並の眠りも浅く朧月

啓蟄だ野望の虫も這って出る

見え透いた嘘を真顔で聞いている

見せかけの善意に流す空涙

鳥取県 土橋 はるお

指先で小さい春を一つずつ

何一つ妻にはこぼす事もない

借金も折半にして別れよう

伝言板に風雲急を告げている

お地藏さんに別れる花を立てにゆく

特売の花と寒さを俱にする

鳥取県 江原 とみお

出奔をしてみなさいと野火燃える

春愁がボトルの底にたまりだす

門出した頃は丸太の橋でした

もう一人の僕とシーソーしています

鳥取県 羽津川 公乃

税金を払って高いなと思う

楽章の第九いねむりなど出来ぬ

求人ので告きびし年の壁

自立心の目覚めか妻の予定表

幸せは望み通りの嫁と孫

鳥取県 小谷 美つ千

雪囲い私はいつも試される

ときめきの春光胸いっぱい吸う

読み切りがすむまで眠れそうにない

人形が噂ばなしを聞いている

けものみち男の足跡を探す

鳥取県 西原 艶子

母米寿医者に大事にされている

幸運をまさかまさかと信じない

パンクした愛を繕う糸がない

深い意味のないのに深くとりたがる

面影が浮かぶ色紙がかけてある

師の米寿梅も馥郁匂うなり

島根県 榊原 秀子

まだ燃える米寿の師から習うもの

気分転換家具の一つを置き替える

負けて勝つその論法が入れられず

霜焼けが忘れてくれぬ足の指

島根県 榊 みどり

かけ茶碗だけ私の宝物

無人駅ひよっこり降りてみたくなる

詩の核がはじけて欲しい締切日

捨て切れぬ思い出十年着ています

念珠くる再入院の覚悟して

島根県 石飛 水煙

政治とは金金金ともの悲し

どろどろに新聞汚す師表とは

勲章は欲しがらぬ妻の太い指

空白の日記が才能嘲るか

押し寄せる流水春の音を乗せ

島根県 高野 律子

台所磨き女の城守る

新人をさそって句会のよいはずみ

左遷とは知らず僻地の子らが待つ

ライバルの噂が夜を眠らせぬ

母卒寿 孝の一字が捨てられぬ

岡山市 井上 柳五郎

うしろ指背にして女強くなる  
特価セール横から速い女の手  
水の澄む村に若者まだ残り  
開発か保護か真二つ村は揺れ  
恩讐も水に流して戦友と酌む

岡山県 矢内 寿恵子

千羽づる祈り通せば其処に春  
千手観音の一手にすぎる命乞い  
花鳥風月掟の中のうつろいに  
車間距離守り同居も和やかに  
年金に働きすぎを労られ

岡山県 荻野 鮫虎狼

気持だけ包んで男握手する  
春の音下駄と靴とを履き違え  
余韻には失敗ばかりつきまとい  
冬眠が覚めて主張のない欠伸  
三次会酔わない幹事が居る強気

岡山県 岩道 博友

老眼鏡替えて婦随の性になり  
別れ道綺麗にさようなら言えるかな  
墓参り此処が故郷花粉吸う  
妻の旅で留守番休暇とも書けず  
戸締りを済ませて愚痴を風呂へ捨て

岡山県 山本 玉恵

好きですと言わず終いの至近距離  
引金の指が動かぬ愛一途  
想いひとしお深くしてくる風の櫛  
五体まだ健全春の中を行く  
しがらみを抜けまっ白い野を走る

岡山県 千原 理瑛

呆け防止に励んでいます十七字  
引き際の美学知ってるかたつむり  
和を思い握りしめている拳  
軽口は叩くが要しまらない  
ホス猿も世代変って木を揺する

岡山県 小林 妻子

日曜日父は地下足袋ではないぞ  
無位無冠檜山あたり春の音  
この脛にまだ執心な子がひとり  
税務署へ僕も空気になる日  
花曇ローカル線をゆつくりと

岡山県 二宗 吟平

ローソクを立てに寄ったと供えもの  
今の世に思い思われ温い日々  
純毛を送って風邪へ注意書き  
雷も空気汚染の音で鳴り  
若い者にまかせておくと知恵をかし

岡山市 川端 柳子

小さい幸見えるめがねのプレゼント  
雑草でよかつた皆育ちます

ひとりよりふたりがよろし雨の音  
足手まとい女と決まるわけでない

都会人らしい自負持つ花粉症

広島県 田村 新造

ハシゴかけ屍に屍積む無残(雷のシベリア)  
夕モイトウキヨウもう言い飽きる聞き飽きる

哀しいな捕虜に人權などはない

高熱へ窓のつららを割ってやり

いくさ止むあの日の北の草いきれ

広島県 藤 解 静 風

朝刊を二時間かけて読む日課  
従いて来いと言った女にお守りされ

お迎えが来るまで迷う指人形  
待つことも幸せのうち夫婦箸

晩節はけがしたくない落ち椿

富士宮市 渥 美 弧 秀

余生よし詩と音楽に喜寿の春  
詩と楽に余生明け暮れ弾む喜寿

ミニ句集 病友を慰問の使者となる

朝日富士雄大にしてウツを消す

富士仰ぐ余生暮しに弾み持つ

静岡県 蘭 田 猷 杏

必要はないが時々辞書を見る  
義理チョコを配る女の下心

反対へ手を挙げているこれも義理  
負けて来て慰労会には盛り上げる

無記名の絵馬に神様困り果て

七尾市 松 高 秀 峰

二番手にいるからゆとりある返事  
咲く花を夢見て学資送る母

ライバルに追い着かれては追い越され

大声で内緒話をする夫婦

金持の国で貧乏神と住み

羽咋市 三 宅 ろ 亭

三月は上司の顔の八面相  
エゴ棄ててやたらに旅に出たい月

この枝は剪るには惜しい蕾つく  
離れ業できぬ実直さ買おう

出る幕がない楽隠居如露持つ

倉吉市 渡 辺 菩 句

神楽舞う恐いお顔はスサノオノ  
神楽笛 雲が二の足踏んでいる

ちよこまか歩くのも鳥の勝手です

真知子巻きのお婆が「お晩になりました」

ウイंकをしてみせたコケシを買いました

加賀市 細呂木 魯 木

辞令みて平常心が少しゆれ  
節目ごと禁煙思つて果たせない  
とうとう義齒かと箸に笑われる  
新しい表札の裏にあるローン  
自分史に禁煙宣言二度三度

境港市 細 木 歳 栄

犠牲だなどと思わなければ楽しくて  
余生への焦りか皆旅に出る  
夢は夢で終えれば世の中静かなり  
極楽絵憧れてます観音様  
武器の無い女に一つある涙

高知市 北 川 竹 萌

お出かけの明るい会釈貰う朝  
鶯に誘われ杜の神詣で  
肩力抜いてくる日日和やかに  
話し好き米寿白髪の足りるまで  
外歩き帰りは好きな物提げて

高知県 小 澤 幸 泉

もうよいと一人で許す神の前  
罪深いから欠かさず教会に行く  
油断なく渡ったつもり泥の橋  
朝だけは母の仮面につけ変える  
お城下のほこりに生きるくちた家

香川県 木 村 明 人

繁栄の隣に暗い陰がある  
酸欠の職場に風穴開けて来る  
ローンだけ残して娘嫁に行く  
予定表一杯埋めて無職です  
友が逝き奥さんと少し距離を置く

今治市 野 村 京 子

指先が弾んで春の調律師  
バランスが桜の下で崩れそう  
春の章さくらが浮いたスープレ  
昼の月女の髪がからむ指  
千羽鶴の一羽とばずにいる反旗

川西市 松 本 ただし

大衆を中流以下と見る誤算  
メーデーのしんがりキャンデー舐めている  
ヤジ馬の消化不良な繁華街  
ポケベルとファックス持ったこまねずみ  
経験がひとこと多く喋らせる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

葉桜を眩しく見下ろす鯉のぼり  
燃え尽きた恋晩春の一人旅  
過労死に無縁だパパは平社員  
四月馬鹿一つ覚えの嘘の数  
中流の暮し指輪も抜けぬ程

仙台市 川村映輝

黒めがね好きで頭を丸くする

結婚六十年 二人だけで乾杯す

死刑廃止論 殺人そそのかしているような

OB会 最年長で床柱

町田市 竹内紫鏞

ふしつげな便りと詫びて増やす友

欠席の通知 肴を書き添える

庶民作品 陛下は眼鏡掛け給う

元横綱のしほり出す声

香川県 成重放任

同窓会誰が恩師か教え子か

野良犬も三度の飯で留守居する

ぐち言わぬ妻の努力で栄え見え

見えぬとも強い絆の夫婦愛

香川県 永峰伽名子

小粒でもダイヤはダイヤの意地をみせ

充分に満ちれば欠けるお月さま

血の絆渡すも受けるも泪あり

谷川の流れも定めありじつと見る

岡山県 池田半仙

福寿草覗く息子も五十越え

温泉のプームあちこち掘っている

水仙の花活け心たまされ

ストレスの溜りが解ける妻の愚痴

岡山県 花田たけ志

完璧を求める性にエゴもあり

評判の清潔癖にある死角

思い出を手繰れば半生喜劇めき

おえら方は対米失言症候群

倉敷市 田辺灸六

足跡を見つめて老いの籠り癖

入院をするたび妻のお説教

俺よりも先に逝くなとひとり言

ポックリと逝けますように徳を積み

倉敷市 井上富子

花のあるところへ青い鳥がくる

グルメには弱いベルトを締めた夫

新しい工夫を盛っているのれん

飽食のつけを払っているカルテ

吹田市 栗谷春子

山家にはテレビなくとも日の丸が

三月は諸子の月よ亡父の影

減入る日に拾う神よりいたより

何という幸せ西が晴れてきた

吹田市 茂見よ志子

それからの涙腺つとにゆるくなり

体力に妥協しすぎて怠けぐせ

もうたくさん慇懃無礼なご挨拶

たまに客呼べば片付く家の中

祖父の味 父夫の味 笠智衆

吹田市 瀬戸 まさよ

立ち話はずむ周りに鳩の群れ  
家事よりもパーマ優先主婦稼業  
言い分のある猫好きと猫嫌い

茨木市 堀 良江

冬將軍ノルマ果たさぬうちに春  
初節句紀子さまに似た姫に決め  
片手でも相場がちがうじいと孫  
花柄に飽いて水玉もよう着る

茨木市 藤井 正雄

旅馴れは乗るとすぐ寝る技を持つ  
福耳と言うが補聴器隠し持つ  
初恋が会釈をくれる村祭り

噴水を一日見ているチューリップ

豊中市 吉田 あずき

平成の花屋の花はエトランゼ  
落城の紅炎を思ふ夕茜

捨てて来た故郷の天気予報聞く  
入口に仏 出口に鬼が立ち

豊中市 三宅 つえ子

車椅子沈丁花の香に包まれる  
怒り肩の男はひとり過去に泣く  
車椅子虜囚の怒り捨て切れず  
責任を甘くみていた春の絵馬

お願いと頭を下げて汚職する

池田市 岡本 吉太郎

真似こそは文明の母忘れるる  
今世紀マルクス夢を見せただけ  
不景気はノルマじつくり頸しめる

箕面市 椎江 清芳

謝りに来た子きれいにお辞儀する  
カルダンの財布が泣いている中身  
溜め息の相手無言のコップ酒  
つぎの世もその次の世も夫婦です

箕面市 岩津 ようじ

義理を欠く相談を子が聞いている  
八つ当たりする日される日凡夫婦  
お互いにはずれ馬券と分かりかけ  
葬式とお通夜ばかりで会う仲間

箕面市 中嶋 田実子

生き様へ思案をさせて友が逝く  
賛成の中へひとまず身を穏す  
人生のスパイス悪友いて楽し  
花みんな散ってポストが遠くなる

高槻市 竹内 花代子

何時来ても汗をかいてる冬の親友  
四階の好みが判るお裾分け  
啓蟄に老いも脱皮の万歩計  
点滴の口へスプーンの七分粥

寢屋川市 堀江光子

絵日記にママの風邪引き大事件  
再会に気になる増えた皮下脂肪  
以心伝心どちらともなく縄暖簾  
うれしい時乾杯をする友がいる

岸和田市 三輪道彦

鳶の子に期待が重い受験絵馬  
タクト振る妻に合わせている余生  
脳細胞減ったとみえる物忘れ  
相続税へ先祖の土地を売ると決め

大阪市 寺井東雲

夫婦喧嘩一幕芝居立見する  
二つの命丸くまとめて抱きしめる  
折り込みに塾のチラシが山となる  
下手でいい続ける事に大成が

大阪市 塩田新一郎

水仙に屈む尼僧の指白く  
長い物に巻かれ手も出さず足も出さず  
五月晴 前後を雨に挟まれて  
満々と水を湛えて病む琵琶湖

大阪市 神保拓生

ツインビル借景にする大阪城  
春休み孫に電話でラブコール  
春風に裏切りはない草萌える  
植木市庭なき人も花を買う

和泉市 西岡洛醉

四十年連れ添や話題も尽きるだろ  
百歳百歳有りたい夫婦で昨日今日  
夫婦ごっこもうよそうかと妻不信  
女尊男卑俺は仕舞風呂が好き

和泉市 岡井やすお

役に立つならあげましよう中古品  
罰金が上がると困る人も居る  
狭い国に大きい車ちよつと無理  
此処だつて盛者必衰相撲界

貝塚市 行天千代

雛まつりお仏壇にも菱の餅  
黒い土持ち上げている路のとう  
満期日を昭和に直して数えてる  
年寄り留守番ばかりで日を送る

尼崎市 住谷石舟

念入りに化粧してからパチンコ屋  
フロントはとうに不倫と見抜いてる  
屋台骨の軋み聞える決算書  
それからは無闇に印は押しません

和歌山市 北山好笑

春なのにまだ辛口と思う箸  
寄せ合つて担ぐ話の好きな膝  
喜びの頂点にであう辛い鞭  
お祈りの指の隙間に欲がもれ

和歌山県 寺田裕美

こり性に黙ってお茶を置いてくる  
オイと呼ぶ夫に時々背を向ける  
反論の若さを見上げ見下ろされ  
母さんは鬼と仏を使い分け

唐津市 筒井朴竜

サマー休を海山レジャー子連れ旅  
辛労さは連休旅の渋滞車  
鉢叩き伴奏座興で祝い謡  
クラシック音楽好きな若い二人

鳥取市 春木圭一郎

優しく強い女にあこがれる  
許されぬ二人ガラスの城きずく  
平和だと油断してると国が消え  
真似ばかりしていて自分見失う

鳥取市 美田旋風

うかつにも笑顔の意味を取り違え  
素人が弾いた経費足が出る  
裏方に徹する誇りだつてある  
未完の絵抱いてゆつくり燃えて行く

鳥取市 武田帆雀

高砂や流儀が違うのが一人  
旧性にほのかな恋を酌ぎこぼす  
デッサンの彫刻刀を錆させる  
同病を憐れむ女の愚痴話

鳥取市 岩原喬水

またなにか忘れて戻る老化かな  
子育てに女ざかりを忘れてた  
名刺見て深々頭下げ直す  
思慮深い父の決断いまわかり

鳥取市 前田一枝

招き猫ママのサービス気にかかり  
体調の良さに薬も吞み忘れ  
痛む胸破れ太鼓に叩きつけ  
肩書も時や日にちが薄くする

鳥取市 谷口次男

あの世から還ってきたか悟り顔  
夕焼けの向こうに母の顔がある  
悪いけど悟ることよりまずメシだ  
転んでもただでは起きぬお隣さん

鳥取市 乾喜与志

追った理想がいつの間にか消えちやつた  
知恵はなくても大慈悲に丸められ  
ひたむきに越えたハードル懐かしき  
泣きやまぬ児へ唇を吸わせて見

鳥取市 津村八重子

意識して歩んだ道だ悔いもたぬ  
親も子もお祭り好きでうかれてる  
ピンチから抜けておかゆの味を恋う  
音痴でも貝がら節は得意です

鳥取県 山根 八重

紫外線強くて春の帽子買う  
言い過ぎて心の寒さ悔いている  
感情にもつれた糸が口きかぬ  
普段着で出来る恋ならしてみよう

鳥取県 乾 隆 風

桜前線 白髪を染めにやってきた  
泥舟を夢中になって漕ぐ愚か  
ピーピーと鳴らぬ景気のとらずさり  
贅沢な位置でバックはむつかしい

鳥取県 上 田 俊 路

呆け防ぐワープロ買って字を忘れ  
猿知恵を嗤う男の猿芝居  
七人の敵失つてから老化  
油断した心を盗む憎いひと

鳥取県 西 川 和 子

縄ぎれにびっくりしてるわらび刈り  
瞳のじやまを決してしない睫です  
引き出しに古い火種を眠らせる  
人前に睫びくびくする妬心

鳥取県 幸 家 單 車

百歳の笑顔に勇気つけられる  
伴せが欲しくて神の鈴を振る  
そでしよう神様だつて不平等  
四捨五入されて補欠の球拾う

鳥取県 石 尾 かつ乃

白鳥の名残りを惜しむ北掃行  
窓際の椅子でやさしい陽をもらい  
満開の桜の下の応援歌  
空間に一鉢置いて蝶になる

出雲市 小 白 金 房 子

菓細工習う農婦の冬ごもり  
共進会 子牛に期待爪を研ぐ  
また今日もうそで労働父の癌  
ゆっくりと水車が回る春の音

出雲市 竹 治 ちかし

二十年添えばことたる代名詞  
一畳の布団で大きな夢を見る  
父親の涙宝に娘が嫁く  
病む星の答えは二十一世紀

出雲市 伊 藤 寿 美

分を知るイミテーションが悪びれぬ  
沙羅の花しがらみはまだ流されぬ  
遺産放棄したら数の子届けられ  
おんな六十男雛女雛が蔵を出す

米子市 中 井 ゆ き

ガラス戸の向こうの顔よ幸せか  
砂時計砂の命をつみかさね  
この風はだれのほっぺにふれて来た  
そばに居てびっくり箱をあけてほし

島根県 藤原鈴江

太陽をさえぎる雲もあつてよし  
年輪をひもとく今宵のぼたん雪  
居直れば何とかこの世も渡れそう  
来し方の濃ゆさうすさよ山彦よ

島根県 北川民子

手の出ない蟹だがうちにはカニサボテン  
風邪が去にふくら雀の冬炬燵  
子の噂 孫の噂で寝正月  
初化粧今年にかけるパフの音

島根県 加本義良

三月の鼓動を聴こう春動く  
梅桜きれいな別れ繰返し  
よろこびが此処にもあつた孫を抱く  
ネクタイを緩めてからの呑み直し

和歌山県 岩崎瑞穂

里帰り愚痴をならべて助言まつ  
文鎮に恥ずかしくなる老いの筆  
啓蟄の庭にかすかな春の音  
繰越しはまづい予算の使い切り

西宮市 秋元てる

故郷遠く歲月永く西に生き  
年なりに愛でる花あり雪柳  
情報源 犬の散歩の仲間から  
コツトリと胸に納まるいい言葉

伊丹市 梅田宣司

きれいごともう止めにする古希の新春  
噂話に隣の盃が寄ってくる  
ワルツにのつた腰の痛みが不貞寝する

奈良市 米田恭昌

同窓会比べられてる見栄と見栄  
洋間より亡妻と二人の四畳半  
一言が過ぎて後尾に追いやられ

大阪市 町田達子

針運ぶ指思い出を繰りながら  
ぶきつちよで控え目がよい輪の泳ぎ  
身の回りブランドが好き日本人

大阪市 富岡温子

グルメ旅我が家の茶漬けで締めくくり  
呷っても悩み流れぬ今日の酒  
美しい人生だったと母の墓

大阪市 清水利武

人の世は金と情けと真心さ  
世の中は金で済む事済まぬ事  
嬉しさを隠し切れないランドセル

大阪市 松永すすむ

梅の花フト見上ぐれば天守閣  
裏切らぬ酒を無上の友として  
咳ながら咳込む妻の背を撫でる

## 京都塔の会 春の吟行

日時 5月24日(日)  
午前10時半

集合場所 京阪四条駅  
7号出口の地上

行先 四条通・八坂  
神社・長楽寺等

兼題 (各3句)  
番・助ける・廊下

会費 5500円

申込 5月15日締切  
〒601 京都市南区  
西九条開ヶ町41-1  
松川杜のへ

郷愁の視野へ菜の花咲いている  
夫婦げんか休止符を打つ客がくる  
母のしわどれも我慢を刻み込む

鳥取県 黒田くに子

爪に火を点して銭に逃げられる  
つけ睫つけて見合の席につく  
寡婦の意地火の粉払って子を守る

鳥取県 太田幸枝

水飴のような夫婦の子沢山  
縁うすい女名刺に長が付き  
偏屈の親父は味で勝負する

藤井寺市 中島志洋

百歳になってても女花が咲く  
くどくどと店主敬白値上げです  
乱暴な言葉で弱さかくす人

豊中市 滝北博史

## 磯野いさむ 叙勲祝賀川柳大会

とき 5月5日(祝) 11時開場

ところ フェイセス・月華殿  
(JR環状線寺田町駅北出口西へ3分)

題と選者 (各題2句・12時半締切)

「内助」 定本 広文選  
「開く」 白井 花戦選  
「道頓堀」 森中恵美子選  
「文化」 小松原爽介選  
「絵」 渡邊 蓮夫選  
「先輩」 西尾 栞選  
「陽気」 山田 良行選

事前投句 「子供」 亀山 恭太選

◎事前投句は締切りました

パーティー 16時半から

会費 8000円(パーティーとも)

主催 番傘川柳本社

## 第4回 時の川柳交歓川柳大会

とき 5月10日(日) 午前10時半開場

ところ 神戸市立福祉センター5F  
(JR・地下鉄神戸駅北へ5分)

兼題と選者 (各題2句・正午締切)

「豊か」 卜部 晴美選  
「怒る」 河内 天笑選  
「乱」 中林 酔虎選  
「米」 長谷川紫光選  
「芸」 梶川雄次郎選  
「読む」 藤本静港子選  
「虚」 小松原爽介選

一特別課題一 (1句)

「踊る」 深日白光子選

会費 1500円(昼食・記念品呈)

主催 時の川柳社

# 自選集

黒川紫香

句碑も曾孫も誕生春は忙しい  
鬼さんこちら手の鳴る方にある古墳(古墳公園)  
風吹けば風に合わせて哭く古墳  
蕩の這う塚あり武庫の古墳とか  
人が来て犬来て鳥も来る古墳

高杉鬼遊

出てごらん五月は人を光らせる  
楽あれば苦あり久しくつづく楽  
ご先祖は南方系か怠け癖  
飲むと言うほどではないが酒うまし  
にんげんのくらしを笑うシャボン玉  
星を沈めて慕情の池の深さかな  
えくぼからその他大勢とも言われ  
遠緑で済まされませぬ橋が出来  
今昔の感の深さの臉閉じ  
野に咲いて幸せ多き風に逢う

水粉千翁

ひと彩が足りない虹を抱いている  
堕ちて行く女が北の切符買う  
ばあさんが意地になつてる針の穴  
下町の溝に風呂屋の湯の匂い  
絵の中の女が酔つてる赤い酒

岩本雀踊子

野田素身郎

生まれたときから刻々と死は迫り  
華道展 妻それなりに生けている  
妻いとし疲れきっている寝顔  
春と冬重なり合つて風邪をひき  
寒波来てサクラ前線立ち止まり  
生き方を見せた背中も曲りだし  
正直な写真に嘘の歳言えぬ  
言い分を一つ取り入れ妥協する  
耐用年数まだ大分ある余命表  
ぼけ封じの寺はぼけないうちに行く

金井文秋

遠山可住

春の風はたちの胸へ来て遊ぶ  
末っ子が残した犬に尾をふられ  
孫を縫い曾孫を縫うて満ちる春  
ようわかるはなし同年輩だろ  
チャンスまた来る日もあろう目を閉じる

有働芳仙

世界地図ひらく途端に核句う  
愛よりもお金に惹かれ嫁く気なり  
菜の花の合唱を行く左遷の荷  
億というお金が動く雲の上  
りハビリへ油の切れた音がする

本田恵二郎

なつかしい虫声抜き打ちのように来る  
安心をする暇がない母ごころ  
動静は知らぬが花と思ひ合ひ  
別の名はなにをかくそうナマケモノ  
信念を笑顔で包み慕われる

恒松町紅

ハンガーに無職出番がある背広  
美しい笑顔に油断してしまふ  
離月は男の影がうすくなる  
折角の予定狂わす花粉症  
美人薄命亡妻もそうだった

野村太茂津

ジグザグに生きて煌めくもの一つ  
その中の島が私の好きな影  
食み出した人が小さな錠守る  
疵ばかり何故に今頃掘り起こす  
言い訳はせぬと決めてるレトリック

正本水客

ふとん干す指先にある空の青  
一念発起うす味にする長電話  
お宅さんはグルメだからとお茶を注ぐ  
つじつまが合うて男はつまらなし  
ぐち言わぬ妻で沈丁花がおう

児島与呂志

菖蒲湯も久し振りなり孫といる  
柏餅小さく切つて歳思う  
花真盛の庭で五月の風かおる  
鯉のぼり自由に風をはらむ庭  
葉桜をひっそり招く友が居る

久家代仕男

銘酒では無くとも御神酒ありがたい  
飴玉を貰うてからのおつき合ひ  
酸性雨ホーレン草が黄ばみ出す  
堤防を染め抜いて咲く野大根  
絨緞の雲の上なる呆け同士

谷垣史好

疑えば青い魚の青が冴え  
目が見えて食えて歩いてよしとせん  
天外を襲名 三代目が似合う  
風葬にしていただけならモンゴルで  
天に唾する政治家をバカにする

八木千代

花冷えのうなじへ風も砂まじり  
沈丁花 春を促す笛を吹く  
梅の木の瘤のあたりの水の嵩  
やとこさ春の隣へ竹つ桜  
桃の木の向うのひと世ふた世かな

小林由多香

おふくろの味がだんだんぼけて来た  
傷跡の深さ出稼ぎして埋める  
おだやかな暮らしへあくび憚らぬ  
合格がさくらメールにのつて来た  
最高の春東大へ合格す

藤村 女

仏との絆へ水を絶やさない  
山越えて谷の深さも知りました  
未知数のドラマへ朝の窓を開け  
太陽よすばらしい朝ありがとう  
草笛を吹く少年がいなくなり

波多野五楽庵

めぐりては春めぐりては父と呼ぶ  
喧噪にのめりこめない花のうつ  
咲きもせぬ桜に酔うている津軽  
泣きなされほろほろ梅の落ちる音  
一行に花にも憂しと男文字

辻 白溪子

正しいと言ひ張る夫へ逆らわず  
コーヒーが残り商談まとまらず  
仲人が残って気になる事を言う  
マンションと寺が散歩の道にある  
味方から騙し作戦図に当る

松川杜的

去る友は追わず万両の実が赤い  
一喜一憂 夫婦して心電図  
あつても無くても校歌に山と川  
心の貧しさをベレーに覗かれる  
今日のコト話す仏間に灯を点す

工藤 甲吉

秘書がやった秘書がやったで言ひ逃れ  
今にして不老薬とは遅過ぎた  
知者 仁者 勇者 どれにも嵌まらない  
新聞の無い日のんびり爪を剪る  
それがまた実においしい迎え酒

大矢十郎

通帳のおよそも知らずいて平和  
飛脚怖し猫とペリカン信じよう  
真珠湾の仇討ちに来た三勇士  
浪速場所花兄弟へ春浅し  
売り時は何時でも今という株価

藤井明朗

医学での脳死三転二転する  
世相へ一矢 平和ぼけしていませんか  
自己流の反省欲がみえかくれ  
他人の子へひと言注意する遊び  
ばやきたくなる世相悪をなげく

月原宵明

お流れを受けて尊敬しておらず  
手を繋ぐ二人 風紋気付かない  
衣食住足ると今度は名が欲しい  
そのかみの名勝 瀬戸にサメ泳ぐ  
華麗なる言葉と言えど尊厳死

小出智子

がたがたと春とはなりぬ  
人嫌い連翹の黄に竹ちつくす  
洗濯物が乾いてみんなわあすれた  
スイミングがとて上手と聞いている  
どんな娘が来るのかうちのお嫁さん

23 日展にて

みやまゆりへ佇む小鹿の目が丸く  
一本杉遠い音聞く姿なり  
春雨に負けじと襟あし白き女びと  
春へ歌う如くに辛夷の花白く

西田柳宏子

青虫の我慢 羽化する夢を抱く  
他人様の情け身に浸む冬木立  
生きている証 泣きもし笑いもす  
狡いとは言わず賢いお人だす  
年かいた時々優しいことを言う

阿萬萬的

## 尼崎 春の川柳大会

とき 5月3日(日)午前11時半開場  
午後1時半締切

ところ サンシビック尼崎・大会議室  
(阪神尼崎駅から西へ200米)

題・選者 (各題2句) 投句拝辞  
「ひろば」 小出 智子選  
「島」 来住 夕子選  
「尾」 塩谷 幸子選  
「小さい」 森田 栄一選  
「城」 黒川 紫香選  
「森」 北浦 牧郎選  
「寺」 伊東 静夢選  
古下 俊作氏

お話 会費 700円 (作品集呈)

主催 尼崎川柳同好会

— 同人吟

# 秀句鑑賞

— 4月号から

大矢 十郎

この欄において再度目の目を見た句は、二賞候補作品とともに、深く脳裏に焼き付くことがある。ことに当を得た選評に領いた句は、久しく心にとどまることでしょう。

針箱に針錆びつかせ翔んでいる

福本英子

現代娘の表徴でしょう。お針子の苦勞は知らず、ただただ流行の既製品を追いかけている。申し訳のような裁縫箱にはかかわりもない。『翔んでいる』が鋭い着眼点です。ご時世ですね。きんさんは言うでしょう。「うれしいうつな悲しいうつな……」と。

アクセルを踏まねば萎えてくる男

玉置重人

ハンドルを持たねば、とするのが常だが、この句の場合「アクセルを踏まねば」としたところに突如、身の引締まる思いがする。アクセルを踏めばその途端から、法的・社会的責任がのしかかって来る。その責任感が身体

の萎えを防ぎ、呆け防止に大いに役立っているのである。それは私かも知れない。

いい話してくれそうな客が来る

西口 いわゑ

さながらに微笑ましい句である。慕わしき人でしよう。向うもそう思つて来てくれる。いい話つて……、人情話に和むひとときではないでしょうか。

自転車はすわつてゆけてありがたし

春城 年代

見失い忘れていた物をこの句から教わりました。中国では、自転車は身体の一部として最も大切にします。団地の六階、七階へと担いで上る姿に感激しました。自転車の利点、それは枚挙にいとまないが、結局は、すわつてゆけてありがたしに共鳴する。

大嘘だから大げさに頷こう

若宮 武雄

罪のない大嘘だ。問い正して恥をかかせば場が白ける。それよりは折角の大嘘だ、大げさに頷いてこの場を面白く保っている姿にムード躍如たるものがある。

畑の花頂戴しましたよろしくね

細川 稚代

女性ならではの句、花泥棒は罪にはならぬとか。でも丹精の花はいけません。この句の場合、通りすがりの畑の花でしょう。隣の花へよろしくねと謝るような伝言がほほえましい。

生き物はもう飼いません小鳥の死

清野 こう

小鳥をペットにしている、この悲しみを避けることのできない宿命でしょう。ことに高齢者にとっては、その悲しみもひとしおでしょう。中七の「もう飼いません」が切実に心を打つものがあります。

どん底は気楽でしたよ落目なし

岡本 清水

底辺の生活をしていた頃は、もうこれ以下には落ちないだろうという気楽さでしょう。しかし、どん底にいても信用を失っていたらまだまだ落ちていたでしょう。今日からでも物に執着せねば、気楽さに戻れるかもね。

義理チヨコが本命になる春四月

藤田 頂留子

義理チヨコが本命となり、やがて本命になるドラマです。深刻な嫁不足に喘ぐ男性にとつてはまたとない絶好のチャンスなのです。春と共に温かい愛が芽生えたことでしょう。ほどこきもの思い出に手を休ませる

森川 まさお

作者の年齢は不詳だが、苦勞した賢母の姿が目につかぶ。ほどこき物をしながら、あの時に着たもの、あの時縫うたもの、あの頃の暮し向き、走馬灯のように思い出が巡る。下五の「手を休ませる」を、「ふと手が止まる」としたいところ。

## 平賀紅寿

東野大八

「色の中で一番美しいのが白です。この白に性のあるのが私には素晴らしいと思う。続いては紅、これも白あつてのことです」

遠い昔の思い出のこの人物の言葉である。柳号が紅寿であつたのも、さこそと思われたが、この人物が平賀明吟として海外にもきこえた象牙彫刻界の異才として知られているのを知つて筆者はその白札賛の意味を悟つた。本名胤次（たねつぐ）明治29年12月20日東京は京橋生れの江戸っ子。だが、その生涯の川柳趣味を満喫したのは京洛の地であつた。本職の象牙細工は、斯界の巨匠旭玉山の直系石川松吟に師事、その門下生から独立してのちは、東京象牙作家協会幹事・大像会幹事を

つとめ、やがて壮年期に京都に移住して、京都象牙彫刻研究所を創立、京都象牙美術工芸作家連盟を組織して委員長もつとめた。

筆者が北京在住時よく瑠璃廠通いをしたものだが、この界限切つての最名門の栄宝齋の工房で、木版水印画の繊細巧緻な硯石木簡玉刻の冴えを發揮した作品に魅了された。その職座の長老とおぼしき枯淡な風貌の老人の後ろに、半月型の象牙がいと重たげに置飾されていた。その瑠璃廠の職場ルポ製作に當つた筆者は、その唐児群遊の見事なノミの冴えを賛嘆したことだが、その老職人は、「これは日本の京都の牙彫師の作で、見事なあまり秘蔵しています。職場の私の教材で、学ぶところ絶大です」と厳肅な面持ちで語つてくれ

た。いま想えば、もしかするとそれは身ビイキかもしれないが、京の平賀明吟の作ではないかと考えたりしている。京の牙彫といえは明吟しかない。

ともあれ川柳の「平賀紅寿」に移ろう。

紅寿は大正八年ごろから川柳に惹かれ、寿郎の柳号で東京の地元新聞の柳壇に投稿をはじめ、大正11年に同志七名とともに川柳初音吟社を興し、京都に移つたのはその二年後で、既存の葵吟社同人となつた。この葵吟社というのは、地元京都では実勢を誇る吟社で、大陸にも支部を持っていた。その一例は、満州の撫順にもその支部があつた。ここで一社を起こした福井天弓の「蛇皮線吟社」がそれだつた。

「大陸の日本人は、すべて望郷と郷愁に弱い。大陸で川柳を始めたのは大正の末頃だったが、京都の葵吟社の句傾向にうたれ、その同人になつた。うれしかったもんだよ」と大陸川柳界の草分け的存在だつた天弓が、筆者の川柳入門に當り、そう述べ懐したのを覚えている。この撫順川柳社は、葵川柳社が番傘と合併するのを機に「蛇皮線吟社」を「琥珀吟社」と改めたのである。

葵吟社はB6判横とじて、京ムード溢れる

堂々たる柳誌であったのを天弓が目にして大  
陸第一号の同社同人になった。

「それを柳壇統一と京都柳界発展のために  
番傘川柳社と対等に合併して、京都番傘を産  
み出すことは大英断であった。34歳の紅寿  
(当時寿郎)先生の、大局の見解による葵同  
人及び関係方面への働きかけのご努力は大変  
なものであったと想像される」(「番傘」平成  
3年10月号・玉野可川人悼文)

この京都番傘創立3周年大会は昭和8年に  
催され、このあと再び東京へ転居、昭和14年  
東京番傘の前身「藤柳会」を創立、番傘川柳  
の普及発展に尽力、戦時下の東京で国策によ  
る文芸報国の川柳部門で挺身協力する。

「戦後再び京都へ移住、一乗寺にお住まい  
の岸本水府先生とともに京都番傘の復興に努  
められた。番傘川柳社の主催する川柳京洛一  
百題大会、二条城での川柳大会、嵯峨野大吟  
行会など、京都番傘を挙げての協力を尽く  
された。昭和27年には京都川柳作家協会の  
理事にもなつて、京都柳界の協調発展に貢献  
また日本電池・簡易保険局の職場柳壇講師と  
して、永年にわたり新人や後進の指導育成に  
もあたられた。昭和31年には簡易保険局くれ  
ない川柳会が報徳と還暦を祝して、京都番傘

の例会場である天性寺に、句碑『基盤目に世  
界の京として灯り』を建立した。その年の秋  
永年の川柳活動に対し高山京都市長から表彰  
を受けられた」(同玉野可川人悼文)。そして  
昭和42年春、京都番傘では、『平賀紅寿句集  
基盤目』(A5変型判・260頁)を刊行し、  
京都タワーホテルでその出版記念句会が盛大  
に催された。

水府亡きあと、昭和43年1月号から同49年  
12月号まで、番傘の近詠選者をつとめ、本社  
顧問となり、日本川柳協会の創立とともに常  
任理事となった。こうして番傘川柳の重鎮と  
して同社顧問ならびに日川協顧問の肩書のう  
ちに平成3年8月22日老衰のため死去、享年  
94。法名大慈院紅寿日胤居士。

前述の『番傘』平成3年10月号の数多い悼  
文のなかで玉野可川人の筆致が最も詳細に紅  
寿像を描き切っているが、そのなかにつきの  
よう追慕の一文もある。

「近江砂人は、紅寿句集序文に『川柳界の  
高村光太郎』と評し、同じく川上三太郎は、  
『あの四角なアゴを引いての語り口、少しも  
京なまりのないイカツイ両肩、あれは日本の  
職人独得のすがたである。句の姿のよい紅寿  
川柳は、ふんわりとしたような外側のうちに

向う一本通ったものがある」と書いている」

「還暦を過ぎたばかりの水府先生、五十代  
であった紅寿さんと、共に男ざかり、川柳ざ  
かり、相反するように見える個性も魅力的で  
大作家という印象は強烈であった。『川柳の  
化けもの』という紅寿さんの、化けものぶり  
にひかれて今日まで、不思議に暑い暑い京番  
の八月へ御縁を頂いている」(森中恵美子悼文)

「初恋はみな美しい人ですよし 紅 寿  
大原女の母御所染の帯へ老い

うちの子を刈って床屋は春になり 〃 〃  
家中の裸へ母の白じゆばん 〃 〃

紅寿先生は常に口癖のように、川柳は『愛  
情の百科辞典』を強調、ご自分でも情味がか  
つた作品がお好きで、それに重きをおかれて  
おられたようでありました」(片岡つとむ悼文)  
筆者が「川柳しなの」へ、若さにまかせて  
柳論めいたエッセイを書きとはしていた時、  
「若いときはこれでいいんです。思い切った  
ものをどんどん吐き出すから、川柳も磨きか  
かるんです。それにしても貴方のバイタリ  
ティは羨ましい」というハガキを手にしたこ  
の人の思い出は懐かしい。

▼次号は「越智 伽藍」

# 柳籠裏三篇研究 (十二丁)

203 五両巻分て物書を巻人り置キ

岩田||全く不明。五両一分は、五両に対して一分の利子の意で、座頭金の高利をいうのはあるまいか。それを一年の給金として、檢校などが書記一人を雇うの意と解していた。盲人の金貸しであるから、どうしても書役のアシスタントが一人は必要なのであろう。

七久保||岩田氏説贊。だが「五両一分」は檢校を表現するために用いただけで、当時、実際に支給された金額ではあるまい。

鈴木||岩田兄「明解」。「五両一分」は六割の高利。

岡田||岩田・七久保説に贊。座頭金をハタル盲人が、帳面を書く書記係を雇ったというだけ。

204 はしこの式段めから心中く

岩田||これまたお手上げ。二階で心中した女郎を発見して梯子に足をかけ、心中だとなつてゐるのか。

西原||贊。あとは足がすぐんだのであろう。  
青木||贊。二階の階段から階下へ向かつて、叫んでいるのは男？女ならば腰を抜かすか、階段を駆け落ちたかも知れない。

201 泣くほどいやならと又じやみる也

岩田||娘の身売り。「じやみる」は『俚言集覧』に、「じやみる 事の成らんとして留り止むを云」とある。物事が中途でおじやんなることである。

主題句は、娘が泣きじやくるのを見て、女衞とやり取りしている図。「又」の言葉で、親の躊躇する様と、女衞の手を焼くさまが目に見える。

紀内||娘が縁談不承知の図と思つ。

根をおして聞けば娘は泣斗  
好きな男でもいるのか、いくら縁談をもつてきても首をたてに振らない。「どつしても」

四四〇

佐藤要人・八木敬一・七久保博  
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮  
大野温干・青木迷朗  
鈴木倉之助 故岡田 甫

というと泣き出すので、親はやはり娘がかわいい。「方がない。そんなにいやなら」と親も納得するという次第。

鈴木||紀内さん説でよいと思つ。

岡田||同。

202 碁盤をバ跡戸しらずがかりて行

岩田||句意は、碁盤を借りて行って戸を開け放しにして行くというのであろう。ただし「跡戸知らず」という語彙がわからない。

佐藤||戸、障子など開け放しにするのを、一般には「跡締りがない」などという。「跡戸知らず」は作者雨譚の造語かも知れない。  
岡田||同。

佐藤||贊。梯子の二段まで上がれば、二階の部屋はよく見えるのである。吉原心中としてよいと思う。

岡田||上から二段目と解しています。

205 わしが十七の時三めぐりで濡れた

岩田||其角の雨乞。「十七」は「五七五」の和である。

夕立や十二字たすとふつてくる 二二26

それを老人の回想譚めかしく仕立てたところがきつい味噌

岡田||贊。

206 家の有ルけいせいを買ふ雨やどり

岩田||よく分からぬ。普段は夜鷹などを買っているのに、雨宿りのため、仕方なく家のある女郎を買った。それを「傾城」と大きくように表現した所が面白味か。

佐藤||家のある傾城は、部屋持、座敷持の女郎の意で、これは細見の標識から来ている。

特に部屋持の△印は、傘の形であるから、主題句の雨やどりの男は、どうやら大黒傘でも買ったという洒落であるらしい。

傘をなさけまじりに高く売 一四38

鈴木||佐藤氏説に贊。しかし、いやな洒落で

ある。

岡田||佐藤説の前半に贊。

207 何かす、めて木母寺の門を出ル

岩田||梅若忌から吉原へ。「何か」と謎めかした。臙化表現の裏に決定的必然性を隠すのは俳諧の常。

西原||贊。

隅田川連レが悪いとかどわかし 四14

岡田||同。

208 帰ッては行きくしやと母しかり

岩田||「帰ッては行き行きしやと母叱り」。

息子の居続けへの意見であろう。「お前、遊ぶのもいいが(本当はよくない)、行きっぱなしにせず、一度帰ってからまた出かけなさい」といって意見しているのである。なるほど甘い。これでは意見ではなく、遊びに行けというよつなものだ。

西原||贊。居続けた朝帰り息子への叱り。

岡田||句の読み方は「帰ッては行き帰ッては行きしやと母しかり」と思いますが。

209 此返答に行かれてつめる也

岩田||此へんとうに行かれるくれのふみ 一九25

何かの文句取りと思うが、不明。

句意は、客と女郎の様子かと思う。何か具合の悪い事を言われて、返事もならず、つめてごまかしたのであろう。

西原||「行きかれて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」(薩摩守忠度)の文句取りで、

いそがしい軍なかばに行きかれて 拾四14  
などがある。

女郎の無心にしぶっている客。それで女郎が手管を發揮して「つめつめ」をする意。

佐藤||西原氏の文句取り説贊。

七久保||同。女郎から月の相談でも、また、約束を迫られているのでしよう。

岡田||同。

岩田(補)||忠度の歌の文句取りには従いに  
取りと思うが……

★第2回 全国紙上りんご川柳大会

1次選者||波多野祥二・2次選者||橋高薫風  
応募は葉書1枚1句(1人2枚まで)、住所、  
氏名・柳号・電話番号を記入、8月31日まで  
に弘前市元大工町50―5大手門齒科内・川柳  
塔あおもりへ。入選50句に青森りんご一箱。



黒川紫香選

岡山県 大石 あすなろ

ストレスを流す雨なら濡れてゆく  
傷心を母は上手に縫い合せ

カーテンを開けるととんで来た噂

丑年の粘りをみせたプロポーズ

普賢岳 市長のひげにある痛み

浜田市 中尾 まゆみ

逢えぬまま大地の音を胸に抱く

折れそうな枝もいのちを振りしぼる

やがて消える余韻をそつと手にたたむ

階段の途中で慕情もえてくる

さりげなく下手な言い訳聞き流す

松山市 白石 春 嶺

廃校の空に寂しい月が冴え

ふる里に母がいるから足が向き

よく乾くイリコが浜の陽をはじく

簡単に子がマンションを買えと言う

どちらかが付き添う杖になる老後

富山県 高 島 五月

針千本もう信じないランドセル

サクラサク仏の頭撫でたから

墓参り風も一しよに泣いてくれ

花ことば集めて咲かせたことがない

山寺の鐘を聞いてる老いふたり

富山市 島 ひかる

一ねんに一度逢瀬の桜貝

あの人を想い出させる花吹雪

好きになる予感あなたの目がやさし

久方に逢えば女の目がうるむ

売られゆく馬の涙に目を伏せる

名古屋市 藤井 高子

青空に弾む 五月の子の返事

五月雨の露地におんなの傘映える

昨日より少しいことあれば佳し

傷口に少うししみる忠告で

デザートのように錠剤飲んでる

広島市 流 奈美子

父の章記すとペンが威を正す  
連休の羽田ひしめくパスポート  
景気よい音で硬貨の鳴る財布  
千代紙が鶴になる日の春愁よ  
人愛す木々の一途なまで緑

芦屋市 黒田能子

損ばかりしていた亡父の大きな手  
紅を差し息づいてくる紙人形  
カラフルなおしぼりを出す新世帯  
赤い羽根義務を果たしたように付け  
コリコリとたくあん噛んでる歯の白さ

柏原市 大峠可動

亡父よ亡母よ仏の弟子になり得たか  
一の矢も二の矢も愛の口笛よ  
リハビリの痛みきりきり樹に登る  
春近くチクリチクリと針葉樹  
黄昏の彩は大地の羽衣か

尼崎市 児玉歌子

追憶の影を彩る一行詩  
刹那的愛を奏でる窓明り  
飛び出した娘から届いた寒見舞い  
淡い思慕抱いて降り立つ港町  
春一番受け流して流して猫柳

富田林市 池 森子

黒い噂と札束が舞い降りる  
父の秘密は言わないことにする帽子  
美しい裸婦に誘われてる絵筆  
誘うのが下手で冬から抜けられず  
竹トンボ茅葺屋根の方へ飛び

熊本県 大川幸子

こんなにも身近なところに風がある  
手探りで歩く地図にない小道  
風化する向う三軒両隣  
曲りたくないのに曲って出たキュウリ  
がらくたが部屋を占領しつつある

静岡市 沢田きん

気まぐれが時に予定をくるわせる  
聞こえないはずだが軽い咳をする  
浮き雲に乗って地球を眺めたい  
とほけては嫁に甘えて親しまれ  
思い出に酔って飽きない古日記

砂川市 大橋政良

札束へ転び上手な風になる  
糖衣錠騙し上手になりました  
窓あけて鬱を吐き出す粗大ゴミ  
捨て犬が一匹ふえた鍋の底  
定年の箸が淋しいどびん蒸し

出雲市 原 章 峰

啓蟄や息子におくる笹蝶  
ゴルフ場の芝が一番先はしゃく  
したたかに生きてる苔が暖かい  
折り返し地点で父を捉えそ  
目立たないように煙草が売れている

和歌山市 山 田 博 章

連休明けのために連休寝るとする  
航路通り走ると眠くなってくる  
栄光の日と思わせた点と線  
同じ鍋つついて明日の話する  
鍋底のお焦げとつても頑固だな

久留米市 鶴 久 百万両

月の浜辺で未完の恋に火を煽る  
多忙でも奴の見舞いはつづけよう  
たそがれる嵯峨 求婚のチャンスくる  
傀儡にはならぬぞ俺も男なり  
鎮静剤欲しくて初夏の森へ翔ぶ

京都市 山 海 友 熙

嫂の味方で彼岸の宴が済む  
いきなりに電話の声を褒められる  
春風にうっかり秘密を口にする  
相談にゆく逢いにゆく遠いひと  
桜散る庭で尼僧の頭剃る

鳥取県 大 角 幸 代

海の見える窓めいっぱい開け放つ  
蛇いちごの朱は悲しい愛ですか  
クレヨンで力一杯描く希望  
ふり向けば笑顔をくれる人がいる  
言い尽くされた言葉がとてもよい響き

鳥取県 大 角 正 道

やつと芽が出たので好きになりました  
幸せに睫をぬらすことがある  
誇らしい顔して父親になろう  
ふだん着の肩から花びらが落ちる  
手袋を洗って春の陽に干そう

尼崎市 森 安 夢之助

再婚の夫婦茶碗が温かい  
代筆を祝儀袋が頼みに来  
ぎょうさんの悪い友が居て老い楽し  
評判の漫画 婆さんが読んでいる  
珍客の胸に一物ありそう

尼崎市 長 浜 澄 子

娘も二十歳そろそろ心つもりする  
コーヒーの美味い窓辺で聞くワルツ  
ティーカップ朝は他人の顔でいる  
明るさで救われている闘病記  
しなやかな文字で核心突いてくる

広島市 森 田 文

藤井寺市 高 田 美代子

ドラマのように計報がつづく寒の入り  
夫がいてよかった灯油買うてくる  
繁華街で出会い悔みをいい忘れ  
わたしにもあつたよ雲をつかむ夢

軒かすりそうに田舎のバスが行く  
金のある人を推薦しておこう  
佳いことばかりあつたら呆けてしまふだろ  
グリーン車の椅子でパブルの話する

松山市 丹 下 美津子

尾 宮 弘 治

菜の花の中を今年も春遍路  
走って来た吐息へバスも待つてくれ  
他人の血愛の鼓動が打ちはじめ  
雪女立っていそうな峠道

尼崎市 的 場 十四郎

お似合いと上手に誘う試着室  
熱心が過ぎて風邪ひくダイエツト  
それぞれ不足十指で庇いあう  
爪楊枝の置き場も言うて妻入院  
感動もなく過ぎて行く日曜日  
同居人二三言 三言で足りている  
別別の部屋で同じドラマ見る  
群れる子のように並んだつくしんぼ

尼崎市 野 瀬 昌 子

見ないでと長い紅帯解く女  
雑音が多くて審議進まない  
別居だと誘いにのつた京人形  
母と娘が許し合つて終い風呂

米子市 足 立 由美子

苦虫へ笑い袋もくたびれる  
物腰が柔らかいので油断する  
父さんに指定の席がある平和  
箱入りの猫で骨まで取つてやり

尼崎市 山 本 す み

反省をぎつしりつめている日記  
やつときた春と遊ぼう思いきり  
桜見る約束もあるカレンダー  
老母がまだ元氣という幸抱いている

豊中市 み き わきみ

受け皿はいつも寡黙で瞑目し  
いる時はいるさと財布気前良い  
ウンウンと頷いている妻でなし  
のっそりと来てむつつりと去つて行き

和歌山市 森 茜

人生の疲れか父母の夢しきり  
チンパンジーくらいの知恵が孫につき  
我れ七十 路郎師夫妻を思いけり  
チャーチルを尊敬煙草は止められん

香川県 川崎 ひかり

あの人にくちは言うまい聞かすまい  
いつからか歯車ずれた嫁姑

もうないか税金控除の領取書

なんでまた大事な時に居ない夫

香川県 工藤 吟 笑

書体見てなつとくのいくお人柄

来るかいな来ないかいなの孫が来る

丸腰で話しに来れば断われぬ

薬にも毒にもならず八十の春

岡山市 中嶋 千恵子

おつき合い程度の涙なら出せる

見栄はつてもやっぱりつらい向い風

字あまりをもてあそんでる春の宵

二ん月の月に心を盗まれる

鳥取県 橋谷 静 江

子等のため働くことに誇りもち

幸せを掴むジャンプは夫とする

風呂上がりミカンジュースに上機嫌

減塩ヘリズムの合った膳囲む

兵庫県 森脇 和子

赤ペンに楽しい企みふくませる

約束のない日大の字になれる

安楽死の話を友と寺詣り

肩書きの一つ一つにある自信

摂津市 木下 道子

さばさばと別れ上手な国際線

収穫のノルマ果して土眠る

ほんとうの愛はチョコなど欲しがらず

流感の妻にお粥が煮こぼれる

出雲市 岸 桂子

迷いから覚めれば青い空がある

吸い殻をくの字に曲げて立ち上がる

本当の自分を刻む日記書く

転勤の肩に一ひら桜散る

鳥取県 伊吹 富恵

ふつくと妬く妻だから裏切れぬ

ひかえめの誇りが匂うすみれ花

灯明に座して人間取り戻す

ジゲおこし狼火を今日もあげている

高槻市 守先 伸子

春めく日合格便が舞いながら

心配を笑顔で送る受験の日

物忘れ老いの足音ひたひたと

わらべうた歌えば亡母に会えそうで

旭川市 朝倉 大柏

言う言葉ないから笑顔だけ返す

冗談にされて益々気にかかり

自分でも莫迦だと思ふ時がある

顔はともあれ着てる物ほめられる

西宮市 菊池 トミエ

熊本市 黒田 緑

朝散歩垣根の中で吠えられる  
おぼろ月今宵のコース彼まかせ  
うどん食べ音たてるなど言われても  
柳の芽厚いコートは脱ぎすてて

西宮市 牧 淵 富喜子

鶯が来たよ来たよと言ひ触らす

春の彩ほどよくおから炒り上がる  
価値観が違つて人間面白い

湯上りの髪乾く間を便り書く

姑の愚痴じつと聞いている流し台  
春の香をほしくて窓を開けておく  
バスを待つ姑は感謝の草むしる  
春の雨みんなふくらむものばかり

兵庫県 西井 つや子

夢つめた手垢の本が捨てられず  
読み終えて児はひとしきり蝶となる  
麦飯の香を愛おしむとろろ汁  
真直ぐになつて螢の消えた川

静岡市 増田 扶美

お言葉に甘えて一服頂戴す  
青信号また又またに嬉しゆなる  
乙女椿 蕾の芯だけ虫が食ひ  
生真面目に出席すれば役にされ

熊本県 岩切 康子

絵具皿 幾度変つた色を見た  
病院の白い廊下に蠅一匹  
奥深く心触れあう同じ趣味  
凸凹の道にそっぽを向く政治

続編を母に託したパンの耳  
休んでた手足が喋りだすノルマ  
鯨音のひとつに日差し長くなる  
愛の鞭まだまだ辛い点続く

和歌山県 小倉 アサ

雪解けの小川が唄う早春譜  
バーゲンの玉子を買っている男  
大事にねと言う外なし友の背  
菜園のはなしは罪のない話

島根県 槻谷 一葉

春風に乗つた花粉が暴れ出す  
ぼろぼろになつた同士で庇い合う  
金策を愛想笑いで外される  
ぼろぼろと流す涙にしてやられ

尼崎市 明壁 敏之

鉄瓶はシュンシュン猫は寝てばかり  
一枚の写真に秘めているドラマ  
外交のはらはらさせる軽い口  
ドアチェーン一人暮しは淋しいね

大阪府 勢理客 トミ子

和歌山市 堀 畑 靖 子

今が旬ですと笑っている熟女

御結婚おめでとうまた金がいる

久しぶり我家の空気吸う夫

家計簿に歪み週休二日制

岐阜市 渡 辺 杏 村

女系家族ため息で見るとこのほり

ポスターの山の景色にほれました

気のアセリ赤信号がたしなめる

小商人バブルもなくてマイペース

鳴門市 八 木 芳 水

誤字多い便りに今を励まされ

遮断機が早めに下りて事故防止

休日もなんの鳴ってる寺の鐘

寝返りを一つする度明日が来る

酒田市 永 澤 裕 子

辻褄を合わす習性持っている

定退の夫が背広で行く本屋

ダイヤルを回せば届くふぐ料理

花名所近くの人は無関心

駅からの電話で迎え頼まれる

郵便で音信一杯詰めて来る

万歳の声を達磨が待っている

餌を撒けば仲間をつれた庭雀

島根県 菅 田 かつ子

水仙を活けると抹茶欲しくなり

何となく便り書きたい昼さがり

駐車して道草したい花の群

娘のような保健婦さんが頼もしく

佐賀市 江 口 万 亀 子

老化現象ですとねと医師シブくれ

しあわせの種を蒔いてるポランティア

ドーナツのように目立ったイヤリング

見合相手選ぶに父の反抗期

福岡市 井 崎 ミ サ 子

あんれまあ おどけて見せる間柄

夫の横 乗ると免許がほしくなり

くたびれた顔と洗濯物帰る

うわさする本人ヒョイと顔を出し

熊本県 増 田 一 乗

思い出の数々妻の足を揉む

職人の技で生垣らしくなり

春闘に経営陣は不況と言う

見較べて十円違いに走る足

姫路市 松 本 一 郎

添寝する母早々のいい寝息

子の電話用件だけを言っって切り

東大卒が身内に一人居る不思議

去る者は追わず思いを募らせる

尼崎市 鈴木良征

肩身の狭い武者人形が隅にいる  
ひらがなのような暮しをしています  
火中の栗欲しがる猿がいて困る  
相づちを打つ掌が少し震えてる

違句 尼崎市 山田保蔵

休みたいが休めないから休みたい  
気がつけば隣の家も老夫婦  
痛む足がなればあれが家の灯だ  
別居する話で結婚しましたが

尼崎市 湊修水

二ん月に散ったサクラをいとおしむ  
何もかも不足核だけありあまり  
春風に誘われ旅に出たくなり  
もしもしてカゼひいたのと気づかわれ

熊本市 北川一進

少しだけ習い見舞の水墨画  
残飯は庭の雀におすそわけ  
一年の汗が集まる決算期  
相棒がまた出来ました鯉のぼり

京都市 小林英子

ドアの鍵カードになってからの鬱  
全身にロマン溜めてる春苺  
極め付き男仕立に板場さん  
啓蟄に心はなやぐ市場かご

貝塚市 池田寿美子

ボケベルにせっかくのムードこわされる  
美しいものは心の隅におく  
ささやかにモラル守ってひとり住む  
あ・うんの仲 青葉の下に雲を追う

尼崎市 吉永伊三郎

カルチャーの電話に妻の眼が光る  
気がつけば後に一人というレース  
窓際をしぶしぶ譲る肩たたき  
つり上げた眉を宥めてほしい夜

尼崎市 岩倉キク子

玩具箱ひっくり返して子は昼寝  
まだつばみ許しを乞うて小枝切る  
父からの躰の遺産娘にゆずり  
自己満足空しさだけが残る意地

岡山県 福原悦子

耐え抜いて磨いた道を子に譲る  
日の当る坂道を待つ凡夫婦  
家中の望みを背負う呱呱の声  
わだかまり解けて先祖の墓洗う

唐津市 入江喜久亭

沈丁花匂いに亡妻を思い出し  
パチンコで負けた悔しさコップ酒  
いらいらが日毎につのる夫婦仲  
はしご酒別れた友とまた出合い

松江市 佐野木 みえ

すれ違ふ香り記憶の中にある

振り向いた笑顔に五月の風薫る

甘栗をテレビ見ながら食べる幸

羽曳野市 芦田 絢子

離ればみななつかしい人ばかり

不可侵条約息子も大人になりました

電話した方が負けだと意地を張る

和歌山市 山口 三千子

しばらくは逢えぬ別れを発車ベル

折り返し地点で生きる返し針

人生とはこんなものかな金魚鉢

和歌山市 玉置 当代

外野席多くて話まとまらず

昼メロの終わるひととき花活ける

飾り気がないから みんな来てくれる

和歌山市 田中 みね

間違い電話うちはソバ屋じゃござんせん

おっとりに見せて急所を突いて来る

どんでん返しが怖いあなたの底力

東大阪市 安永 暁子

小言言う相手のいない晩の膳

音がない隣はどうも留守らしい

平和ほけ大型ごみの気前よさ

寝屋川市 宮崎 菜月

かなしみの暦の上に春が立つ

花ひととき人ひと盛り冬木立

胸奥に確かにあったこの情景

兵庫県 倉垣 惠美

春ですね お子様ランチの小旗にも

タンポポをコーヒークップに生けて春

頑として柿の古木が逞しい

今治市 渡邊 伊津志

動くもの動いて春の海暮れる

野心家のしきりに動くのど仏

美しい海で小魚しか釣れず

佐賀市 古川 一徳

遺言状書く気にさした友の計に

楽しみはあるのだろうか蟻の列

朝礼のスピーチコラムの味を添え

兵庫県 円増 純子

愛と夢縦横にして布を織る

どの窓も幸せそうな灯りつけ

生かされていると思う日空の青

十和田市 阿部 喜久江

気晴らしに大バーゲンで買いいあさり

うなずいて子の言い分を聞いてやり

入院をさせられ心弱くなり

鳥取県 奥谷彩子

童謡の丘に夕陽が降りて来る  
発車ベル老母の言葉を積み残す  
男結び覚えて息子家を出る

鳥取県 浜田民子

おだやかな顔百歳の演技する  
おだやかで聞けぬ噂を耳にする  
曲り道かぞえきれない程歩き

西宮市 岡本道子

甘栗を割ってゆるりと日が暮れる  
詫び状の筆なめらかな昼の月  
命乞いしてなるものか落椿

熊本県 高野宵草

妻という喧嘩相手と四十年  
玉砂利へそれぞれ歩き癖の音  
鯉のぼり見れば男の子が欲しい

堺市 桜井莊次

不完全燃焼してる片思い  
雑音をすんなり通す左耳  
水割の底に埋まる猜疑心

尼崎市 前田いわお

貸農園ご自慢作のコツ習う  
同窓会白髪頭に童べ顔  
世間体ばかり気にして踏み切れず

鳥取市 西村黙光

鉛筆が勝手なことを喋り出す  
中古車の業者が覗く事故現場  
良心に恥じないだろか金バッジ

鳥取県 山内芳江

特訓を受けてる猿に負けられぬ  
目の高さ変えて子供と対話する  
運勢を気にするくせに聞きたがる

鳥取市 大坪天涯

冬空の星がいちばんあたたかい  
野心ただひとつ男は穴に居る  
愉快なる石で転がりまわってる

熊本市 遠山夏生

反論になると火が付く女たち  
へそ練りは郵便局に決めている  
物交のように名刺を取り交わす

出雲市 島重昭

暗唱番号一つにまとめて街暮し  
替え芯がも少し欲しい課長補佐  
春日和大きな笑いの顔がある

唐津市 福島紀一

冷蔵庫飽食の世をあきれてる  
お茶漬は漬け物の味妻の味  
ミニスカート春の微風が好きらしい

解つたような顔がだんだん眠くなる  
仲裁はしたいが喧嘩面白い  
笛を鳴らして何処へ行こうか縄電車

宇部市 中村三良

岡山県 森下正子

疑えばますます落ちる蟻地獄  
外出の策を練つてる嫁姑  
頂上から我が家さがせば小さ過ぎ

静岡市 浅子まつゑ

子には子の生き方あつて学ぶ道  
軽い気で言つた言葉が引つ掛り  
パンの耳どうにも老いになじめない

静岡市 永倉柳華

里帰り三日も居れば使われる  
目覚ましに起こされ夢をこわされる  
真剣な顔で絡んでくる男

枚方市 森本節子

きんさんぎんさん目標にして鍛えてる  
同病の手記は二三度読み返す  
苔庭はそばふる雨の恵みかも

守口市 森川春子

朝粥にきめたグルメの旅仲間  
粥に手を温めてから食事とる  
義理チョコをおし頂いて御回診

蓄音機かすれた声で歌い出し  
賽の河原に近づいてゆく万歩計  
あちこちにある奥座敷 旅に出る

広島県 森川抜智

出雲市 園山かおる

言い訳はしないさ空は真つ青だ  
新鮮な水は淀まず海へ出る  
花の種まいて花野の夢を見る

今治市 渡辺南奉

空白を一気に埋めるクラス会  
白黒を大人が決めるからこじれ  
僕だって柿の種よりにぎり飯

枚方市 濱田良知

ざる蕎麦だが何と時間の速いこと  
もう一本飲んで帰るか妻が留守  
メーカーに飢えを知らない顔ばかり

鳥取市 近藤秋星

夢を売る人が来ている春の街  
女房のようにはうまく付けぬ嘘  
カレンダー二月のままで病んでいる

大阪市 今西静子

神戸医大受話器合格 万歳だ  
再会の指切りしたがそれつきり  
うなずいて聞く美しい嘘だから

岡山県 江口 有一朗

枚方市 海老池 洋

はつきりとものを言わない肚の芸

留守番電話 壁に向って言うような

えいっ面倒一人住いのチャンコ鍋

うす気味の悪い笑顔が寄ってくる

花一輪青磁の壺が生きてくる

早送りしたい女の長話

岡山県 伏見 すみれ

神戸市 岩田 信義

掌にうけて雪の命の消えるまで

一つ抜けた台詞を後で思い出す

涙ぐみ愁いをためた冷凍魚

手をつなぎ子供にかえる同窓会

大阪弁のあの娘が目立つ転校生

もう話切りあげようと欠伸する

岡山県 後安 江山

羽曳野市 福田 悦子

聞く耳を持たれば明るく広がる輪

アルバムの亡父は六十九のまま

三階の視野にストレス解消し

お寺から年忌でつせと言う電話

騒ぐまい噂の花は実らぬ話

PLは今年野球を見せませ

相生市 中塚 礎石

東京都 山口 新子

弾の傷それぞれ戦もの語り

病人に春を語っている真冬

過労死の一步へ今日も靴を履き

上野駅 日本人は探すほど

プライドの端を切り捨て軽くなる

雪解けのところどころに疲労感

兵庫県 北川 とみ子

岡山県 牧野 秀香

水割の底へころがす愚痴の数

熱燭が待つてる帰途の足軽く

しまったかぶりの言葉に退屈してしまふ

白い杖しばし歩を止め梅の香に

豆撒いて鬼の行方を追っている

蝸牛大なり小なり我が家持ちち

鳥取県 鈴木 公弘

姫路市 谷 清柳

車座の真ん中に置くさくら餅

能面の下で欠伸を噛み殺す

春うらら池のメダカと戯れる

踊らされたピエロ謀叛のむしろ旗

光る海からあたたかな春もらう

無位無冠幕切れ飾るものがない

八尾市 秦 正子  
他愛ない秘密を抱いて黄昏る  
頷いた後の祭の寒いせな

唐津市 野崎 ハル  
リハビリの足へ大地は答え出す

早起きは旨い漬物朝市に

我が奢り一本つけた上にぎり  
海と川はざまに懸る豪華橋  
出雲市 富田 蘭 水

道草をしてストレスを封じこめ  
蕾かたいそれでも嬉しい花便り

鍋囲み子らに優しい父になる  
新潟県 高野 不二

さくらめーる使ったクイズ当りそう  
血管がつながりそうに握手する

ポケベルがデートと見抜きなり立てる  
鳥取市 植田 一京

ふる里は実家もう無く絵にならぬ  
ぎっしりの本棚どれも捨てれない

Aランク目指して今日も生きている  
鳥取県 山本 正光

換気扇 掛けて玉葱刻んでる  
ジーパンで新婚さんは空の旅

相槌をうったばかりに逃げられず

寝屋川市 井上 すみれ  
砂時計 長くもあり短くもあり

買い替えた紫檀の家具に押す指紋  
有名人小骨がささって聞くニュース  
西宮市 亀岡 哲子

立寄った画廊にモネの散歩道  
チョコレート恋の芽ばえの花りぼん

はこべ芽ぶき森羅万象息づきぬ  
藤井寺市 田中 孝子

未だ来ぬ人に伝言板ゆれる  
落丁のあまりに多き私の譜

夕風のテトラポットは小波呼ぶ  
羽曳野市 山本 たけし

春おぼろ月も眠たい貌をして  
処分市 春雨ついて走る朝

ジュースだと言って飲ませた風邪薬  
姫路市 山崎 治夢

勤労奉仕 見知らぬ人と良く喋り  
孫のノート大きな文字が躍ってる

周囲皆包み込むよなお人柄  
島根県 松本 聖子

春雨にすべて流そうさっぱりと  
眠れぬ夜ハローハローと電話する

雑草の中にも光る露の玉

兵庫県 酒井靖子

ジャンケンの鉄やんわり人を斬る  
いざと言う時の水は溜めて置く  
こまこまと動き淋しさから抜ける

大阪市 清水絹子

素うどんに熱爛そえる作業靴

名古屋にも雨ふってるらし長電話

寝るときにもう寝たかなと子と思う

寝屋川市 北岡波留吉

愛妻にノートを任す白い杖

老妻をフレッシュさせる春の風

おまつりの足引きとめる飴細工

松江市 松浦登志子

馬拉ソンのゼッケンにみる社の商魂

子の秘密知って知らぬふりをする

親馬鹿によく効く葉売ってます

芦屋市 根来敬

飴玉を舐めさせられて左遷され

諍いの解けないままに冬の雨

抱き合わせて要らない物が増える鬱

和歌山市 榎原公子

凱旋の旗は決して白くない

紅が濃くなって娘が遠くなる

ちぐはぐにボタンをかけて母と娘は

河内長野市 大西文次

誘うのでなかった化粧長過ぎる  
通り抜け妻とは行つたことがない  
親のない子に先生の手が温い

和歌山市 西村和成

幸福の子感朝めしうまいから

ラッシュアワー人格変えるほどに混み

受験の日きつく結んだ靴の紐

八戸市 島田昭治

漫然と生きて人生悔い残り

切札を持たず平気で暮してる

このごろは方便以外に嘘をつき

泉佐野市 大工静子

校長も里の言葉で田圃道

くたびれた辞典今日は修理する

八十三回目赤飯を押しただく

大阪市 尾崎黄紅

車購う子に少し扶けてやるつもり

働き蜂だったが酒は旨かった

よく似たひとだ残り火が燻っている

大阪市 平井露芳

割箸にもあつたひ弱な二等品

梅の香に甘酒が合う綾部山

会社でも豆を撒いてた年男

唐津市 江川 青琴  
化粧品買う楽しみも趣味のうち

また一本抜けた淋しき秘めておく  
気配りをし過ぎて失敗ばかりする

静岡市 大村 正雄

茶碗酒なぜか意見が合ってくる

疑えばどこから出たか保釈金

童話を歌いつ孫と雛かざる

川西市 田中 喜俊

孫の雛ゆっくり眺めて老いを知る

百歳の姉妹羨む米寿母

豆腐屋はぬれ手で札のつりをくれ

兵庫県 奥野 テル

柳誌着き今日も明日も楽しもう

桃活けて私の部屋も春にする

叱られた子供一理を主張する

明石市 小川 酔月

思い出すたびにアルバムぬれている

平凡な幸せの中に今日があり

よく聞けばどっちが悪いとも言えず

静岡市 小木 久子

どうしたの今朝はご機嫌悪いこと

イタリー製などとお洒落の靴自慢

少しだけいい事をして嬉しい日

唐津市 山口 ふさ子

待ち時間川柳本が埋めてくれ  
失った青春探す散歩道

ふえん(生魚)寿司作れば亡母が側に居る

唐津市 山門 幸夫

想い出が日毎に消える街づくり

散歩道今日は違ってポチせわし

怖いのがいると仔犬は主人待ち

豊中市 田中 道胤

鍾馗飾り少し早めに雛仕舞う

初蟬が三日早いと日記帳

考え事環状線の昼下り

静岡市 片平 静代

着物なら大根足も隠される

いつも風邪引いてるような咳が出る

新聞の記事はテレビで知っている

香川県 田中 ふみ

一世紀白小の歴史知る柳(母校白鳥小学校百周年)

おはようと一声くれる孫が居る

山道を揺られ揺られて遍路ツアー

岡山県 後安 ふさえ

ごめんねとナース何度も針を刺す

虹を追う女足元たしかめず

朝蜘蛛のげんをかっいで軽い靴

和歌山市 岩本 美智子

悪いとこばかり似ている子に怒り

小さい方勝てと判官びいきする

化粧する女も混じる始発バス

松江市 浦辺 静江

桜の木思もおもいの顔で待つ

お互いに老いて一言多くなる

味噌汁をさめるまで待つ総入歯

箕面市 木村 天弘

旅に出る日取り暦で母が決め

仏壇花 毎朝供え留守頼む

無人駅 花一杯でお出迎え

池田市 木村 一笛

庭の木はまだ咲かぬかと小鳥鳴く

役得を心得すぎて尻尾だす

ながながと妻の座で居て下手な酌

大阪市 乾 哲静

百歳になっても税金とられます

新幹線 日帰り旅費に恨まれる

目が見えて耳も聞えて喜寿の春

姫路市 福本 好花

見も知らぬ名前なつかし文芸欄

おしゃべりな老妻は体重七十K  
聞いて見りや似たことして同世代

東大阪市 大平 太一郎

嬉しさが包み切れずに手に土産

逝く友に黒丸つけて休肝日

もつれても笑顔にホッと縄のれん

橿原市 西本 保夫

がむしゃらに働く趣味のない父で

お隣は別荘のつもりでいるゆとり

客よせの水車に水がなくなまる

吹田市 西岡 豊

ひとことの台詞だけ欲しい響き

目覚しを倒し蒲団に潜り込む

大広間もてない顔ともてる顔

姫路市 福島 姫女

亡き母は涅槃に在す釈迦のもと(亡母の忌)

雑並ぶ顔それぞれの個性見た

象「姫子」四十年ぶりの鎖とれ(姫山動物園)

富田林市 山原 昭水

後輩が上司になって胃が痛む

わが娘より不美人がでるコマーシャル

口下手と無口の夫婦絵筆もち

島根県 武島 ちよえ

法話聞くわたしの足がぐずり出し

古稀近い夫の腕にまだ頼り  
眼科医の顔が鼻先すれすれに

唐津市 浜本治幸  
ふるさとはうまい空気が満ちている  
中流の顔して家は火の車

島根県 福岡博利  
妻病んでこんなに多忙だったとは  
七人の子が寄り亡父を肴にす

八尾市 向井しづ子  
土曜日は父さんどこに食べにいこ  
早春にすみれ根づいて陽のぬくみ

和歌山市 木村親路  
大学は出たが継ぐ気のない田圃  
ここで手を叩けと言われ手を叩く

和歌山県 三原究  
逆境に泥水被る気の決意  
噂など平気と噂意識する

和歌山県 上岡正直  
片隅のメモ真実を知っている  
大の男小さくなって言い訳す

静岡市 中西雅  
日めくりをめくった今日も無事祈る  
富士に暈 雨傘の旅心濡れ

寝屋川市 豊福路子  
慈母のような匂いが染みる師のたより  
怠ったぶんをつけ足すお燈明

寝屋川市 籠島恵子  
梅の花さわぐ根元にイヌフグリ  
立ち止まり視野には旅の夢を入れ

泉南市 坂根流水  
春風に雪駄鳴らして力士行き  
春うららしい気になって風邪をひき

兵庫県 中野とよ子  
雪が舞う明日の門出を案じつつ  
満ちたりた心の底から笑顔もれ

池田市 水木博男  
今度いつ会えると小指からませる  
いま来たと惚れた弱味は嘘を言う

静岡市 柳沢たま  
大袈裟な記事で売ってる週刊誌  
三歳児着物が歩く七五三

奈良市 井上大  
大和路の追い風自民震え出し  
いじめられっ子みたいな総理頑張る

静岡市 青柳金吾  
三年目手抜き仕事が現れた  
スタイルはビキニ金槌とは見えぬ

岡山県 平田たけよ  
地下足袋が今日のプラン言うて出る  
抜きさしのならぬ相談持ち込まれ

大阪市 山北 三三三  
四国の春は遍路の鈴の音に明ける  
煙草止めましたと自慢する男

米子市 小塩 智加恵

年金も預金も妻に任せてる  
万両と千両鳥の餌となる

広島市 中村 要

五句抜けて家の階段踏み外し  
半分は妻が書き足す私小説

鳥取県 美浦 美代子

若貴は卍巴で綱めざす

吹雪く日も野仏の顔おだやかだ

福岡県 本田 忠男

語らない父には重い半世紀

周り見て気兼ねしながら喫煙者

高槻市 小林 紀美子

猫の背に春の陽ざしの匂いして

麦の穂がまっすぐ天をついてる

鳥取県 権代 康女

もう五分眠っていたい陽がまぶし

見渡せばどの嫁見てもよく喋る

岡山県 富坂 志重

曾孫のコート編める頃には歩きかけ

歓声や奇声でゲートの球を追う

香川県 田中 スミエ  
人手に渡った生家の道かえる  
幸せをみんな先取りして育つ

高知市 桑名 知華子

知事の記事写真入りから読み始め  
ドアばかり睨み付けてる手術室

大阪市 川原 章久

こんなにやくが煮つまっている庚申堂  
そつと囁く孫と私の内緒事

岡山県 土居 ひでの

神話の浜に今も伝わる鬼太鼓

甘酒をすすり家族の雛祭り

鳥取市 萩原 美雪

密会の男女にあった物語

ボスとして器量を持たぬボスばかり

姫路市 服部 一典

本当のこと言えば叱られる

助手席が何時の間にやら妻になり

鳥取市 谷口 百合子

漁火が燃えてまもなく星が降る

消毒を効かせて握手する私

鳥取県 小西 五十鈴

ワンピースが凝るなど言ううれず

幸せはつぎつぎ趣味の友が増え

香川県 植田 千カエ  
光る春ツクシンボーが顔を出す  
パパに似た名もない孫の声元氣

兵庫県 玉田 三重  
極楽の切符ほしさに写経する  
私にも鬼と仏が住んでいる

静岡県 宇佐美 寿美  
もう一度来たいと憩う観光地  
めつきりと女らしくて父眩し

寝屋川市 太田 とし子  
おばさんの手旗は声も添えて振り  
咳一つきこえる母の一人部屋

松江市 安食 友子  
酒好きははずくたりとも確かめる  
お互いが孫を中継にする家風

静岡市 三浦 つね  
持ってみて軽いキャベツはそつと置き  
毎日がすきつとしない苦労性

大阪市 小糸 昭子  
油断してコップの水を溢れさせ  
日が暮れる悪女ゆらゆら動き出し

静岡市 大石 たき  
安売りにつられて財布軽くなり  
影ばうし夜空にひびく靴の音

十和田市 小笠原 敏夫  
舞ノ海決まり技一つ足して勝つ  
花相撲本割よりも汗光り

鳥取県 中西 智恵子  
密やかな笑みをたたえて夫婦雛  
スカートへ肥満の腰を責められる

鳥取市 中居 武士  
孫のけが親より祖母が大騒ぎ  
先生が十人意見まとまらず

鳥取県 石谷 美恵子  
目いっぱい飾り心を覗かせぬ  
背の筋を伸ばせと和服拗ねて見せ

米子市 服部 朗子  
ふつくらと平和な味の薩摩芋  
姉妹が揃いの服で里帰り

寝屋川市 坂上 高栄  
鮮やかな民族衣装のレセプション  
おままごと子はメルヘンのお姫さま

羽曳野市 徳山 みつこ  
合格発表子育てすんで遠くきく  
スキヤングルたどれば料亭奥座敷

唐津市 山下 剛司  
星空をながめて歩く酔いざまし  
たまに行くキープのボトルうれしそう

人の絵馬欲張つてると言えぬなり  
ノルマには遠い数字の重い靴

豊中市 井上直次  
東大阪市 松山隆

運転手 背に目のある語り草  
蛇口から水とヒントがとんで出る

和歌山県 吉田武治

職退いてバンドの伸びが気にかかる  
知った振り疲れを溜める破目になり

米子市 木村はるえ

指折って結婚記念何年目  
公園のプランコ雨に孤独抱く

大阪市 吉川哲矢

嫌いではないけど飽きが来たのです  
影もまた直線ポートタウンの陽

藤井寺市 菊地繁男

夜目が利く梟のようだとビル守衛  
ばあさんのさんさしぐれも久しぶり

佐賀市 大坪美佐子

点滴をしてから老婆よく話し  
街路樹でみの虫冬を耐えている

島根県 今川三津江

台風の生き残りと思うリングゴむく  
ご免ねとナースやさしく注射する

弘前市 須郷井蛙

娘は町へ嫁ぎ農には来ないはず

新品を買えば出てくるさがしもの

島根県 岩田三和

酔った父勝手を言うて寝てしまふ

光と風 丸い窓から今日は  
鳥取県 今本早苗

時々は密会をして楽しもう  
魅力あるまつげにほれて嫁に行く

鳥取市 谷口侑里

娘の縁談頑固な父が壁になり  
春ですね猫は毎日朝帰り

大阪府 藤明満子

へそくりも声出し笑う初孫に  
風邪引きをしようが湯で治す母喜寿

岡山県 三村美恵子

老眼鏡みなかける年笑い出し  
吹雪く中小さい梅もたえている

鳥取県 橋本孝由

新妻がピンクブラジャー月に干す  
減る資産孫の代には増やします

広島市 元林光子

新幹線速くするより安くして  
ランドセル机に飾り待つ四月

和歌山県 藤井春子

辛抱を肌で教えた母の背な  
原点へ戻ってわかる忘れもの

和歌山県 藤井春子

# 句評リレー

一—三月号から

西出 楓楽  
三宅 保州  
舟渡 杏花  
高杉 鬼遊

## 南天の赤父に似る母に似る

上田 柳影

楓楽 こう言ってしまえば身も蓋もないのですけれど、この句に限らず何かと何かが似ると作者が思うのは自由です。この句の場合南天の実が父と母に似ると思われたのは、作者のこれまでの人生の中で、ことさら強い思い出があるからでしょう。で、問題は読み手がどれだけ共感を得るか、なのですが、この表現だと作者のひとりよがり前面に出すぎないでしょうか。

保州 作者の存在感が強い主観的な句だと思えます。「南天の赤」が主張となって迫る良さがありますが、反面、楓楽さんのおっし

やるように、ひとりよがりとも言えます。父も母も南天の赤に似ておられるのですか。父か母かどちらかに焦点を絞る方がよいようにも思いますか…。

杏花 私は表現の云々よりも共感。と申しますのは、今は亡き父が昔、新築の庭に紅白南天を植えてくれ、その南天を年毎の正月の床に活けて、父を恋いながらも柳影さんのように句にしたことのない私。親不孝の自分が責められて…。柳影さんにならつての一句はさしずめ「南天の赤父思つ母思つ」。私事になりごめんなさい。

鬼遊 「南天の赤」とは作者の発見で、その後につづく父、母に、私の父なり母なりの重い感じを見る事ができません。父にも似る母にも似ると共通に扱われると、思いの深さが伝わって来ません。

楓楽 正直なところ、私もこの句を一読して、杏花さんのおっしやるような場面が、ふと頭をよぎりました。けれど、それだと「似る」では無理があります。表現が技巧に走り過ぎた感があり、作者の思い入れが十分に伝わらないのは残念なことです。

保州 杏花さんのように南天への思いで共感を得られたらよいのですが、私は、父と母を並べたことと、「似る」では作者の思い入れの深さが伝わらぬ弱さがあると思います。しかし、「南天の赤」は作者の大きな発見であり見つけの良さが出ていると思います。

杏花 皆さんのおっしやるとおりで納得は出来ませんが、私の父への思い入れが強く溺れてしまった今、句評に外れてしまったことお許し下さい。

鬼遊 すでに言い尽くされた感じですが、父または母の一語が持つ重さにもたれすぎたように思えてなりません。

## 空の青 バーを一段ずつ揚げる

土橋 はるお

楓楽 人間は単純なもので、お天気によつて気分が左右されます。「バー」と表現して

あるものが何であつてもよい、少しずつ向上して行こうとする心構えが、はじめに「空の青」と言い切ることによって、強められていると思ひました。

**保州** 作者の前向きな人生観が窺えます。心構えなどを詠んだ句が陥りやすい人生訓的なアクの強さがないのもよいと思ひます。

「パー」は、仕事であれくらしであれ、表現されていなくても、この場合はよいと思ひます。あえて言えば「パーを揚げる」が常套的な表現の感もします。

**杏花** 楓楽さん保州さんお二人と一緒に感想です。特に「パーを一段ずつ揚げる」に作者の日々の努力の姿が彷彿とし、私の好きな佳句。前向きな人生も表現も見習わねばと。

**鬼遊** 外来語を使った句には、ことばの持つ歴史だけの軽い感じがするのですが、内容の重さを「パー」によって、こんなに明るく一言にできるものなのかと感じる次第。

**楓楽** 鬼遊さんのおっしゃるように、外来語が心にくいほど効果的に使われていると思ひます。ところで、二巡目に気付いたのが「揚げる」より「上げる」なのでは。重箱の隅をつつくようなことも知れませんが、一字たりとも疎かにしたくありませんので、ご意見を求めます。

**保州** 「空の青」の明るさと、パーをあける前向きな努力という、現象と心象のコンビネーションが気持ち良く、共感を呼ぶ句になったのでしうね。「揚げる」より「上げる」ではとの楓楽さんのご指摘、そのとおりだと思ひます。

**杏花** 鬼遊さん、楓楽さんの言われるとおり外来語の効果、同感です。私も今まで人真似でちよいと使つてみても、何か今一つという経験があり勉強させて頂いた感じしりです。**鬼遊** 空の青へ吸い込まれるような、読み手を昂揚させる明るさが何よりよい。軽いつたい口は作者の人柄で好感がもたれる。

### 買う人も居ない自分を売りがり

吉田笑女

**楓楽** 孤独感にとりつかれた悲しさを、ユ一モラスにうまくとらえてあると思ひます。

つまり「買う人も居ない」の部分を、私はそのように解釈しましたが、保州さんは？

**保州** 自己評価（過信）するほど他人は評価してくれないという穿ちの効いた句と感じました。「自分」は作者でしょうか。それとも作者から見た他人でしょうか。作者自身で

あれば卑下気味、他人であれば他人を批判しているようで、句がやや暗いと思ひます。ユ一モラスと言われる楓楽さんと、受けとめかたが違つようですが、杏花さんは？

**杏花** 保州さんの「自分は作者か」また「作者から見た他人か」には私は作者が他人を見て詠まれた句だと思つ。わたしの周りにもこうした自己顕示の強い人をよく見かける。作者の「買う」「売り」の対照語も効いて一句は、にんげん生きてゆくにはと、しみじみ感じさせられる句だと思ひます。

**鬼遊** 作者自身であつても、第三者であつても、それはどちらにとつてもらつても結構だと、私は思ひます。売れないものを売りがりするのは商売だけとは限らない。こころの底を見られたように感じながら、これも人生だと味わつています。

**楓楽** 作者自身でも、他人であつてもよいと思ひます。見事に醒めた目で、人間をつき放して眺めている点で、作者はなみなみならぬ作句センスをお持ちだと思ひました。とかく女性性、どつぶりのめり込んで酔つてしまいがちなものですが。

**保州** 「自分」が作者であれ第三者であれ穿ちの効いた川柳らしい川柳だと思ひなりました。実力もないのに売りがり、売ろう

と無理をすると余計買ってくれない、教訓的  
な風刺をうまく表現したものだと思います。

**杏花** 楓楽さんの「見事に醒めた目」の評、  
私も同感です。笑女さんを存じ上げてるだけ  
になお感じ入っています。

**鬼遊** 自分のことであれ、他人ごとであつ  
ても、冷静に見えるのは、人生経験の豊かさ  
があつてのことだと思ひます。愚かさの露呈  
によつて教訓的な固さや匂いを感じさせない  
よつです。

### めかくしの刑に遇うのはわたしかも

吉 岡 きみえ

**楓楽** 何度も読み返してみましたが、句の  
向うに見えてくるものが、どうもはつきりし  
た形を取りません。この句のポイントである  
「めかくしの刑」と言うのは具体的に何を指  
すのか、また、この言葉でなければならぬ必  
然性をつかみあぐねたままです。

**保州** こういう傾向の句は「めかくしの刑」  
が理解されるかどうか、読者まかせというか  
突き放された感があります。楓楽さんでもつか  
みあぐねる句が、未熟な私にはとてもつかみ  
きれません。自己罪悪感にしても「めかくし」

という言葉は不穏当な表現と思います。

**杏花** 心象句、そしてとてもきびしい句と  
受け止めた。人間生きてる限り、私も含め  
て知らぬ間に沢山の罪を犯してる、その罪の  
一つ。見てはならぬものを見てしまった悔い  
が罪の意識となつて作者をさいなむ。そして  
めかくしの刑を自分自身に科しておられるの  
では、外れていたらごめんさい。

**鬼遊** 「刑」とは衝動的な語である。一句  
の味つけに軽く使われたのでしよう。じゃん  
けんに負けて鬼になるのは一人である。味方  
は誰もいない。そんな孤独感と理解したい。

**楓楽** 「めかくしの刑」がつかめないま  
まに、おもしろい造語で、フレッシユな風を感  
じたことは確かです。そして、世の中の魑魅  
魍魎の存在が、ちらりと一瞬見えたような気  
もしました。作者の、言葉に対するセンスの  
よさを、今後も句作りに生かし、佳句を発表  
されるのを楽しみにしています。

**保州** 句の解釈は、杏花さんのおっしゃる  
通りだと思いますが、句の姿勢、表現は肯定  
派と、アレルギーを起こす読者とに分かれる  
典型的な句だと思います。「めかくしの刑」  
という造語の功罪論でこの句の評価が決ま  
るでしょうね。

**杏花** 句評と言うことは忘れて、人さま

をすぐ私自身に重ねてしまふ癖、さしずめ私  
は終章までいろいろの刑に遇つたろうと。そ  
してあの世は地獄行か？罪多きわたしです。

**鬼遊** 「めかくしの刑」の感じ方によつて  
いろいろ解釈されることですが、社会的罪悪  
感でなく、見てはいけないものを見た、自分  
に対する軽いがめ程度に思つのが、この句  
の味わい方としておもしろい。

### 行列の中に不安な僕がいる

岩 佐 ダン吉

**楓楽** この句も先の笑女さん同様、自分を  
もう一人の自分が眺めているわけですね。こ  
の仕立て方ですと、作者と句との距離が大変  
効果的に働きます。ただ「行列」の表現が、  
具体性に乏しい嫌いがあるように思つのです。

**保州** 「行列」は、大勢の中にはいる付和  
雷同性ととりました。おこがましいのですが  
拙句の「行列の真ん中辺に居る安堵」と比較  
してしまいました。私のような愚人は行列の  
中では安堵してしまいます。「中に不安」は、  
不安だから中にはいなかったのか、中にいても不  
安で安堵できないのか、よくわかりません。

**杏花** 行列の列にもいろいろ。働き蜂の列、

たからくじの列、お祭りの列 E.T.C.。私は働き蜂に焦点を合わすつとびたりくるように思う。にんげんは幸せと思う時もこの幸せがいつまで続くかなどふつと不安がよぎる。ドラマ性があって佳い句ながら、楓楽さんのおっしゃっているように「行列」と言う表現に私もちよつぱりひっかかります。

**鬼遊** 作者を知っているだけにユーモアを感じる。およそ「僕」の不安など思いもよらないと想像するのは外面の判断であつて、人の知らない弱さを抱えている、そこが川柳の面白味だと思つた。

**楓楽** はじめに「行列」の具体性が乏しいと言いましたが、これは『諸刃の剣』で、あまり具体的であると、読む者が制約を受け、底の浅い句になつてしまいます。「行列」の語意のあいまいさの中に、現代生活の漠然とした不安感がよく現われていると考えます。

**保州** 皆さんの評とともに、もう一度句をじっくりとよむと「行列」も「不安」もいろいろな要素があつて、「僕」の不安感、焦燥感、淋しさはもちろん、行列にいても、人間は所詮ひとりであるとして訴えているようにも取れませんでした。

**杏花** 鬼遊さんのように作者を知つておられるとユーモアを感じられ、私のようにご本

人を存ぜぬ場合、深刻な句と受けとめる。だから川柳は面白くてやめられないのかも…。

**鬼遊** 深刻に作つた句も、軽快に詠んだ句も受けとる側によつて評価が変わります。しかし、鶴彬の句は誰が読んでも暗くて重いのは、その時代背景によるからです。この句の不安は、私たちも共有する社会の見えない流れに対する危惧だと思つた。しかし、「僕がいる」存在認識は、その方向を誤ることはないでしょう。

### 結び目を解くと空気が軽くなる

宮本 かりん

**楓楽** 「結び目」とは、絆とか、しがらみと解釈しました。その場合、「空気が軽くなる」メリットだけでなく、デメリットな部分もあつて当然なのではないでしょうか。この表現に一考あれば、もっと深みのある句になると思つたのですが…。

**保州** 失礼ですが、きみえさんの難解な句のあとに、この句を読むとホツとしました。よく分かるし共感もよぶ句ですね。それだけによくある傾向の句とも言えます。「結び目」で絆や、しがらみを表わすのも常套的ではな

いでしょか。理解しやすい句ですが、深みはなく、その辺が句作の難しさですね。

**杏花** 上五の「結び目」を他のことばをもつてこれらたら、中七下五がまだ生きてくるように思えるのですが…。いかがでしょうか？

**鬼遊** 「結び目」がこの句の目玉で、自由に感じられてよいのでしよう。解放感を単にホツとしたでは一句になりません。「空気が軽くなる」に川柳があります。

**楓楽** 「何々する」と「何々になる」(原因—結果)よくあるパターンの句作りです。よく分かつて共感を得やすいのですが、軽くなり過ぎたり、理屈が勝ち過ぎたりする危険があります。この句の場合、言葉遣いのうまさがない点をカバーし、成功作と言えるのではないでしょか。

**保州** 「そのとおりですよね」と言いたくなる共感を覚えるとともに、平凡な感も否めません。「結び目」はいろんな人生があり、「空気が軽くなる」は「解く」とよく結びついた川柳らしい表現だと思ひますが、無難にまとめた句とは言ひすぎでしょうか。

**杏花** 一巡目で上五の「結び目」のことばに生意気な評をのべましたが、鬼遊さんの「結び目」が目玉で「空気が軽くなる」に川柳があるとのご意見に全面的賛同。リズム感もあ

り、楓楽さんのおっしゃる成功作と思います。  
**鬼遊** 楓楽さんの言われるとおり、この句姿は現代川柳の落し穴だと思えます。私もよく落ちましたが、落ちないようお互い気をつけましょう。

### 読み返すときにやさしくなる日記

大角 正道

**楓楽** 私が日記をつけない理由は、読みかえずと、忘れたことまでも、有無を言わせず思ひ出さねばならないからです。その伝で言えば作者は、大変、寛大な性格の持ち主かまたはいい事はかりの毎日を送っておられるお方と解釈します。

**保州** 私は長年日記をつけていますが、読み返すと悔恨と反省ばかりです。正道さんは自分にやさしくすばらしい人生を送られたのでしょうか。その意味で、楓楽さんと同じ解釈をしました。ただ、その時は喜怒哀楽激しく書いた日記も、後で読むと冷静でやさしい気持ちになれるという意味では理解できます。

**杏花** 日記をつけていない私に作者の句評の資格などないと思いますが、読み返す「とき」を「たび」にしたらもっとやさしさが滲

み出るような気も……。正道さんにはお逢いたことはありませんが、この句のとおりやさしい方のように思えてなりません。

**鬼遊** 日記をつけたいと思いつつも勝手に置いているが、ほとんど白紙である。それで「読み返す」ことがない。「やさしくなる」とは、こと日記によらず、時日の経過によって感情にも変化がある。ただそれだけのことだと思ふ。

**楓楽** 「やさしくなる」に対する意見が二通り出しました。そのどちらであつても、この句が作者の本音であるとしたら、お人柄において尊敬に値すべきお方だと思います。どうぞ、いついつまでも日記を続けてください。

**保州** この句は句の批評はできても、作者の批判はできにくいし、批判してはならないと思います。なぜなら、作者はしあわせでやさしいお方の方ですから……。日記派の私ですが、今日も古い日記を読み返してみますと「やさしくなる」は実感できました。

**杏花** 先が短くなった私など、その昔、眠れなかった怒りや悲しみも、今は忘却の彼方へ、そしてなつかしく思ふ昨今。この句もこのような気持を一句になさったのでないかと思っています。

**鬼遊** 日記はハッキリ見えるのですが、内

## 川柳文学社三十五周年記念川柳大会

とき 7月5日(日) 午前11時半開場  
午後1時 締切

ところ 吹田市立千里市民センター  
(阪急南千里駅から進行方向

に向かつて右側)

会費 2000円(昼食・記念品呈)

おはなし 東野 大八氏

宿題と選者(各題2句)

「神 秘」	阿萬 萬の選
「母」	石川 勝選
「波止場」	久保田元紀選
「さまさま」	中尾 藻介選
「育てる」	西田柳宏子選
「はばたく」	森中恵美子選
「字」	山本 翠公選
「文 学」	波部 白洋選
席題(当日出題)	坂本 晴美選

容が見えないだけに、作者の思いに従ってゆけないのが残念です。「句評りレー」も、取り上げる句によって甲乙があり、他意のないことを申し添えます。

# 秀句鑑賞

—4月号から

土橋 はるお

温泉の約束母にしたまんま

木下道子

約束は、たしか去年の暮れでしたネ。暖かい春になりましたよ。首を長くして待つておられます。我が鹿野町にも、川柳が湧き出るような温泉があります。是非…。

ほほ笑ましい川柳になりました。

胸やけがするほど愚痴をこぼされる

鈴木公弘

人間は、欲の固まりで出来ています。欲があるから愚痴が出ます。でも愚痴をこぼしてくる者がありやこそ幸せじゃあない。むしろ愚痴を法話として聞いてみませんか。いつも心に念仏を、聞法：聞法：、胸やけが大変効きました。

ゆつくりとお茶漬を食う旅帰

森安 夢之助

どこがいいと言っても、我が家にまさる所はありません。奥さんのお茶漬はまた格別の味、本当に落ち着けます。旅先で便秘しませんでしたか。私は旅行鞆に便秘薬を入れて出ることになっています。

幼名で呼び合いながら縄のれん

高野宵草

よくやったもんだ。いや、今もやっています。電柱に向って立しよんしながら、おい、金ちゃん、なんだ、銀ちゃん、もう一軒行くか。うん、いいな。梯子の話はよく決まるもんだ。でも、飲みすぎないように、くれぐれも。使い方しらぬ消火器置いてある

岸 桂子

そりやあいけませんネ。早速、講習を受けて下さいよ。一回ぐらいじやあ駄目ですなあ。それよりも有効期限が過ぎていることがあります。よく確認して下さい。

せき払いするから電話切りますね

萩原美雪

エッヘン、オッホン、それに舌打ちも。振り向いて見れば、白目でいかにも憎しげに。

お宅もですか。同感同感、楽しい川柳です。

ミーティング一本釘は刺して置く

松本一郎

月初め、中、終り、各社で三回ぐらいはやってますなあ。若い者には、いい加減な釘じゃあ効きません。真っ赤に錆びた五寸釘ぐらい準備して臨みたいものです。

石橋をたたき幸運取り逃がす

石谷 美恵子

人それぞれに、石橋は叩くものです。けど、幸せをつかむ時は、そんなにゆつくりしておれません。石橋は叩きすぎると割れます。渡れなくなります。遅れないように。

本来、わたしの句はユーモア吟が多いのですが、次のような句が出来たらと感銘しました。

夕焼けのしずく砂場の子が帰る

大橋 政良

禅寺にふるまい粥の寒牡丹

菊地 トミエ

絵心をかき立ててゆく雪の舞

中嶋 千恵子

# 銀河系

## 河内天笑選

堺市 高橋 千万子  
日記空白 心配事が字にならず  
底うわねあんだあの娘の何なのさ  
紙屑にされるチラシも開店費

鳥取県 新家 完司  
こそばしてやろうか悲しそうな顔  
何かして上げたいけれど人の妻  
野良犬を最後に渡し橋眠る

米子市 林 瑞枝  
蜜豆の底から恋を掬い出す  
こたわって午後から晴れと書く日記  
台風一過宮沢りえをもう忘れ  
成上がり隣近所と疎くなり

和歌山市 桜井 千秀  
ソプラノで笑う素敵なニユールック  
投げってくるボールはちゃんと打ち返す

鳥取県 江原 とみお  
悲しみを隠す饒舌かも知れぬ  
探られているようだ冷えてきた

美面市 岩津 ようじ  
暖房で見るアルペールピルの雪  
生きている頸動脈に触れてみる

河内長野市 植村 喜代  
二の足を踏んで幸せ逃げて行き  
その昔地下に乗るより御堂筋

大阪市 板東 倫子  
東京へ二時間で行く要はない  
還る国失くし彷徨う宇宙船

鳥取県 美浦 美代子  
老化などしない太陽真赤だな  
少したしなむと言ひ飲み助見合した

松原市 小池 しげお  
合格通知オッチョコチョイの父にする  
厄除地蔵いくたび乱を見たことか

和泉市 西岡 洛酔  
天変地異別れましよと妻が言う  
スーツ着りやどこへ行くのと言われます

鳥取県 土橋 はるお  
税務署に誠しやかに入ってゆく  
婿々と馬鹿にするから別れたる

鳥取県 西川 和子  
時どきは帰省してねと送り出す  
燃やしてはならぬ火種をポケットに

和歌山市 山口 三千子  
コンバクトこつそり覗く花の下  
虹の橋渡れば夢が消えそうで

尼崎市 春城 年代  
それだけで親は百人力である  
どの部屋もみんな灯して春の鬱

尼崎市 春城 武庫坊  
反省が積もって前に進めない  
入社式みんな仮面をつけている

西宮市 西口 いわゑ  
さりげなくいい酒の栓抜いてくれ  
菜の花とワルツを踊る風の章

唐津市 浜本 久仁於  
海返せ浜を返せと千鳥啼く  
弾丸痕も瘦せて記憶も風化する

熊本市 遠山 夏生  
押せ押せと春は一気にやって来る  
慶弔事なければ故郷遠いとこ

茨木市 藤井 正雄  
受話器をとると本音がすうと消え  
ハンカチの折り目に妻がいてくれる

枚方市 海老池 洋  
鬼の居ぬ間に体重が増えている  
ホルモンの匂いで急に飲む話

高槻市 川島 颯云児  
本心にふれると揺れるイヤリング  
忘れない過去にとどき裁かれる

和歌山市 青枝 鉄治

但し書つけて主文の骨を抜く  
ポスターは黒い金とる顔でない

和歌山県 藤井 雅子

時々は鬼を演じる妻の四季  
岸に沿う水の流れに諭される

鳥取県 乾 隆風

サロンパス貼ったまんまの花見なり

今治市 渡辺 南奉

ちよっと引くだけで話が回り出す

和歌山市 古久保 和子

石垣がほこほこ温い城の春

福岡市 山倉 雲平

鎧着て行くかや女クラス会

堺市 荒川 磯子

叫びたくなる日もあって旅に出る

鳥取市 鈴木 公弘

あたたかな風に裏側まで喋る

西宮市 亀岡 哲子

おしまいに藁一本が流れ来る

米子市 林 荒介

去年が残っていた使い捨てカメラ

出雲市 板垣 夢酔

余命まだあるのに金が底をつき

鳥取市 前田 一枝

冷凍で残しておこっ片想い

岡山県 江口 有一朗

線引きが巧い嫁姑同居する

米子市 中井 ゆき

真に受けた言葉に足をすくわれる

砂川市 大橋 政良

石ころをやたら投げたい時がある

大阪市 井上 白峰

女房の牽制球について本音

桜井市 岩本 雀踊子

浮気でもしてみなはれと見くびられ

竹原市 信本 博子

気まぐれな手から離れたてんでやり

寝屋川市 堀江 光子

昇進を団地の妻は比べ合い

大阪市 榎本 露児

バス停に空虚な時が澱んでる

和歌山市 山川 克子

恋は恋計算せんでええやんか

倉吉市 奥谷 弘朗

時々はずるい所も見せてやる

茨木市 堀 良江

弱いのでなくやさしくなった男

高知市 北川 竹萌

背を向けて頼んでいます張り薬

鳥取県 林 露杖

温もりもうれしい席を譲られて

鳥取県 上田 俊路

ポケットでまだ片意地が凍ってる

大阪市 神夏 磯典子

ナポレオンふるまうコップ撰っている

岡山県 福原 悦子

息をのみ拍手を止める初歩き

有田市 生馬 美美子

五割引き早速無駄を買ってくる

大阪市 北 勝美

花粉症梅の花なら我慢する

岡山県 山本 玉恵

願一つ叶うて眉を長く引く

米子市 石垣 花子

生き死にに花屋は花を使い分け

大阪府 榎山 隆

ペロ出した切符引き抜き券売機

和歌山市 楠見 章子

点滴の速さに息がつまりそう

大阪市 清水 利武

金と銀テレビカメラが追い回す

福岡県 本田 忠男

強情も碎けて妻のままに生き

鳥取県 石谷 美恵子

情操に欠ける行進曲育ち

姫路市 福島 姫女

郡上太鼓に踊り呆ける臙の夜

岸和田市 清野 こう

夫の声で九官鳥が呼び捨てる

鳥取県 土橋 螢

一対一の平等で住んでいる

黒石市 相馬 一花

自販機と押し問答の古い札

八尾市 片上 英一  
夕焼けが美しすぎるエルニーニョ

吹田市 栗谷 春子  
猿の顔やけに思いの深そうな

静岡市 大石 たき  
思いきり泣いてあしたは頑張ろう

鳥取市 谷口 侑里  
春ら・ら・ら・影も浮かれて踊ってる

西条市 片上 明水  
造船の夜景に島が浮いている

倉吉市 渡辺 苦句  
春月よまだまだ僕は死にましえん

寝屋川市 岸野 あやめ  
心境の変化へ言い訳などしない

川西市 松本 ただし  
許せない男心の枝に住む

熊本市 北川 一進  
肩書が付いて名刺も二箱目

羽曳野市 芦田 絢子  
席ゆずる何時か己に還る日も

大阪市 尾崎 黄紅  
絵に描いた恋ならたとえ持っている

吹田市 西岡 豊  
行く先々でキーボードに迎えられ

熊本市 黒田 緑  
茫洋の中に揺ゆうと生なきる道

熊本県 高野 宵草  
セクハラと申す苦手が出来候

岡山県 矢内 寿恵子  
地上げ屋さん地球ころがししてみては

鳥取市 美田 旋風  
強がりを言える元気は残ってる

東大阪市 今岡 真人  
箸紙に十七文字の旅日記

鳥取市 春木 圭一郎  
隣席に別れたはずの人がいる

倉敷市 田辺 灸六  
小回りがきかぬ女で呆けはじめ

大阪市 津守 柳伸  
還暦の記念犬歯は自費治療

兵庫県 遠山 可住  
へそくりという貸し倒れ準備金

守口市 森川 まさお  
近付きのしるしの酒に噎せ返り

松山市 谷 真風  
憂きことはみんな忘れてハヒフへホ

西宮市 瀬尾 六郎太  
ホワイトデー変ったお返しなものか

広島市 流 奈美子  
デッサンは薄目に描いてまだ迷い

鳥取県 橋本 孝由  
黒豆を食べて長生きしてやろう

大阪市 大福 留吉  
ゆっくりと夫の料理胃にもたれ

和歌山市 細川 稚代  
ぶきつちよな言葉の裏にあるぬくみ

鳥取市 谷口 百合子  
風紋を辿って行くと詩がある

阪南市 深日 白光子  
その昔靴誂えた日のありき

大阪市 中西 兼治郎  
春の芽を信じて山の草をやき

岡山県 伏見 すみれ  
この道は母の里まで続いている

姫路市 丁坪 サワ子  
結論は言うまい酒が不味くなる

笠岡市 松本 忠三  
医師よりも自己診断が詳しくすぎ

藤井寺市 中島 志洋  
さり気なく妻の手を取る花の下

海南市 三宅 保州  
金おろす訳を銀行聞きたがり

鳥取市 西原 艶子  
宝石に縁なく暮らすのも一生

鳥取市 岩原 喬水  
老化かな親父このごろ怒らない

唐津市 山口 ふさ子  
長生きは生物学的エリートだ

広島市 中村 要  
立志伝の終りあたりに落とす穴

兵庫県 酒井 靖子  
何食わぬ顔で骨までしゃぶられる

唐津市 筒井 朴竜  
音楽を聴かせ仕込んだ吟醸酒

今治市 矢野佳雲  
吊り皮を握り作戦考える

香川県 木村明人  
栄進を狙って一寸勇み足

旭川市 朝倉大柏  
だんまりという抵抗に押し切られ

唐津市 山門タミ  
厚化粧ころの荒れはかくせまい

松江市 松浦登志子  
噛み殺す仕草涙でばれました

米子市 小西雄々  
手酌酒おとこは何時も傷をもつ

十和田市 阿部進  
子育ての寡婦がときどき鬼になる

摂津市 もちづき遊美  
目が覚めりやああ生きてたのかと思う

唐津市 山口高明  
淋しくはないかと旅の妻電話

大阪市 山北三三三  
良い方の目にも目薬さしておく

兵庫県 北川とみ子  
言い訳がうさんくさくて茶を替える

唐津市 山門幸夫  
小錦もハートは並みの恋をして

今治市 月原宵明  
正直を誇り出世の道をそれ

羽曳野市 吉川寿美  
歯車が軋む過労死ふとよぎる

唐津市 福島紀一  
まねされて笑っている人怒る人

名古屋市 藤井高子  
春雨に小さな傷を洗わせる

京都市 山本規不風  
奥さんのお色気 浮気などとても

京都市 松川杜的  
ベレー帽昨日とおなじとこで画く

岡山県 富坂志重  
拗ねている老いの心をとく曾孫

兵庫県 倉垣恵美  
百分の一秒くやしいドラマです

八尾市 高杉千歩  
悪友は男ばかりと限らない

西宮市 林はつ絵  
ごめんなさいを盾にかざして強かな

豊中市 安藤寿美子  
ベッコウも象牙も私要りません

大阪市 藤田頂留子  
満員はいや空いた医院はもつといや

島根県 今川三津江  
恋の春 家猫じつとしておれず

広島市 森田文  
老けてゆく計算だけは忘れてた

岸和田市 島崎富志子  
だんだんと美化されてゆく遠い過去

藤井寺市 高田美代子  
どうとでもしろと威勢のよい鯉だ

今治市 越智一水  
理屈では通らぬ村の選挙戦

姫路市 中塚遊峰  
歳月が笑い話にしてくれる

姫路市 大原葉香  
針金の刑に会うてる素直な木

八尾市 向井しず子  
春雨よわたしの肩に花はらり

熊本県 増田一乗  
人間の孤独化思ふパチンコ屋

有田市 松井かなめ  
春休み民宿並みのさわがしき

和歌山県 小倉アサ  
おうす一服肩の力が抜けました

西宮市 奥田みつ子  
焼いもの笛としばらく散歩する

堺市 一瀬福一  
有るように見せたら貸してくれました

岸和田市 芳地狸村  
珈琲はブラックにする血糖値

姫路市 服部一典  
アツという間の六十年振り返り

▼本欄への投句は、必ず川柳塔用箋に3句を書き、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送りください。

(選者)

# 首香のむ 八木千代選

## 北向きの古椅子狂おうと味方

堺市 板野 美子

南向きの椅子は広くて柔らかくて、特に春の午後など私を甘えさせてくれま  
す。それに比べていつも使っている固くて古い椅子は、窮屈でおまけに陽が当  
たらぬ。その上に位置が位置だけあって窓の隙間からは冷たい風まで吹きこ  
む始末。それでもどちらかを選ばなければという場合には、私は揺れるのです  
が、迷いを振り切って北向きに置かれた椅子に座ろうと思う私です。ややもず  
れば安易に流れやすい私。ちよつとした所業が吉と凶との分け目になることも  
判れば、前へ進むためにも優しくなるためにも強くならねばなりません。少し  
ぐらい狂おうともこの椅子こそ真の味方と悟つた今、私は毅然として選ぶので  
す。美子さんは私です。みんなです。

## 遠ざかる生れ月日をいとおしむ

羽曳野市 吉川 寿美

遠い生まれも月日も、使われた漢字は訓読みばかり、そのあとではひらかな  
です。だから柔らかく胸の奥に沁みとおるのでしょうか。誰もが振り返れば思  
うことで、目新しい着想というほどではないのですが、このなだらかななんと  
もいえない優しさ美しさ。人間の心の底を流れる静かなさびしい地下水のよう  
なものに少しの抵抗もなく迎えられて、道程の長さが長いだけ傷が多ければそ  
れだけなおさらにも、もの哀しくいとおし、今の苦しきまきまきとまるで春霞のよ  
うに包んでくれています。臨見もせず一生懸命歩んできたからでしょうか。時  
間も空間もひろがって、読みながら思い出しながら、心の中のものを鳴らして  
しまうのです。

## 首の据わった人形だけに打ちあける

米子市 青戸 田鶴

ふらんこ揺れて目の奥の砂時計  
西宮市 林 はつ絵  
思いつめた心を少し散歩さす  
西宮市 奥田みつ子  
芽吹く木の真下でわたくしを洗う  
和歌山市 後藤 正子  
陽炎の手前でいつも立ち止まる  
鳥根県 松本 文子

てのひらに何を握ろう吾亦紅  
逝くときの涙は少し残しとく  
怖いもの失くし自分が怖くなる  
わたくしのブラックリストにいるわたし

身の内の鬼も一輪薔薇を抱く  
正直に大きなつづら戴こう  
一人ぼつちを眨む癖の一人もの

プレーキが利いて転んだのはわたし  
煎茶つぐ老いの基点がうごかない  
小豆煮るあすはなんにもない日だが

寄り添うて亡母の胸乳まさぐりぬ  
紙コップ縁の薄さなど思う  
真実を一つ大事にコピーする

背なの矢を静かに抜いてくれた人  
ていねいに首を洗って輪の中に  
四つ割りにされてかぼちゃが笑うなり

一日の扉を仏様と開ける  
とても不安で落ちた鱗を探してる  
解つたら似ても似つかぬ子であった

白糸で縫えないものもたんと有る  
どうしても芽の出で欲しい枇杷の種  
遊びに飽きて内助の芸に帰り着く

決め球はないが選球眼はある  
飴玉を貰い陽気な蟻になる  
哀しい日なんて笑っている私

大阪市 北川 弘子  
米子市 茂理 高代  
和歌山市 榎原 公子  
大阪市 西出 楓楽  
寝屋川市 岸野あやめ  
藤井寺市 高田美代子  
和歌山市 桜井 千秀  
和歌山市 田中 輝子  
寝屋川市 豊福 路子  
尼崎市 春城 年代  
和歌山市 木本 朱夏  
大阪市 神夏磯典子  
鳥取県 羽津川公乃  
岡山県 山本 玉恵  
米子市 金山 夕子  
倉敷市 小野 克枝  
米子市 政岡日枝子  
和歌山県 小倉 アサ  
茨木市 堀 良江  
米子市 石垣 花子  
西宮市 西口いわゑ  
米子市 川上より子  
堺市 桜沢あかり  
米子市 新 正子  
香川県 川崎ひかり

啓蟄は古稀の私も持っている

継続の力 小出しの定期券

スタンドの明りを待っていた机

われない強いことばで詰まりおり

優柔不断な鬼を一匹飼うている

山鳥が胸で騒いで出てゆかぬ

午前二時 空調の音高く聞く

架け橋を明日も退屈させぬよう

ときどきは確かめてみる琴の音

仏さまごめんお灯り消し忘れ

不調和音 私ちつともわるくない

葉包紙 救いの神と手をつなぐ

連翹の咲く家々を知っており

吐き出した言葉へ流れうろたえる

高のぞみしていた頃の赤い花

一昔前の恩義を持ち歩く

筋書きになかった老いの曲がり角

どう転んでも立ち向かう夜の闇

裏表 化粧する日としない日と

白椿おしめしへの言い分聞く

皿に盛るところを抜けばそっぽ向く

梅よさくらよ癌病棟はことさらに

花摘んでつんで言いわけ考える

ひとつのことを思い続けてただ歩く

一羽のカナリヤと明日を生きようね

姫路市 福本 好花

八尾市 宮西 弥生

鳥取市 西原 艶子

吹田市 栗谷 春子

名古屋市 藤井 高子

米子市 沢田 千春

有田市 松井かなめ

米子市 寺沢みどり

堺市 山本 半銭

和歌山市 福本 英子

和歌山市 細川 稚代

米子市 林 瑞枝

守口市 結城 君子

寝屋川市 宮崎 菜月

兵庫県 倉垣 恵美

米子市 足立由美子

大阪市 鈴木 節子

京都市 山海 友照

富田林市 藤田 泰子

出雲市 石倉芙佐子

大阪市 本間満津子

富田林市 池 森子

和歌山市 福井 桂香

倉吉市 淡路ゆり子

富山市 舟渡 杏花

浮かぬ日は紅さしてみる笑ろてみる

賛成を促すような鳩時計

母の目に私は翔んでいる女

鬼が棲むこんな小さい胸にでも

せめてもの抵抗気づかぬふりをする

母の岸に戻り着かない子が殖える

今やつと子離れの糸ほぐれ出す

まわり道して喜びが駆けてくる

こどもの日こどもに還る母といる

待つものもそう遠くない冬銀河

双の手を動かして春を奏でてる

春ですなね早出居残り苦にならず

もの凄いやつたねを持っていく

眉をかく今日はやさしく眉をかく

私にもあつた輝くあの頃が

成長は哀しからずや他人めく

うすももいろに染まるわたしの雛祭り

ウイスキーボンボン昔の夢は忘れよう

友情に甘え過ぎてる小糠雨

叱つたらうなずく猫で憎めない

うっとり絵の睡蓮に溶けてゆく

ほどほどに明日を思う地球の音

娘には言っておきたいことがある

羽曳野市 芦田 絢子

寝屋川市 平松かすみ

和歌山市 堀畑 靖子

和歌山市 山川 克子

堺市 高橋千万里

兵庫県 酒井 靖子

米子市 光井 玲子

和歌山市 森 茜

八尾市 高杉 千歩

寝屋川市 堀江 光子

米子市 白根 ふみ

堺市 鈴木 可愛

鳥取県 小谷美つ千

米子市 中井 ゆき

姫路市 丁坪サワ子

大阪市 津守 柳伸

富田林市 片岡智恵子

竹原市 信本 博子

出雲市 園山多賀子

香川県 新川マサエ

米子市 服部 朗子

河内長野市 植村 喜代

芦屋市 黒田 能子

八木 千代

投句先 干683 米子市花園町14



## 若葉の頃に

町田達子

あれは幻、十年余り前の五月半ばの休日、躍動する新緑はまるで一面花盛りのようであった。嵐山から大覚寺へと、大沢の池辺をうろついた時のことである。ばたばたと突然の大きな羽音に顔を上げると一羽の白鳥が翔んでいる。目の辺りににしたのははじめてで驚いたものである。たしか冬の鳥だったのにと不思議に思い、傍らの人と話合ったが、後に聞いたところでは、番人がずっと住みついていらしたとのこと。

しかし、それから後も何度か訪れるが、白鳥の姿はその時一度きり、ついで見かけたことはない。どうしたのかしらと時々おもい出す。とつくに星の仲間入りをして大空で羽ばたいているのかも…。

大沢池の西北にある小さなお堂、護摩堂の横に石仏群がある。大木の根元にすっかり埋

まって顔だけのぞかしている石仏をはじめ、いずれも風雪にさらされてすっかり風化しているが、慈悲の相を呈するお顔はやさしく静まり返っていたのが目に残る。

嵯峨野の思い出は種々つきないが、渡月橋を行くカップルの、思ふ存分若さを撒きちらし、山々の若葉も負けじと照り輝いているさまは、正に天下の嵐山だと思ふ。

大宮人も遊んだ嵐山、そして嵯峨野へと続く人波、落柿舎の「去来」も苦笑しているのはと嵯峨野への夢は尽きない。

## 牛と共に

小白金 房子

農業に生きる我が家に、昭和四十五年息子が急に牧場から帰る事になりました。三年間の研修修業の子定でしたが、万博のため立ち退きとなり、一年だけの経験で帰りました。

早速牛舎を建築、大山町から牛十頭を導入したのも、ついこの間のような気がいたします。わたし達夫婦は牛に不慣れでしたが、息子の意欲に引きずられ、草刈、飼料づくりなど今までとは変り、朝夕、牛の世話に追いま

わされるようになりました。

親子で励み、今までとかけはなれた仕事も日ましに慣れましたが、牛に嫌われながら搾乳をした事もありました。その内、息子は縁あって当地から嫁御を貰い、牛も次々と増やし、今では四十頭大家族です。

飼葉桶ころがし牛の息荒く 房子

機械化の世となり、三時間くらいかかって搾乳、冷却機に入れると、甘い香りを漂わせて攪拌してくれます。以前はみな持ち込みでしたが、今はローリーが集荷に来ます。お蔭様で病気もなく二十数年、牛と共に暮しています。

姑、私達夫婦、息子夫婦、孫娘(高二、高一、中三)で笑いの渦に囲まれながら、台所野菜づくりとそれぞれに働いています。

しあわせなことに家族の理解があり、よき友に誘われ楽しい句座に参加しております。正直な野菜追肥で色を出す 房子

▼削除 2月号『川柳塔P4上段の新家完司(鳥取県)氏の「にんげんが作った鳥はよく墜ちる」は、朝倉一幸氏の句と類似しており、本人の申し出もありましたので削除。

麻生路郎の作品とその周辺

# 大空の、、、ろ

(17)

橘 高 薫 風

昭和2年7月号、川柳雑誌発刊後三年半、川柳雑誌同人の酒井駒人氏は、「大阪に居た頃」と題して概ね次のように書いている。

私は今、平塚町の母の家に居ります。毎日ぶらぶらして居るので退屈のあまり、行李から川柳雑誌を取り出し創刊号から今までの雑誌に目を通した時、その発展したのに驚きました。私をはじめて川柳雑誌社の例会へ出席したのは大正13年5月16日夜六厘坊忌を端の坊で営んだ時だという事が誌上で判りました。其後例会へは必ず出席していました。番傘へも、大大阪へも。其時分はまだ松郎、馬行、刀三の諸氏は大大阪川柳社の同人でした。よく浪花荘へも遊びに行きました。川柳の研究書を松郎氏から譲り受けたのも其当時でした。氏が電話で柳書が見付かったから買っておいたとお知らせ下さった事もたびたびありました。浪花坊、松郎、刀三、光太楼の諸氏と十三橋納涼句会に行った帰りに、たしか都島終点付近だったと思いますが、あるカフェーに入り、松郎、刀三両氏が「今夜はここで呑

み明かすのだ」と言ったので、驚いて時計を見たなら一時少し前、皆とお別れて明方までに十三橋の句を六十句だけ作って郵送したのも忘れられない一つです。

馬行氏の宅でお月見の句会を催した時出席して、倉吉の中山梢露氏にお目にかかり短冊を所望されて、無筆の私は困りました。今持つて居る松郎、馬行、刀三氏の短冊は其席上で戴いたものです。記念に馬行氏から貰った寄書の団扇を持って豊中駅で輪を作り、私が真中で八木節を唄い、駅員や乗客を笑わせたのも忘れる事が出来ません。もう二度とあんな呑気なまねはできないでしょう。

史風氏が千両箱を出し、小西白花氏が島の内を出したのも其当時だったと思います。千両箱は七部だか出し、島の内は三部だか出して廃刊となり、島の内の如きは半年分払い込んだので残金を請求したけれど、少しも要領を得なかつた。

大大阪川柳社創立句会で、川上日車氏が「娘」の選をした時、水府、浪花坊両氏の二

句だけ抜いて、あとは全部没となし、軸吟を三句発表して出席者一同を喫驚させたのも忘れることは出来ません。

創刊号当時の同人であつた夜調、光太楼、耕塩、風人、露太楼、佳扇、剛山、飛水の諸氏は誌上でお名前さえ見かけませんが、いかなされたのですか。

あまり退屈なので、ペンの動くにまかせて、こんなつまらない事を書いてしまいました。なんだかもう一度大阪へ行って懐かしい皆さんにお目にかかりいろいろお話をして、其当時の気分を味わいたいような氣になつてしまいました。

文章の一部を省略したものの、さして長くはないこの一文から、当時の川柳界と川柳雑誌の様子を興味深く推察することが出来る。三年を経過した「川柳雑誌」の充実ぶり、当時の川柳人は結社に属していても未だ右往左往していた様子、句会のあとは仲間で痛飲、時には夜を徹したらしいこと、一夜に六十句と多作であり、短冊の交換も繁く行われ、短命の柳誌が泡の如く出現しては消えて行ったことなどが分かる。

川上日車氏の選者ぶりも型破りで、その時の五句は、かつて本田浪花坊氏からご教示を得たので後日書くことにする。

音 樂

渥美弧秀選



山の街が出来て少年音楽隊  
趣味欄は音楽と書く演歌好き  
コマージュアル三味まで入れた味噌の味  
栄転の口笛かきふる駅に立つ  
雪国のきびきふる津軽三味  
寝た切りになつてもジャズが好きと言ふ  
雅納の雅楽に乗つた巫女の袖  
雅楽の音流れて神も起き給う  
名曲を聞かす胎児へ親の夢  
胎教へわたしの好きなクラシック  
胎教へ愛のメロデイ満ちた部屋  
春あらし音楽奏でる風に会う  
野に佇てば風が奏でる早春譜  
お馴染の音楽で来る回収車  
乳牛のほうが音楽よく解り  
気の早い商店街のジングルベル  
メロデイの方がよかつた電話口  
鬱の日のピアノは楽譜など要らぬ  
涙して音楽聞いた日の出かい  
音譜など読めぬがマイク放さない  
君想うほど音楽を聞く夕べ  
増産へ社長が流すミュージック

可住 遊峰 忠雄 兼治郎 高栄 正敏 温子 規不風 博子 かおる 久仁於 大柏 有一朗 雀踊子 あずき 枯梢 博友 多賀子 洋 笹 西富士 孫と歌つたわらべうた

手仕事のリズムが唄に助けられ  
義太夫の良さがわかつて来た不惑  
三寒四温夫婦ハミング忘れぬ  
最高の音楽母の子守唄  
バツハより民謡好きの母と居る  
ベーターベン聴かせ寝させる若い母  
第九知らぬ母が愛する四季の詩  
子育てを終えて音楽を聞く余裕  
カセットは封をしたまま亡夫の唄  
オカリナを吹いて古代を呼び寄せる  
古里の琴の音はこぶ風さやか  
大正琴 大正の唄がよく似合う  
補聴器で聞く音楽にうれし泣き  
ナツメロに青春しのおれいふたり  
君が代が一番好きな日章旗

ちよ 哲矢 ひでの 重人 彩子 義男 サワ子 ちかし 文子 鉄治 忠男 杜的 一枝 白峰 正子 しげお 雄々 清芳 京子 千歩 風云児 正坊

時々は休み自分を確かめる  
連休はパパの小遣い底をつく  
持ち寄りのニュース楽しんで  
子算案今日も審議休んでる  
休刊日よけい新聞見たくなり  
甘酒に休む山頂梅日和  
孫に買うみやげも買えぬ休み札  
休むのに妻に伺い立っている  
前向きに休んで励む保身術  
連休もなんの無縁の小商人  
ポトルにも週休二日と書いた妻  
姑のるすは心の休みです  
休日の違う二人ですれちがい  
休むこと知らぬ日本は叩かれる  
先生が休むと生徒活気づき  
昼休み椅子の噂が渦を巻く  
千枚田休むことなき老母の鎌  
母さんがやつと休める仕舞風呂  
出張という名目で骨休み  
充実の日に感謝して休みます  
風吹くたび泳ぎ休める水すまし  
連休に夫も粗大ゴミにされ

休 む

北川竹萌選



ちかし 一乘 兼治郎 タミ 姫女 ふみ 狸村 太一郎 清柳 正敏 康女 良江 通彦 シマ子 章 敬 佳雲 雄々 哲矢 宵明 一枝

路 集

ずる休み酒のせいだと言い出せず  
 受験バス父母も一泊旅行する  
 仕合せは休む日もないウォーキング  
 子ら達とお盆は里で夏休み  
 休日は休日らしいヒゲを剃り  
 雨の日は鎌も安心して休む  
 ホランテシアの福祉休暇をとる素顔  
 保育所が休み預けに行く実家  
 うさぎでも亀でもないわ一休み  
 上役の休み喜ぶあみだくじ  
 五穀豊穰 休耕田が泣いている  
 休むこと知って人間取り戻す  
 七転び八起き男だ休みない  
 人生の双六休み休み行く  
 新しいベッドで古稀の身を休め

千金の雨に農家の骨休み  
 汗の杖止めて峠の風拾う  
 毎日が休日余生楽でなし  
 目立たない位置で女の一休み  
 このあたり少し休もう古希の坂

一日を赦し赦され休む幸  
 農休日嫁も女をとり戻し  
 お陽さまと仲よし父の年休日  
 休息はこまぎれにして理的に

武治 好花 金吾 朴竜 明水 富恵 保夫 よし津 恵美 鉄治 保朗 有一郎 諷云児 彩子 遊峰 雀踊子 久仁於 杜的 玉恵 正坊 究 八木芳水

幸運は逃げ足速い過去を持つ  
 速上行かな消えてしまえば虹の橋  
 三分で出来る合鍵恐くなり  
 高速を降りて余生の旅とせん  
 二番手が全速力を出してない  
 速足で雑踏抜ける都会慣れ  
 蟻の群れ速い一匹ボスらしい  
 加速度をつけて転がっていた誤算  
 計算の速い男で嫌われる  
 速断の付けがゆつくりやってくる  
 ジョングラの揆の速さに雪しきり  
 スピードに魅せられ淑女夜叉となる  
 決断を迫る振り子が速くなる  
 待つことを覚えて速い砂時計  
 乗りかえが速い男で溺れない  
 速書きの自分のメモが判らない  
 黄昏で秒針ばかり速くなる  
 ライバルの変わり身速い保身術  
 計算の速い女のうす情け  
 おちて行く速き女は覚悟でき  
 ハンサムなお医者脈が速くなる  
 ゆつくりとしたモーシヨンの速い球

速 い

阿部柳太選



速い者勝ちに思わぬ残り福  
 全速で走っています夢の中  
 一日はかくまで速き君と居て  
 文句言うほどの速さに仕事せず  
 この駅を発つと帰心が矢に変わる  
 目くばりが速い男の回り道  
 次の椅子狙う男の速いこと  
 自転車に乗れない友の速い足  
 あっさり速い返事で断わられ  
 救急車 街を吸いこむように抜け  
 世の流れ玉手箱でも開けたよう  
 昇進の内示が社宅走り抜け  
 満天下沸かせ前言翻す  
 歓声を背に道化の速い脚  
 秒速のスリルに命軽くなる

有一郎 正敏 鉄治 諷云児 雄々 信義 新一郎 新太郎 恭昌 清柳 芳水 正子 豊 愛論 保州 可住 静子 杜的 喬水 速い身の速さ何とか生きている  
 足速やの蟻は私の姿です  
 回転の速い男と噛み合わぬ  
 ジャスマンと風の噂はすぐに消え  
 賛成が速すぎるからうろたえる  
 トンネルを抜ける速さを試される  
 煩惱へ走る速さが衰えぬ  
 諦めの速き時には武器にする  
 速報を尻目に漁場を荒らす蟻

多賀子 奈美子 章 康女 重昭 房子 弘朗 博子 保夫 明水 ちよ 高明 高明 雀踊子 四郎 雀踊子 佳雲 和成 高夫 正坊 敬 アサ 規不風 榎原公子

# 初歩教室

題一 揺れる

吉岡美房

この欄を担当してまだ二回目ですが、課題吟の添削という場合のむずかしさを感じています。それは皆様から送って頂く句の中で、題の「揺れる」を無理して挿入されているように思われる句をどうするかということですが、句意を尊重して添削しようと思つていますが、「揺れる」という言葉を取ってしまつて句にする方がいい句になるというのがあるためです。課題吟である以上、この欄で添削句として取り上げられなくなるのですが、今後、そのようなこともあると考えて、あらためて作者自身で提出句を見直して頂くようお願いいたします。例えば次のような場合です。

転勤の彼を慕いて気が揺れた 春風  
（転勤の彼を慕っていたわたし）  
まっすぐの道で揺れます老の足 しず子  
（まっすぐの道でもつれる老いの足）

押し花の心が揺れる古日記

忠男

（押し花に遠い想いがよみがえる）

それでは添削した句から発表します。

（スキャンダル一つでマスコミ揺れ動き）

春風

（スキャンダル一つで揺れる政治持つ）

高栄

（屋台骨揺れる与党にある疑惑）

洋

人間の風は地球揺れ止まず

民子

（人間の狂気地球は揺れ止まず）

一票を選ぶ権利に揺れ動き

軒太楼

（一票の権利疑惑で揺れ動き）

札束の効きめ揺れてる顔の艶

義雄

（金次第揺れる政治の貌を持つ）

自由化の波に農政揺れ動く

タミ

（自由化にどう揺れようと農に生き）

自由化にどう揺れようと農に生き

恵子

（自由化にどう揺れようと農に生き）

（自由化にどう揺れようと農に生き）

三重

（自由化にどう揺れようと農に生き）

（自由化にどう揺れようと農に生き）

治夢

（自由化にどう揺れようと農に生き）

（自由化にどう揺れようと農に生き）

美恵子

（自由化にどう揺れようと農に生き）

（自由化にどう揺れようと農に生き）

はる子

（自由化にどう揺れようと農に生き）

（自由化にどう揺れようと農に生き）

和子

（自由化にどう揺れようと農に生き）

シャッターがカタカタ揺れる春の音 ふみ

（シャッターをカタカタ揺らす春の音）

菜の花の揺れる蝶々が群れている ますみ

（菜の花が揺れて覗いた石地蔵）

菜の花が揺れて覗いた石地蔵 忠治

（菜の花が揺れて覗いた石地蔵）

陽炎に私の丸い背もゆらく 志華子

（陽炎に揺れる私と野仏と）

揺れながら花は咲く日を待ち魚がれ 公子

（揺れながら咲く日を待つている雷）

咲いてよし散つて又よし花揺れる 美代子

（いさぎよく散る気さくらが揺れている）

恋心と漁火揺らす春の風 彩子

（二人来ていか釣り船の灯が揺れる）

流星にいか釣り船の灯が揺れる 哲矢

（流星にいか釣り船の灯が揺れる）

好きですと言われて心揺れ動き よしみ

（好きですと言われて心揺れ動き）

やさしさに寡婦の心は揺れ動き 清流

（やさしさに寡婦の心は揺れ動き）

恋心揺れる乙女の胸の内 義男

（恋心揺れる乙女の胸の内）

揺れ動く娘心に胸痛み 辰男

（揺れ動く娘心に胸痛み）

初夏の池揺れるボートに気もそぞろ 杏村

（初夏の池揺れるボートに気もそぞろ）

初デート心そぞろにボート揺れ とし子

（初デート心そぞろにボート揺れ）

春です年齢も揺れるレモン色 和子

（春です年齢も揺れるレモン色）

少年の心は揺れるレモン色 和子

（少年の揺れる恋はれもん色）

もう揺れぬあなたの胸へ一直線

芳枝

(もう揺れぬ心に決めた人だから)

ひかり

札束に心揺れるも人の常

芳水

札束で揺れる女のあさはかき

君江

(札束に揺れる女を責められぬ)

正子

新生活別居同居で揺れている

章久

(結婚へ姑と同居で揺れている)

春子

嫁つた娘に揺れて奏でる母の曲

轍

別れ話鍋の豆腐が揺れてくる

康子

(湯豆腐が揺れる男対女)

隆

離婚沙汰子供心が揺れ動く

マサエ

(子を思う心で揺れている離婚)

敬

塾通い子供心も揺れるはず

みつこ

(口出せぬ塾で揺れる文部省)

友照

合格へ嬉しく揺れる庭すみれ

章久

(家中が嬉しく揺れてサクラサク)

和枝

いい電話声が小さく揺れている

秀葉

(合格に弾んで揺れる電話口)

秀香

ぶんこが大きく揺れて自信つく

友照

(ブランコが大きく揺れて山を越す)

友照

黄昏のブランコお迎えまだ来ない

友照

(黄昏のブランコママを待ちこがれ)

友照

揺れるブランコ私の影も揺れている

友照

ブランコに揺れて乙女になりました

友照

(ブランコに預けた恋が揺れている)

友照

ブランコで夢を語った青い恋  
(ブランコで夢が揺れてる若い恋)

杏村

吊橋の景色もよそに揺れるまま

方子

吊橋が大きく揺れて列を止め

保夫

おだてられ揺れる吊橋渡りだす

隆雄

(絶景へ揺れる吊橋命かけ)

静子

吊橋の揺れを覚悟のふたり行く

好花

吊橋の揺れが二人の媒酌に

金吾

(吊橋が期待どおり揺れてくれ)

幸夫

大揺れの橋が絆の老夫婦

明吉

揺れる程怖い怖いとしがみつ

ふさ子

(橋揺れて輪を忘れた声を出し)

秀香

見解の相違袂間を右ひだり

和枝

(対立の会議へ揺れる右顧左眄)

秀香

地についた足を揺らしてなるものか

友照

(踏み出した足を揺らしてなるものか)

友照

泣きやまぬあの子揺らして和ませる

友照

(揺り籠に私の夢をダバらせる)

友照

揺り籠が見ている夢は来世紀

友照

(揺り籠が二十一世紀へ夢を見て)

友照

待ちぼうけ赤提灯の灯が揺れる

友照

(待ちぼうけ赤提灯が揺れて呼ぶ)

友照

もつたない酒がこぼれる年かいな

友照

(こぼれたら惜しいお酒が揺れている)

友照

揺れながら命大事に古稀の坂

友照

(古稀でなお揺れる心と会ういのち)

友照

逝く友に揺れる心で休肝日  
(友の訃に少し控えた酒が揺れ)

太一郎

ロソクが揺れて喜ぶ七回忌

房子

(灯が揺れて心通わす七回忌)

晋

燈明の揺れる向うにある慈愛

晋

(灯が揺れて仏の慈悲に包まれる)

晋

迷心に揺れる気持で夜を明かす

露芳

(迷信と思うが揺れる夜がつづく)

露芳

大阪の大揺れ地震はたった四

露芳

(震度四ほどで大阪トップ記事)

露芳

着想・表現ともに立派な句

露芳

愛憎の袂間で揺れる恋ごころ

露芳

繩梯子あなた頼りに登ります

露芳

さよならの後はブランコだけ揺れる

露芳

燈明が揺れて亡夫が語りかけ

露芳

落ちそつに揺れてサーカス渡り切り

露芳

揺れながら本音聞いている縄のれん

露芳

コスモスが揺れて女の自己主張

露芳

吊橋へすがる手のないひとり旅

露芳

揺れ動く世界の中に住むひとり

露芳

私の句

男から女へ揺れる波の音

露芳

題「無職」—5月15日締切(7月号発表)

宛先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

# 本社 四月句会

四月六日(月)午後五時半

メンズフアツションセンター

まさに春宵一刻価千金の今宵、他の大会と重なつたため八十二名の出席で、平成三年度一路賞・各地柳壇賞表彰の四月句会は、定刻にはじまった。

句会の前に、好季節を迎え各地の川柳大会の案内が司会からあり、各々の詩囊をこころよく刺激した。

表彰は「各地柳壇賞」受賞の井崎ミサ子さんははるばる福岡市からの出席で、黒川紫香副主幹に賞状と受賞句を刻んだ盾を渡され、有志からは花束が贈られて盛大な拍手を受けた。「一路賞」の西原艶子さんは、本人の都合で四月二十三日の黒川紫香句碑建立記念川柳大会の時、渡される予定になっている。

「おはなし」は河内天笑氏。昨四月五日の「八木摩太郎遺句集発刊記念句会」盛会のお礼があり、本題に入る。内容はコイの話、ただし恋ではなく鯉で、氏が四十三年ごろ山陰の足立美術館で見た鯉の見事に感激、錦鯉

を孵卵させて約三年間手塩にかけて育てた経験談。自宅に設備を作り、産卵させて以来、餌のみじんこ捕りや水替えの苦勞、餌の与え方、鯉の品評基準が人間の美人コンテストに採用されていることなど、我々の知らない分野のことで大変面白かった。パワフルで凝り性の氏ならではの「おはなし」であった。

初出席は立谷勇次郎氏(尼崎市)井崎ミサ子さん(福岡市)宮崎弘直氏(八尾市)。

月間賞は河内月子さん(堺市)に輝く。

(司会—重人) (受付—シマ子・年代)

(清記—楓葉) (記録—ダン吉・月子)

## 席題「ドラマ」 柳楽鶴丸選

三枚目ならばくも主役になれるかも  
団地でのドラマそれぞれ窓あかり  
妖艶なドラマが一つ夕桜  
桃色に染めたドラマは飽きぐる  
御主人が受話器を取つてからのドラマ  
B面に妻とわたしのドラマあり  
母さんのドラマはきつと僕が書く  
同居して見方の変るメロドラマ  
さっぱりし過ぎドラマにならぬ恋  
目ざましが鳴ってドラマの幕があき  
喜怒哀楽この世のドラマ演じてる  
三面鏡 女のドラマ繰り返す  
劇的に今日の阪神勝つたらし  
百歳のドラマ笑顔が美しい

歌子

みんな嘘それでもドラマ気にかかる  
あざやかに斬つてドラマはあと五分  
波瀾万丈ドラマ地で来た一代記  
「円玉の旅がらす」ドラマだな  
法善寺横丁にドラマ落ちてる  
ドラマよりおもろい事件たんある  
呱呱の声 今日からドラマ続く道  
大自然のドラマに人は小さすぎ  
山彦のとどかぬ砂丘にあるドラマ  
ヒロインの運命決めるベン先の  
そしてドラマは二つ残つたためし茶碗  
平凡なドラマが好きないポット  
おはようお早さう今日のドラマが始まりぬ  
四季の花ドラマを綴る雨と風  
余命表まだ続編のあるドラマ  
あすなろうなろうドラマを継ぎ足して  
その日その日のドラマを乗せてバス走る  
蛇口から今日のドラマが動き出す  
影ふみや男と女で描くドラマ  
素麵を干す風景にあるドラマ  
着物の汚点にドラマが一つ隠れてる  
水平線へおとこのドラマ眠らせる  
陽が沈むトランペットにあるドラマ  
蟻さんの出合いもきつとドラマだな  
地球は回るドラマを見るように  
雨戸が走る今日のドラマが走る

軸

台本のないドラマを演じている

鶴丸

隆

岳人

美房

美房

兼題「流行」 堀端三男選

流行に縁なく生きて妻達者  
 流行を追つてばあちゃん若返り  
 良妻と言われて流行遅れ買つ  
 働き蜂の父に流行無視される  
 流行に迷わぬ自尊心がある  
 これも流行 強い女になりました  
 うちの娘にさせたくはないニールック  
 流行を作る仕事に草臥れる  
 流行を着るスタイルに自負がある  
 流行を追つて持たない主義主張  
 流行のネクタイに負けてはいませんか  
 病院で貰つて帰る流行り風邪  
 流行はどこ吹く風と山が好き  
 紀子様を着ると流行色となり  
 流行に目眩いうちのおばあちゃん  
 流行を着る倅せな犬もいる  
 流行を追う気 女は齡とらず  
 パスツアー猫も杓子もルイヴィトン  
 流行が似合うと勝手におもひこみ  
 意地張つて流行遅れ着て通す  
 流行歌 歌つて育てた娘もはたち  
 国富んで駆け込み寺がとく流行る  
 流行となれば社名をカタカナに  
 流行に追いつけなくて春が往く  
 流行はどうあろうとも桜咲く  
 流行の向うに景気見えかくれ  
 やぶ椿 流行からは遠くいる

敬 高 栄 信 義 雀 踊 子 達 子 芳 子 柳 宏 子 路 児 諷 云 児 楓 楽 規 不 風 志 洋 小 路 天 笑 諷 云 児 武 庫 坊 留 留 子 頂 留 子 鬼 遊 太 茂 津 ミ サ 子 薫 路 児 柳 弘 みつ子 たず子 いわゑ

正体の無い流行に躍らされ  
 流行は追わず律気な蟻である  
 流行が下火になって買うつもり  
 髪淡く染めて融けこむ春の彩  
 塩昆布を煮て流行に遠くいる  
 佳  
 流行を無視して母の生きる道  
 流行歌うたえばひもじかった頃  
 流行にはうとくエプロン似合う母  
 流行が老舗の品に水を差し  
 流行がブラ下つてる高い鼻  
 人  
 飽きの来ぬ流行色に白がある  
 地  
 流行らないものに無遅刻無欠勤  
 天  
 占いが流行つて脆くなる絆  
 軸  
 流行を追わずに亡父の形見着る  
 兼題「干す」 小池しげお選

光 子 三 男 美 房 文 秋 規 不 風 喜 風 丹 吉 愛 論 智 子 白 漢 子 智 子 眉 水 紫 香 雀 踊 子 文 子 眉 水 紫 香 雀 踊 子 文 子

ぬれ衣を干さねばならぬ梅雨晴れ間  
 あるエース干された意地をバネにする  
 減反に今年限りの稲を干す  
 夜干しする嫁を叱れぬ共稼ぎ  
 カラフルに干して気になる人が住む  
 甲羅干す亀は齡など数えない  
 白いもの白く干して妻の自負  
 友禪を干して名所の顔になる  
 梅を干す妻はだんだん母に似る  
 若布干す老母にも遠い子が一人  
 一夜干し少し残っている色気  
 月曜日ベアルックが干してある  
 春の陽にわたしを甲羅干しにする  
 物干竿に一家四人の無事を干す  
 大ジョッキ干すとジョークが湧いてくる  
 飲み干して満足そうな舌つづみ  
 大根干す母が居て父が居て  
 正論を干されて隅に追いやられ  
 干わかめ母は手紙を添えてくる  
 網を干す一家総出の笑い声  
 時々は古果に戻り命干す  
 しめつばい言葉を干して輪が和む  
 公園のベンチ ソクフテスが干してある  
 涙干し切りそれから女強くなる  
 佳  
 目のいろが変わるピンクの物干場  
 地下足袋を干して男の旅終る  
 飲み干して一人に広い四畳半  
 虫干しに女の彩が並んでる

房 子 三 男 透 太 美 房 絹 子 寿 美 規 不 風 透 太 絹 子 鶴 丸 天 笑 武 庫 坊 鶴 丸 岳 人 冬 葉 霧 児 路 児 暮 子 霽 子 霽 子 鬼 遊 三 男 杜 的 狸 村

釣り堀でゆつくり男干している

人

智子

陽に干すとウソが消えてくのが見える

地

月子

布団干す長患いの母という

天

ダン吉

大ジョッキ干して男の顔になる

軸

楓楽

明日の海 信じて網を高く干す

軸

しげお

兼題「奏でる」

小出智子選

花の下 愛を奏でてみませんか

軸

端正子

ひっそりと奏でるように愛すなり

軸

文子

琴聴いて野点の席に居るゆとり

軸

達子

思い出を奏でくれるオルゴール

軸

いわゑ

胡瓜もみ母が奏でる生活譜

軸

典子

オルゴール奏でて癌と対峙する

軸

一風

応援歌 奏でて青春燃焼す

軸

たず子

耳鳴りの奏でるままに老いてゆく

軸

はつ絵

しあわせを奏でる笛を待つ太鼓

軸

隆

あす嫁ぐ娘が奏でるよさくらさくら

軸

年代

子のギター恋人出来たらしい音

軸

月子

花びらが舞って奏でる惜春譜

軸

満津子

合奏をしたい女性が見当らぬ

軸

みつ子

終の日に奏でる曲は決めている

軸

みつ子

ゆりかごの夢を奏でるオルゴール

軸

岳人

春の妻 愛を奏でる花を買う

軸

文秋

幸せになろうなろうと虫奏で

軸

昭子

雪解けの春を奏でる水車

軸

昭子

上向いて奏でる鳥を友だちに  
幽玄の闇を奏でる薪能

しげお  
楓云児

春の鳥なきたい時は鳴くがよい

春の宵 妻のピアノが楽しそう

伴奏をととき妻がしてくれぬ

パイプオルガン白いドレスと響き合う

春の愁い奏でて桜いさぎよい

トロッコ列車 汽笛が春を奏でてる

落花しきり惜春の曲奏でつつ

変人と歩いて春を奏でよう

ストラディバリは奏でる人を選るでしょう

肩の手が前奏曲を盛りあげる

鳥の声色々 山を春にする

ペランダのパンジー春の陽を奏で

風雪に耐えて奏でる春の土手

親子して奏でる曲を持っている

トタン屋根ベートーベンを奏でてる

丹後路に春を奏でる機の音

信号の奏でる歌に合わず杖

春を奏でる音符のようにつくしんぼ

組が奏でる平凡な朝だ

土砂降りの雨が奏でる鎮魂歌

お隣のピアノが腕をあげている

佳

柳伸

美津留

美津留

シマ子

一風

萬的

射月芳

ただし

智子

兼題「すつきり」 松川杜的選

すつきりと孫の躰の手を引こつ

歌舞伎座で泣いてすつきりして帰る

すつきりとするにこんなにいる勇氣

割勘がすつきりしない終電車

ふる里の水にすつきりして帰る

答弁にごしすつきりせぬ総理

すつきりと気分転換する花見

体調がすつきりしない花曇り

結末がすつきりしないサスペンス

殴られてすつきりとしたわだかまり

すつきりと話がついた領収書

すつきりと車内広告ない電車

春愁やすつきりしない偏頭痛

色即是空 人はすつきり生きられぬ

すつきりと金でお別れする絆

胸元をすつきりさせる春の風

自分だけ赦しすつきりできますか

すつきりとさせたら疵のつく人も

住宅ローン払い終った空の青

言いたい事言つて来た日の美味いめし

駅前はずつきりしたが味が減り

PKOどうもすつきりせぬ話

なんかこうすつきりしない陀羅尼助

すつきりとさせぬ慰安婦旧い傷

すつきりと勝ち越し決めた上手投げ

証人喚問すつきりしない紙芝居

すつきりした男に出逢ったことがない

温子

端正子

庸佑

千歩

しげお

ゞ女

歌子

楓云児

芳子

みつ子

白浜子

紫香

射月芳

楓楽

歌子

狸村

大茂津

三男

薫

美代子

光子

倫子

英一

憲太郎

志太

洋

薫

文子

まだ風邪がすつきりしない花だより

一時退院すつきりしない鱈雲

すつきりと出直すスーツ紺にする

すつきりとローンも終えて旅に出る

すつきりしてそれからはやらぬラーメン屋

すつきりと散髪をして逢いに行く

いまひとつすつきりしないけど黙る

ぼろくそに言われすつきりして帰る

皿洗う今日の終りをすつきりと

勝った方がすつきりするとは限らない

茶碗一つ割ればすつきりするのだが

モナリザも一度すつきり笑いたい

句読点付けてすつきり出直そう

すつきりとラストは夕陽で締めくくる

兼題「牛乳」

牛乳グルメ入鹿も喰ったか飛鳥鍋

給食の牛乳だけは飲んでる

パンと牛乳 嫁のベースに馴らされる

牛乳まで汚染をさせていたらしい

二日酔い牛乳恋し水恋し

牛乳の一口ごとにあるいのち

ビタミンだカルシウムだと飲むミルク

牛乳を飲む時 亡母が蘇る

命短し朝の牛乳熱くする

牛乳パックが葉書に化けて花だより

最初からミルク手抜きの子育見法

貰い子は母乳知らずの牛育ち

王様も猫も牛乳飲んでる

牛乳とパンで戦士の朝の靴

牛乳を飲んでロマンは語れない

起きぬけの牛乳妻の便秘薬

牛乳も闘志の湧かぬ紙パック

木簡に牛乳飲んだか長屋王

牛乳がとっても好きな母子手帳

酒やけの顔で牛乳飲んでる

牛乳の表示 本音は書いてない

牛乳のうまさを旨く飲む命

癌告知 牛乳飲んでおつたのに

ホットミルク別れた妻の匂いする

搾り立ての牛乳牧場霧晴れる

牛乳を飲む晩年の食養生

クリームシチュー牛乳嫌いの夫食べる

牛乳がこんなに美味い二日酔い

牛乳が好きなら妻です頑固です

牛乳とちりめんじゃこで子を育て

牛乳の恵み未熟児よく育ち

朝昼晩 牛乳飲んでます更年期

牛乳を飲んで聞き込みまたつづく

核知らぬ牛 乳牛へシューベルト

菅生

規不風

房子

一風

萬的

志洋

英一

天笑

絹子

典子

いわゑ

たず子

杜的

菜選

勝美

赤ちゃんが牛乳飲んでる花見

牛乳は飲んでいますか栄養士

乳しぼる娘へチャペルの塔も春

コーヒー牛乳 野暮な男と向き合つて

牛乳で育ち只今反抗期

新妻の牛乳入れたかくし味

第15回 阪神文芸祭(川柳)

応募資格 阪神間七市一町に在住・在勤

または本部をおく柳社の会員

応募期間 4月20日～5月20日

参加料 1000円(小為替)

選者 和田 光代 萩原金之助

石井 東魚 中村 東角

谷口 光穂 黒川 紫香

応募方法 雑詠2句を便箋に記入、住所

・氏名(雅号)を明記、左記へ

〒660 尼崎市東難波5丁目21-8

兵庫県阪神県民局県民課内

阪神文芸祭実行委員会事務局

菅生

規不風

房子

一風

萬的

志洋

英一

天笑

絹子

典子

いわゑ

たず子

杜的

# 老地柳壙

原稿は川柳塔社事務所へお送りください  
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原  
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

## 尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

娘が嫁って父に無口の日が続く  
紐を解くおんな無口なままがよい  
再会の笑い集めて写真撮る  
ムリですと鏡が笑う試着室  
笑いにも含みがあった左遷劇  
阿々大笑する妻だから信じてる  
笑顔よいかみさんがいて繁盛し  
生欠伸笑いが絶えた倦怠期  
あの笑顔承知したのかしないのか  
ライバルの自信に満ちた笑い貌  
お茶こぼす程に笑うた妻座る  
淋しくて鏡の前で笑ろてみる  
群集がいて僕がいて隠れよい  
冒険がしたくて温い群を出る  
群書類従 人の命の短過ぎ  
バーゲンへ群がる妻のたくましさ  
気付かない群に一人は寝たまんな

正一 栄 女  
保蔵 鹿太 柳影 昌子 勇次郎  
すみ 紫香 杜的 敬 澄子 薫 伊三郎

## 高槻川柳サークル卯の花 辻白溪子報

三分でつくれた鍵がこわくなる  
春うらら心の鍵はまだとけぬ  
舌つづみ上手に孫の離乳食  
平凡な枝にゴッホの花が生き  
人妻が親切すぎるので困る  
平凡に生きる目覚し明日へ巻く  
七転びして平凡のありがたさ  
ひとランク落として孫が受験する  
血色を賞められながら吸うお粥  
卒業旅行も海外というよき時代  
副作用の事は書いてないカルテ  
謎解きの鍵は日記の裏にある  
古希の坂 初心に戻すネジを巻く  
平凡なおとこと暮らすかすみ草  
平凡な一日背中流し合う

スミ子 節江 静江 稲子 正坊 女  
よ志子 春風 紫香 萬的 杜的 薫 英子 武庫坊

## 岸和田川柳会

## 芳地 狸村報

平凡に生きてごぶさた続いている  
平凡に飽きて賭け事ばかりする  
料理長の帽子に染みる店の味  
追憶を鍋が聞いている一人言  
口コミで評判路地のたこ焼屋  
締切りに急かれて脳がうろたえる  
梅干が苦手お粥を欲しがらず  
なでられて犬が留守番覚悟する  
千羽鶴の一羽覚悟の色になる  
一晩で昨日の覚悟もつ忘れ  
気鋭だけで勝てぬと知った体力差  
口惜しさに泣いていんどんでいる気鋭  
ライバルのすごい気鋭に押されがち  
裂帛の気鋭が満ちた寒稽古  
気鋭だと言われた頃の翔ぶ日記  
開幕へドフラフト一位が持つ気鋭  
春愁というブランドクの中にいる  
空白を埋めるカルチャー梯子する  
空白の時間パチンコでもしよう  
景気よい顔がハワイで泳いでる  
叩くだけ無駄です景気は冷えている  
景気よくパーツといきましょげん直し  
不景気を飛ばすラップを吹いている  
反抗期けしかけるのが居るよつだ  
好きだから身銭を切って後援す  
下心有る後援は辞退する  
おなじみの顔が揃った後援会

二年代 二南 波留吉 瀧小 石舟 白溪子  
惠空 一弥 柳宏子 通彦 ひで さよ子 ダン吉 武助 すみえ 月の 萬的 富志子 浪速子 勝晴 天笑 文時 小紋 二南 狸村

後援は声より金を大事がり  
白光子

川柳化粧  
植村客遊子報

恋文のようにそわそわ賀状見る  
目を閉じて言葉たくみを聴き流す  
身の程を知っているから飾らない  
一椀の雑煮で我慢の血槽値  
打ち明けた胸冗談にしかされず  
通行止め立て看板に文句いい  
歩の意地は金となって攻めて来る  
居酒屋で聞いた噂が皆ほんと  
また噂になるかも知れぬひとを連れ  
官界を東大卒の羽で飛ぶ  
脳味噌の量が軽くてへまばかり  
あべこべに孫にしゃかり手をひかれ  
焼香へかすむ在りし孫の笑顔  
時どきは女に戻る母の顔  
かわりない入試家庭の春気楽  
動かねば肥るし寒いし厭な冬  
暖冬へ梅が急かせる花便り  
証明は顔に出ている内緒酒  
手を握る程の気持を勘違い  
たこ焼きへ並ぶオーダーの婦人服  
鬼追式やんちゃ坊主が尻込みす  
義理と見栄一緒に包むのし袋  
父ちゃん拳握って睨むだけ

堺川柳会 (前月分) 河内 月子報

いの一 番母はとにかく駆け付ける  
春 香

輝子 朱玉 岳詩 サワ子 大鷹 礎石 葉香 悲子 雨雀 三青 美代 春蘭 嘉 茂章 姫女 はる子 好花 三重 一典 治夢 遊峰 客遊子

おばあちゃんが一番小さい元気者  
こ一番はずせば倅せ逃げて行く  
着飾ってからの行先明かさない  
夢いっぱい少女の靴にある飾り  
青春が匂う乙女の髪飾り  
飾らずに生きよう磨きつづけよう  
嘘ついて友を助ける時もある  
手助けをよるこぶ顔が美しい  
助けると思つてみんな食べといて  
落ちていた一円玉を助けたよ  
忘却という歳月に助けられ  
百歳百歳 テレビが派手に追いかける  
派手に着て笑つて敵のない女  
定年後の人生派手に行くつもり  
夫婦もう派手な喧嘩もしなくなり  
ある時の振り子は派手に動きたい  
御仏も極彩色の派手好み  
淑やかに座つても派手に見え  
齢よりは派手めの服でがんばろう  
片言と派手な身振りで通じます  
少しづつ派手に余生へ身構える  
お互いが助け合つてる子たくさん  
派手かしらお世辞に乗つて買った服  
あみだくじいちばんあとを狙います  
飾つたらアカンあなたはそれでいい

堺川柳会 河内 月子報

夜中に目醒めてなかなかねむれない  
泣くことの演技は人に負けません  
東雲 博光

かりん 紀美女 二南 ひで 頂留子 東雲 狸村 薫風 博光 泰子 富志子 福一 武助 柳宏子 半銭 小雪 磯子 慧梢 芳水 寿恵子 美乙女 てるよ 天笑 月子

佳句地十選 (4月号から)

青枝 鉄治 選

見事な演技で女奇りかかり  
最後まで妻の演技で看取られる  
流れのままに生きてゆけたらよいのにな  
欠点をきつちりもろた血の流れ  
重いおもい霧が流れて冬になる  
頑固さは無口な父の演技かも  
使い捨て美学へ老いも流される  
花嫁の衣裳に演技させられる  
いとしくて捨て身で演技しています  
今日だけは時計の針を進めよう  
詐欺師にはとうていなれぬ演技力  
好きなことしてると時計走り出す  
時刻までうそぶいているのも演技  
そろそろと演技にかかるアデランス

終章は一人で渡る丸木橋  
味噌汁の味さえ母にまだ遠い  
一滴のペンの雫が愛をかく  
いつからか豆の煮方が亡母に似る  
核を持つ大きな国にパンが無い  
にんげんに等級がつく文化の日  
磨いても光らぬ玉で手離せぬ  
はにかんで尼僧が話す古い恋  
限りあるいのちに余白などはない  
身に覚えあつて言訳聞いてやる

千万子 雪梢 春香 楓 半銭 小雪 寿恵子 与呂志 磯子 星子 満州 天笑 福一 薫風 孤舟 シマ子 富美 能子 願 鬼遊 月的 正坊 寿美

言い訳は時計に罪をなすりつけ  
良妻を演じ淋しくなつてくる  
わがまをいっばい流す母の河  
人間の演技に地球泣き笑い  
時々とはけてみせるのも演技  
性急な人の時計は進んでる  
母さんの気に入るような演技する  
汗流す男の背なは美しい  
三世代この家見つめて来た時計  
二度の流れ老いの歩幅は小さ過ぎ  
二度の職やはり時計に縛られる  
演技にはだまされないう妻の勘  
地で行けばそれが演技に見える人  
セツとした目覚まし時計遠慮せず

いずも川柳会 吉岡きみえ報

底辺で励まし合つた血の絆  
げんこつこの父の絆は痛かつた  
戦友の絆 平和の世に軍歌  
もう絆断てません腹の子が叫ぶ  
飛躍してみても雑魚には雑魚の風  
飛躍逃げたのはみにくいアヒルの子  
ちびた芯研いで飛躍を誓うペン  
花の香を追う養蜂の旅つづく  
花の香りをたくさん貰い生きている  
控え目な香りで冬の花は咲く  
遠い日の菊の香りは忘れなない  
善人の心突き刺す冬の星  
流れ星少女の恋は欲張りで

柳宏子 泰子 森子 頂留子 紀美女 二南 武助 狸村 ひろ 正子 けい子 正一 尽呂久

星空が冴えすぎでいて怖くなる  
星屑が流れ女の数えぬ  
恋一つ星のきれいな夜に生まれ  
それなりに星を見ている井の蛙  
踏んぎりの悪い月だと笑う星  
故郷の星が素直にさせてくれ  
星空を観ると優しい顔になる  
愛無限 星の定めに妻といふ  
長電話 故郷と同じ星光る  
新聞の古い朝をひきしめる  
老父母はもう起きている朝の音  
手を合わすことから老母の朝となり  
やわらかい言葉で送る朝の靴  
神達も仏も朝寝などしない  
一日のプラン豊かに朝のお茶  
ほんのりと優しく香る小引出し  
すがすがしい朝だ背伸びは思い切り

川柳東大阪 森下 愛論報

廃校を一緒に泣いたカレンター  
カレンター一枚ずつに四季の花  
今年また逃げ足速いカレンター  
カレンターこの赤丸は何だった  
抱き方が上手になった手に眠る  
肩を抱く友で芝居多すぎ  
少年の心で夢を抱いている  
ベット抱く女はなぜか寂しそつ  
黒豆の味ほめられた箸休め  
杉箸の杉が匂うて小豆粥

クニ子 多賀子 秀子 満江 寿美子 佳子 一葉 義良 叮紅 明朗 茂美 ちかし 好美 青朗 正朗 芙佐子 代仕男

老妻に女が残っていた晴着  
晴着着た娘嫁ぐ日がこわい  
通し矢の凜々しい晴着に明日がある  
じゃんじゃん晴着に弾む祭り馬  
錦飾れぬ男も帰る村祭り  
大夕焼けこころ飾れとくれた天  
飾るだけバックに入れた餅でよい  
何ん度目の魚拓か飾る床がある

川柳後楽吟社 従野 健一報

落花生ポリポリ下手な歌を聞く  
知らぬ顔してやれる程の余裕出来  
完璧を好む癖にもエゴがある  
新世紀 覗けるだらうか指を折る  
欺かれてるのも知らぬ恋心  
受験する子にひと言が自信湧く  
平均の仕事の余暇に趣味を入れ  
一人前に風邪はひいている無職  
ライセンス生きた自信を持っておく  
運不運 天にまかせて鉄を振る  
ローカルに里の味あり方言あり  
果てしなく海の碧さよ母の愛  
子と散歩犬は満足してへたり  
退屈でしようが無職いたわれ  
おはようの四文字に百の顔が有り  
温室は四季をこまかし花咲かせ

雀踊子 高尚 猪太郎 夏平 隆度 文秋 真柳 草風 拓治 たけ志 柳五郎 義親 金吾 哲郎 吟平 美智子 桃風 玉水 正秀 佐加恵 保男 照路

川柳クラブわたの花 片上 英一報  
あちら様が良すぎて縁談遠慮する シマ子

あちら似と孫の鼻すじつまんでる  
あちらから赤字を盾に米国軍  
長話好きなあちらも暇な人  
お向いへ今日婚札の荷がはいる  
無関心なお方が見てる向こう岸  
嫁した娘にどんな花咲く三年後  
長男の嫁でもいいとあちらから  
お年玉あちらこちら隣の隣組  
仲人にあちら様には如何かと  
あちらから見れば娘も出来ぬ嫁  
番台の向こうをちらり見せし  
3Kはあちらの人にまかす国  
大國が彼方に消えた流れ星  
仏さま下手なご詠歌ゆるされよ  
あちらから帰った当座の握手癖  
錯覚の夢のコースで子を育て  
世の中も錯覚あつて味がある

ボケじやない錯覚だったほつとする  
酒酌めばいつしか李白杜甫になる  
下戸のはず今ではキッチンドリンクカー  
酒酌めばほんにうららかな春日和  
ドクターストップ飲まねばならぬ酒もあり  
詫びている酒温かく溶けてくれ  
おもしろい嘘聞きながら酒を酌む  
呑めたらと思つ宴の渦に居て  
クエ魚を唐津の人はアラと言つ

川柳塔香川おつぱこ吟社 木村明人報

幸枝 龍 友甫 龍襄 泰成 俊子 明子 みき子 ますみ 正子 トシエ 初子 君江 幸枝

迷観子

ギャンブルの隣に深い淵がある  
納得のゆかぬ娘に親が折れ  
世界から集めた金で怨みかう  
悔いはない運は天に委せとけ  
スレスレの水位で受験やきもきし  
お出掛けの服は鏡に聞いて見る  
背負う風ペタル仲良く歌も乗せ  
ギリギリを捨て身でかわす二枚腰  
日曜日 返上している仕事運  
親身にはかなり介抱なきを知る  
口八丁なぜか付かない男運  
世界地図色分けまだまだ続きそう  
叱つてもニッコリ笑う孫の顔  
球根の芽も出そろつてお正月  
美しい音色にかこまれ音楽会 (小四) 菜実子

岩見川柳会 羽津川公乃報  
吉報を待つ喜びがたまらない  
雪情報にスキーの宿はてんでこ舞  
年金を上げるが税も取る知らせ  
吉報をつかむチャンスが見つかからぬ  
吉報を待つ苦しさに耐えている  
北風に乗つて吉報舞い込んだ  
吉報の期待に神もたすくむ  
良薬に優る吉報熱下がる  
吉報にうかれ階段踏み外す  
仏滅に来た吉報はほんものだ  
吉報がくるまで本を読んでいる  
吉報は神に任せて薬を打つ

明人 よしみ 正雪 放任 スミエ マサエ ふみ ひかり 白柳子 迷貫 吟笑 伽名子 いさむ 千カエ たくし 喜与志 嘉津江 民子 孝美 單車 美代子 公乃 芳江 忠良 きみ子

三幸川柳教室 三宅 保州報

吉報の来る位置に敷くお座布団  
吉報を聞いて仁王の目が緩む  
吉報の子感 茶柱からもらう  
吉報を待つ緊張がしゃべらせぬ

年あらた七福神も乗る航路  
揺れ動く時代へ航路きめかねる  
喝采はなくとも航路迷わない  
まだ航路はみ出す若き残つてる  
船出する子らへ祈りが深くなる  
バブル消え人生航路舵狂つ  
ジグザグの航路で女春を待つ  
わが航路一期一会をかみしめて  
ジープの嫁が航路を変えにくる  
激動の航路を生きた母の背な  
少年の航路に浮かぶ蜃気楼  
父の背に目指す航路の旗印  
多情仏心やがてひとつになる航路  
ゆとりある航路目指して模索中  
子に示す航路は太い線で引く  
点取虫 世渡りの道踏み違え  
心機一転 明日を起点とする門出  
濁点を打ちまらちがえてから喜劇  
満点でないから皆に好かれてる  
母妻女 足せば百点もらえます  
焦点をずらせば丸くなる心  
焦点はあなたにそつと向けている  
焦点をしばれば霧が晴れてくる

大漁 八千代 美恵子 由多香 美舟子 (出)幸子 由梨 公子 一郎 百合子 茜 鉄治 町子 和子 昭枝 保州 正子 高夫 かなめ みね 朱夏 正雄 幸子 当代 千枝子 三千子

還暦は百里の旅の通過点  
句読点打って私を解き放す

接点を見つけたあなたに近くなる

百点を下さい今が絶頂期

点と点 結べば謎も解けてくる

欠点は両眼でみないことにする

折り返し点から重い荷を捨てる

倉吉川柳会

渡辺 善句報

見たくない時だけかける色眼鏡

お二人の門出ちよっぴり妬けてくる

メモにないおやつばかりを買って来る

面白いことに危ない裏がある

プロポーズ僕と一緒に歩こうよ

一万歩 歩いて一升酒を飲む

マスコミが未来をかつぐよい門出

危ないといったら年寄りにされた

逢いたくて歩いてなんかいられない

水中のメガネ珍魚を追っている

買物のついでに会いに行こうかな

ポケットの熨斗に油断せぬことだ

さびしくて話し相手に小鳥買う

勇敢にわが手の平を歩く蟻

買物の好きな病がおおらない

臍おぼろほつき歩いてみたくなる

握手して白手袋が歩いてる

危ないと言うから行ってみたくなる

ああ夫婦危ない目にも二度三度

買いたいものは長寿薬に決つとる

南大阪川柳会

金井 文秋報

雪の降る温泉雪の和に浸る

どんぐりが寄ると和んでくる空気が

儼約を美德と信じたまま老いる

迷信を笑い飛ばした昇り坂

事務所開き明日は乱の幕があく

底辺をたどる笑顔に乱れなし

唱和する社訓妥協を強いられる

衣食住足りて迷いが深くなる

春の音のせて誘いの文がくる

不揃いに名前が書いて春を待つ

約束をしたたらと春がけしかける

迷路から抜けてわたしのかおになる

春の乱パントマイムを未だ解かぬ

和解してからは口数多くなる

豊かさにとどぶり潰かっている平和

齢ですな春は眠たくなるばかり

和の中に一人異端の自己主張

湯上りの髪の乱れに惚れ直す

佗助が咲いて我が家に小さい春

春の陽を背中に浴びて思案する

今頃になって約款読み直し

浮世絵の裾三角にある乱れ

平和だなゆっくり泣ける里が在り

和菓子にも貫禄がある京老舗

迷わずにその日その日の絵をかこう

初日から波乱すくめの春を呼び

裏切つた日から迷路を抜けられず

作二郎

楓 楽

文 秋

柳 伸

信 治

真 柳

憲太郎

柳宏子

度

直 子

智 子

凡 子

章

二南

寿美

萬的

章久

冬葉

勝美

悟郎

庸佑

雀踊子

文子

岩信

シメ子

文江

トミ子

海遊館ジンベイ鮫も和の中に  
迷い道 地獄行きには花が咲き  
玉手箱もらう約束ならしませ

川柳ささやま社

遠山 可住報

後編へ期待をかけるくやし泣き

ろくろ回す土の魅力に取りつかれ

磨き砂私このころも白くなり

指練つて孫の来るのを待つながさ

法律も知らない姑が草むしる

しあわせは骨を埋める墓がある

宿命と割り切る胸に気骨抱く

骨休め二人の飯に具を混ぜる

長いものに巻かれ方針消した鬱

節くれた指で幸せかき寄せる

骨埋める故郷と決めUターン

滝壺に組んだ十指が無に誘う

義理チョコに軽い魔法をかけてある

見返りのない骨折りのいい笑顔

川柳岩出

小倉 アサ報

辛抱の形に干してある軍手

鬼の面とれば女神の顔になる

振り向けば鬼に変心した美人

辛抱を抜け出す穴を掘っている

夢辛抱涙も入るチャンコ鍋

喜びも悲しみもあるメモの奥

書いとけば忘れないよとメモが言い

辛抱もどうにか出来る子に育て

東雲  
清水  
千梢

恵美

純子

とよ子

貞子

つや子

テル

靖子

とみ子

百合子

ヒサ子

和子

富美

文平

可住

精子

綾子

春子

和子

達子

悦男

神一郎

アサ

流感が鬼の霍乱呼び起こし  
お互いに辛抱しつづ丸く住み  
メモ違い受話器の奥でどなられる  
鬼ごっこ好きな児ばかり追い回す  
掌の中に辛抱の二字封じこめ  
辛抱に磨きをかけて母となる  
鬼瓦都市化の波に酔っている  
辛抱はもう限界の北の島  
お隣のメモで妥協をする噂

城北川柳会

吐田

公一報

時と言つ不思議な時が過ぎてゆき  
バラ色の時へひねもす蟻の列  
寒くてもぼちぼち繕う老いの幸  
アンカーが潮時計先に出る  
時代劇 男は誰もいくさ好き  
ハンカチに喜怒哀楽のうらおもて  
時を経て恋しい人もただの人  
占いの梯子やつばり迷うだけ  
悠々と心は雲に乗っている  
その時の風に合わせている速度  
寒風が国技館だけ避けて吹き  
卒園の空の果てなる揚げ雲雀  
寒々と脳死論争聞いている  
あの時に触れず歩道の立話  
差し出口コップの中へ波を立て  
幸せが白馬に乗って来る夕べ  
人生の乗降口がまだ見えす  
単細胞メモする事に決めている

千鶴子 英子 正義 正直 愛子 昌子 瑞穂 忠雄 与呂志 新一郎 ただし 寿美礼 仙吉郎 ふみ 春蘭 千世子 満津子 達子 典子 秀夫 静歩 倫風 頂留子 久留美 昭子 登美子

白梅の匂い袋の紐をとく  
一瞬の迷い冷たい人になる  
聞き合せ酒くせ一つひっかかり  
疑いを抱かぬ女の白い足袋  
笹舟へ大海の夢孫は乗せ

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

年金のくらしにチラシ手に余り  
新しい橋竣工の擬宝珠撫す  
チョコ一つ来ない男の無精髭  
北焼行おいらにや国名要らないよ  
重箱の隅で摘めた雑魚一尾  
恋文の復元やはり罪を呼び  
病床の息子甘えるだけ甘え  
当てがあるそれでポストが気にかかる  
音楽を聴かせ仕込んだ吟醸酒  
通じない言葉笑顔で通じ合い  
温暖化 地球の命絶えるかも  
マスコミの尾鰭 真実逃げて行く  
子に孫に恵まれ日日の忙しく  
旅の宿 演歌身にしむ独り酒  
桃咲いて桜待ってる気の早さ  
アイウエオワタナベさんはいつもピリ  
出産を間近にひかえ待ちわびる

八重子 温子 静子 白峰 公一 義美 ハル 虹汀 幸夫 久仁於 四郎 高明 タミ 朴竜 ちよ ふさ子 治幸 青琴 喜久亭 紀一 正敏 剛司

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

嫁姑 方程式にはめられる  
姑のさじ加減覚えてやつと妻になる  
姑も重箱の隅ほじくらぬ  
嫁よりも姑の役目がむつかしい  
末っ子の嫁でやさしい姑でした  
山越えて姑の笑顔に逢ってくる  
笑い上手な姑で私すぐわれる  
ほどほどの嫁姑で恙なく  
連弾の合わせこの家の嫁姑  
お姑に花をもたせて風がなぐ  
私のようによのつてくれる姑  
今は素直に亡姑に感謝の手を合わす  
おかえりと米寿の姑も居てくれる  
野良着まで美しく着る姑だった  
低い屋根 姑と支えてきた曆  
真中に泉境のある池がある  
背の丸い姑の一途な花作り  
花手桶姑の歳にあと二つ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

胸に灯をつけても枯れる愛の花  
花言葉 完結編をかきつづけ  
追憶の花一輪が胸に生き  
花有情散り敷いてなお夢残し  
花束で埋まる楽屋の初舞台  
仏千体 亡父に似ている顔に会う  
あだし野に仏のかからつづく怪  
み仏の目を細めさすもみじの手  
罪深き私を救う菩薩の手

寿々子 八重子 花子 保子 ゆき 千春 亜弥 弘子 晶子 恵子 松子 玲子 夕子 登栄 千代 天雀 瑞枝 荒介 悦郎 真柳 美幸 弘直 一風 泰 かつみ

貪瞋痴 仏の道に速く生き  
人間になる警策の訝えた音  
美しい答に出合う花作り  
鬼の面作ると妻に似てしま  
瑞穂の国まともならぬ米作り  
行き先を曖昧にする若作り  
列作るたやすけが難しい  
たんぼぼとれんげを摘んで孫帰る  
よもぎ摘む爪にみどりのマニキュア  
若草が匂うそろそろ花粉症  
若草の芽生えに啓蟄活気づく  
若草が萌えて入試の血がたぎる  
復活へ振り子は俺のトルストイ  
百歳がアイドルとして甦る  
復活はしても昨日へ戻れない  
善人は友の情けでよみがえる  
復活の島の奇祭へ臨時使  
裏山を復活させる苗を選ぶ  
復活へしっかりしめる靴の紐

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

雅士 欣之 夕花 美津留 勝美 二南 晋吾 三男 春子 柳伸 柳宏子 しづ子 年人 正子 頂留子 隆章 洋子

まだ脈があるから辛い点つける  
意見なら少し辛めの方を聞く  
辛口の父の背中にある温み  
辛口の批評に耐えているピエロ  
妻の目を盗んでソツと塩をかけ  
担ぎ出す山の味覚は旬の味  
生きてきた証拠担いだ荷が語る  
赤紙に担ぎ出された敗戦記  
一泊の旅でも縁起担ぐ妻  
子の夢の役に立つなら担がれる  
師の楯担ぐさびしい恩返し  
担がれたとは気付かない自尊心  
笑い合える日がくるまでの荷を担ぐ  
縁起担ぐ母の暦へ合わしとく  
縁の下 担いだ過去が光ってる  
担がれてみよう息子の描いた夢  
なぐさめの心は飾らないことだ  
飾ったらやけに行き先聞く夫  
飾り気のない娘が先に見込まれる  
内面を飾る知性に出る品位  
終章を飾る小さな徳を積む  
子に遺す一句を花に飾りたい

川柳塔とつとり 岩原 香水報

金子を貸す日から疑い深くなり  
選挙戦始まりおじぎ深くなり  
冗談がいつとはなしに深い傷  
深酒が紳士の仮面奪い取る  
紙飛行機 空の深さをまだ知らぬ

英子 和成 精治 柳宏子 柳和子 武雄 栄美子 千寿子 たつお 二南 輝子 紀久子 守 佐代子 美房 忠雄 正博 吞天 三男 高夫

一本のベンがあびせた深い傷  
よく変わる空へ迷いが深くなる  
善と悪 深いところで結びつく  
深い訳あつて成田で離婚する  
凍てぬよう今夜も蛇口見て回る  
凍る朝 熱い味噌汁しあわせだ  
父危篤 一瞬心凍りつき  
心ない人の言葉に身も凍る  
甘えたい夫の腕が凍りだす  
自由化に凍った道も解けてくる  
凍る前 水温ゼロで味を出す  
凍る手を温めてくれる胸がある  
凍りつく夜はおでんで温める  
お別れのパントマイムの窓が凍て  
ムードに酔い無口な私歌わせる  
春炬燵 楽しいムード孫うたう  
年老いて枯れたムードも板につき  
幹事先ず歌ってムード盛り上げる  
ムード満ち愛の炎が灯される  
ムードなど言っておられぬ腹がへり  
コーヒの味をムードが深くする  
春宵のムードふたりのためにある  
いいムードどうやらあの娘貰えそう  
いいムードでも石橋は叩いとこ

尼崎尾浜川柳会 前田いわお報

あの頃はポロポロだった終戦日  
ぼろぼろに我が家を壊す火砕流  
ぼろぼろの服が宝の孤児哀れ

明美 艶子 圭一郎 大漁 行男 侑里 粗粒 政子 孝由 正 眺 一枝 旋風 静生 登美枝 常子 太平 多可志 よしお 喬水 一京 友夫 螢 由多香 昌子

ぼろぼろになつても女化粧する  
 口ポロにされてもつくす火の女  
 ぼろぼろの辞書にのこした鬨魂記  
 ぼろ服でしつかり入つてる革財布  
 散歩する足許からも春匂う  
 気安さは小銭で足りる縄のれん  
 政界の性こりもない汚職劇  
 炭焼いた父の窯跡まだ匂う  
 宿帳にちよつと考え妻と書く  
 谷底の恐さを知らぬ有頂天  
 春を待つ蓄は無下に手折らない  
 数億の詐欺で身の上暴かれる  
 身の上に偏差はつけぬ陽が昇る  
 身の上の申し開きをして女  
 泣き上戸だが身の上話さない  
 夜を明かし互いに身の上語り合う

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

勇次郎 修水 十四郎 保蔵 尚利 鹿太 すみ 弘治 石舟 夢之助 二南 敏之 澄子 歌子 紫香 いわお 正とし 萬的 富喜子 武庫坊 ひろ子 絹子 たず子 キク子 澄子 哲夫 義子

口達者を妹だけど憎めない  
 世話好きだから妹の年も聞く  
 母さんの膝下に盗まれる  
 寂しくて深紅に爪を塗つて見る  
 母さんの口紅を見た参観日  
 飛鳥路の遺跡 歴史を塗りかえる  
 何色に塗つても自分変えられぬ  
 ペンキ塗りたて夫も離れて歩くなり  
 口紅を塗ると私の顔になる  
 ハイテクに塗りつぶされている地球  
 気高さをコインにクインエリザベス  
 気高くてこわいようです富士の山  
 気高さが口を開けば消えてゆき  
 酔つた目に妻が気高く見えてくる  
 梅一輪 気高き母を演じきる  
 ついついた嘘を躍起に盛りあげる  
 冗談に受けとめ恥を掻かせない  
 友の名が皆書かれてる発表日  
 桃の花ボクに妹出来ました

川柳藤井寺

高田美代子報

英子 二南 歌子 江美 正坊 よし津 いわゑ しげお 芳子 ヒサ子 道胤 年代 宣子 房子 杜的 てる 白溪子 春蘭 みつ子

運命の女神にすがる受験生  
 諦めたらあかん運まで逃げてゆく  
 あげまんを射止めて運が付きはじめ  
 同じ冬耐えて蛾になる運命もつ  
 小石にもつまずく運の無い男  
 落椿 男の運を知っている  
 金運の手相が皺で消えていく  
 運命を風にまかせば狂い出す  
 ラフソナイ 落葉からから御堂筋  
 花は宴 桜紅葉は詩にする  
 落葉掃く尼僧に憎い風が舞う  
 嵯峨野行き哀れ紅葉踏むばかり  
 万札に化けてほしいな枯落葉  
 たつぶりの愛で育つた葉芽花芽  
 葉脈に透ける満々の鬨志  
 落ち葉も昔は追わぬことにする  
 沈丁花 恋の渴きの匂いまく  
 母さんの性格似てきた流し台  
 一枚の葉書で運を試す日々  
 来ないかも知れぬ人待つ冬銀河  
 三代代飾り継がれて雖も古稀

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

運命の糸をつないだピエロの手  
 福運は陽気な人につきたがり  
 悦子 三男 淑子 寿美 昭子 与呂志 寿美子 みゐる  
 転動を迎えてくれた花の駅  
 転動を地酒と詠りが待っている  
 転動でまたなじめない国なまり  
 負け犬のまま転動せぬつもり  
 転動に猫もそわそわ落着かぬ  
 ゆずれない些細なことでもめている

結局は金がないからもめている  
 トラブルに首突っ込んで火傷する  
 父が倒れて遺産に火がついた  
 もめることしばし忘れて春の詩  
 鍋の中 色とりどりにもめている  
 もめるのがとても嫌いなコップ酒  
 煩惱を右へ左へ煙草の輪  
 赤い爪 煙草の煙よく似合い  
 禁煙がならず少数の中にいる  
 禁煙車 降りて一服する夫  
 煙草消すと行方知れずになる男  
 一服の煙草がうまい病み上がり  
 日当りで雑とじやれてるベツト夫  
 むかし話がとつても好きな夫婦雑  
 それからの話聞いているお雑様  
 たずねても昔かたらぬ雑の顔  
 ゴルバチョフ雑は過去のものになり  
 呱呱の声それから続くいばら道  
 性教育それから先は保健室  
 それからの事が気になる老婆心  
 それからは涙と汗のまざる日々  
 それからの地球に長い冬が来る  
 それからは勝負となった腹の芸  
 それからは男の言葉信じない

ちかし  
 多賀子  
 重昭  
 邦代  
 米子  
 与根一  
 義良  
 蘭水  
 きみえ  
 登志子  
 たつみ  
 房子  
 静江  
 太泡  
 章峰  
 長三  
 鶴丸  
 桂子  
 草丘  
 静恵  
 みえ  
 寿美子  
 友子  
 叮紅  
 川柳高知  
 川竹  
 松風報  
 竹萌  
 圭風  
 京子

序列とは別に信用だけはある  
 信用をされても困る保証印  
 信じ合う二人に陽春の風温い  
 信用のおける男に金がない  
 信用と言う財産をゆずられる  
 信用はバブルと散った土地神話  
 書き替えて免許の写真少し老け  
 落第の主婦でストレスなど知らぬ  
 確実に春が来ている花粉症

翠洋会

井上

照子報

佳風  
 憲一  
 有佳  
 功  
 舞子  
 朱坊  
 さち  
 春枝  
 松風  
 兼治郎  
 さと美  
 みつ子  
 満子  
 綾子  
 拓生  
 春子  
 希久子  
 正坊  
 蛙  
 雪梢  
 宣司  
 光子  
 宏子  
 淑子  
 すすむ  
 凡子  
 正雄

少年は捕らわれて知る親の愛  
 花吹雪 舞えば一件落着す  
 スキャンダル猫も小判が好きらしい  
 事件記者ドラマの中のかっこよさ  
 海外へ防弾チョッキ用意する  
 ラーメン屋で刑事どくろいことを聞き  
 大事件 孫が笑ったくしゃみした  
 きんさんに骨がさされば大事件  
 かげろうに何ん思想もなかりけり

川柳ねやがわ

高田 博泉報

ひろ子  
 英一  
 千歩  
 良江  
 東雲  
 いつを  
 楓楽  
 恭昌  
 鬼遊  
 藍子  
 菜月  
 勇太郎  
 英王子  
 シマ子  
 庸佑  
 波留吉  
 一笑  
 とし子  
 明美  
 一途  
 沙置子  
 まつ女  
 亜也子  
 洋  
 速水

ゴシツプが先に着いてる支店長  
損金で落とす社長の女ぐせ

ゴシツプに間取りがかわる耳の中  
開栓の噴水に光寄ってくる

ゴシツプの雑種の父はうちのボチ  
投函の前に口づけしてるレター

創業者 真面目な損を叱らない  
ゴシツプは自衛しませう三ヶ月

あり余る世代は我慢など知らず  
よう我慢したなと虹が出てくれる

ときどきは役立つ祖母の知恵袋  
ていねいに言うてくれてもくびは首

南海川柳会

飯田 悦郎報

雨に伸び出荷に慌てるほうれん草  
慌ててもどうにもならぬ顔の皺

都市砂漠近所付合い無い団地  
ご近所にタレントが居る好奇心

お隣で死んで居るのがわからない  
ご近所の十指に老いを数えられ

寒波来て急がぬ用は明日にする  
托鉢へ遠慮会釈も無い寒波

あの時の寒波を喪服思い出す  
毛皮店 手具脛引いて待つ寒波

親善ならぬ寒波がロシアから  
交差する思想無言の日が続く

団体を二つに分ける交差点  
探照灯交差した日の恐ろしさ

通リゃんせメロデーを待つ白い杖

えいめい  
時弘

雅文  
光子

一鬼  
吉之助

あやめ  
かすみ

柳宏子  
薫風

紫香  
度

勝美  
美津留

信博  
真砂

東雲  
章

庸佑  
二南

正好  
甘平

文秋  
柳伸

覚然坊  
しづ子

志華子

事故起る度に立体交差論  
一人住む知人が捨てて来た故郷

知人来て重い空気を軽くする  
選挙ある年は知人にしてくれる

知人から知人へ追っている事件

うみなり川柳会

森田 熊生報

賛成をしておき何もせぬ男  
議事無言 賛成だけに手をあげる

飽食の鍋に猪煮えて来た  
消費税払う一円玉探す

マンションへ鍋釜揃え子の巣立ち  
賛成の位置で居眠るふりをする

追い風に押され恋しい鍋の湯気  
賛成へ振った尻尾と堕ちてゆく

故郷を発つもう父母の雛でない  
賛成はしたが無口になった父

この鍋に思い出煮込む老い二人  
税務署が探すと儲けある帳簿

最後に手挙げて本音をすり合わす  
俵せを探しに森へ来て迷う

鍋の湯気 春の小川を奏でてる  
旧暦へ素直に雛が目覚す

川柳はびきの

塩満

つっぱりは母校へ捨てていきなさい  
ポイントを突かれてからの不整脈

春になったら宝さがしにでも行こう  
偶然の出合いに揺れるイヤリング

柳宏子  
悦郎

度  
三男

泰

好男

正

螢

一止

とし江

天涯

あづま

雄人

芳子

雅女

華子

子を放す支度が出来て女親  
仲人の嘘で結ばれ共白髪

均等法 男のノラが居てもいい  
飛脚便 献金街道つつ走り

大兵も露も恐れぬ離れ業  
化粧して女しつとり春の彩

こわい子感君から離れていくような  
シナリオがまた動き出すコップ酒

睨まれて行き場に困る田の蛙  
睨み鯛三日天下の鰓をはる

巣離れのあすへくつきり天の河  
森を離れた猿は鏡が欲しくなる

窓際に離れたみれば猿芝居  
きんぎんの強さ見せられ望みわく

離れ風当てる如く天をゆく  
偶然も応援をする赤い糸

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

出発が今日でよかつた花吹雪  
つますいた日を出発の日ときめる

呱呱の声出発点の雄叫びか  
ライバルと出発点で長ばなし

歳重ね心の装が深くなる  
エプロンに包んだ心のあたたかさ

趣味ひとつ心豊かにしてくれる  
この話心変りがせぬうちに

詰めすぎた胃の腑が妥協してくれぬ  
ベテランは妥協のチャンス見逃がさず

妥協したこれでよかつたと猪口がいう

与呂志

志洋

たかし

夏秋

二南

たけし

みつこ

吐来

利武

悦子

一屯

元紀

晋

キミ子

泰子

どうしても妥協ゆるさぬ下戸の酒  
仕方なく妥協しておく落ち目だな

川柳たけはら

森井 菁居報

おとうさんチヤコレートっぱらっていいな  
卒業と同時にスタートする一步

呉服屋の弁舌に乗る春の日よ  
寝不足が続く金銀銅メダル

嫁からの温い年玉蝶が舞う  
カレンター○つけやすいとこにさげ

山茶花が嵐の中でよく笑う  
転ぶたび叱ってくれる亡父の声

孫につられ名所を巡る三ヶ日  
孤独にも色々ありてさまよわず

あきらめてなるかなるか冬  
見ぬ振りが上手でいつも負けている

八方ふさがり当分は石になる  
勘忍袋つくり合つて日向ぼこ

あんなこと夫がいるから言えるのね  
甦る恩師のことば忌は巡る

黙秘権という戦術もあるしたたかさ  
春近し子離れの策練っている

酔うことにしましょう女の缶ビール  
片べりの靴よ夫を頼みます

沈下花亡夫の一周忌も近く  
カクテルグラス次の言葉を待っている

それはうねりとなつてほろびてゆくみどり  
木を伐る妻の祈りのながいこと

目をつぶるともいいことだと思つ

清泉 白汀

小千枝

小史子

菁居

蘭幸

麻代

喜久恵

夏喜

浪子

喜美子

一枝

清水

静佳

栄恵

愛子

比呂子

千代美

淑子

房子

一路

笑子

政己

傘立てに傘のないのもさびしいね  
人生観 世に逆らわず従わず

歟振ると先祖が話しかけてくる  
さりげない助言に今の僕があり

野仏の赤いベレーに小雪降る

川柳大阪

高須賀金太郎

外れ券メモにもならぬ宝くじ  
本当の強さを持つている無口

アンテナを外し三猿主義となり  
芸なしの猿は自由の群れにいる

また一つ持病増えたがまだ負けぬ  
無事平穩何より今日の陽が落ちる

生きている証せつせとキーを打つ  
牛若のひらり小兵は舞の海

お近くに舌かむような国が増え  
この国が好きで好きでたまりまへん

肩書きのない祝電は以下同文  
犯人と同じ名前で電気が腐る

同じ冬こんなにくくつてええやろか  
同じ顔して一卵性が歩いてる

同じ絵馬上げてても合格不合格  
本心を語るその目が生きている

心機一転アラマアあきすに言うてはる  
早口になつて心を見すかさされ

学割で足を広げて座ります  
マイカーで学生さんが下校する

優先の席で学生マンガ読む  
留学生青い目の嫁つれて来る

不杯 静風

白狐

笹舟

規代

柳弘

希久志

しげお

雅果

我勝

洛醉

重人

比呂志

鉄心

一步

三吉

本蔭棒

笑司

笑風

美津留

天平

凡九郎

与呂志

この国に生まれて四季のありがたさ  
金太

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

老婆の愚痴多くなる春炬燵  
炬燵からバトンを受けた春の風

風の子は炬燵嫌つて雪に跳ぶ  
炬燵から猫が出てくる隠居部屋

あれはよし無ければ淋し春ゴタツ  
誇りある勲章ケースに籠り切り

健やかを誇りに妻と茶をすすする  
弱点を笑いとばして茶化す父

強がりを言つて弱点カバーする  
弱点を隠す女の厚化粧

二重生活止めて夫婦になりました  
働哭の日を思い出す二重橋

人生に二重まるあり三角も  
目の奥にある石板の二重まる

影法師 二重人格持て余す  
絵本買う約束がある二重丸

いい話 二重まぶたも重くなる  
不愛想な店次からは素通りし

世界史の次の頁が開かない  
次の地位登れば首の座がやばい

婦長より次の看護婦さんが好き  
パレットに赤を加えて春を盛る

赤いバラ加えて情熱贈ります  
一匙の加減で生きる老母の味

夢之助

十四郎

向西

尚利

弘治

いわお

鹿太

キク子

勇次郎

百合子

紫香

はつ絵

ただし

白溪子

福子

よ志子

葉子

圭坊

しげお

江美

正坊

川に川落合って宿寝そびれる

自分史に筆を加える箇所がある

人工を加えて秘境俗化する

老いの日々に加速度がつく転び癖

仲間には加えたくない嫉妬心

へそくりも加えて組んだフルムーン

足し算のない年金でつつがない

もつれ解けず話が前後するばかり

前後して上げる双子の呱呱の声

仁王解体 前後の歴史を知る墨書

前後ろ連えたような娘のフアッジョン

老母の思い出話が前後して困る

初舞台 前後わからぬ程あがり

あとさきになって仔犬がついてくる

出来そうな人が前後にいる試験

川柳はまでら

井上

喜酔報

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

静岡川柳塔

永倉

僕川報

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

一輪車の少女に出会う春の道

きく子

花植えて花の心にふれたたくて

皆仲間意識にさせるパスツァー

望郷の夢抱いたまま孤児は老い

ひと時の出会いががえした人生譜

燃えている男女の妖しさよ

過ぎし日の燃えた想い出古日記

星空にきれいに燃やそ残り火を

くじけまいリングは赤く燃えている

原爆が燃えて干切れた北の島

冬苺 藪の木陰に独り燃え

すわチャンス声かけられて飛んで出る

妹が掴んだチャンスで順を変え

指輪など似合わぬ妻にしてしまい

秀香

半仙

甫正

山人

志重

ふさえ

江山

すみれ

吟平

恒心

邦人

贊平

税務署にきんさんきんさん縁が出来

ライバルがとて大きく見える鬱

その節はきつとお世話になる絆

回り道知らない犬で駆けるだけ

箕面川 水鳥一羽淋しそう

消費税とるから一円玉が要る

阿弥陀経片手でろうそく継ぎ足して

払うのは夫で高い方に決め

結論を決めかねている缶ビール

マスクしてあるあの人花粉症らしい

一寸した身上話するコーヒー

父さんが直した瓦よけい漏り

決心がようやくついたロダン像

ペンペン草も瓦も春の雨になる

こわれても家紋大事な屋根瓦

田英子

富子

ただし

すて

明光

杜的

白浜子

武庫坊

萬的

紫香

寿美子

正坊

作二郎

きよ子

正雄

金吾

たま

たま

たき

つね

まつゑ

静代

久子

柳華

きん

幸福があるかと扉押してみる

押し問答 結果はいつも妻の勝ち

C I S 核のボタンを誰が押す

押されたら中へ割り込む満員車

インターホン押すと番犬とんでくる

押し通す無理を承知の渡りあい

在宅を念じつつ釘そつと押す

意地を押す怖い女の赤い爪

強引な押しの一手で恋実る

たのまれただけで保証の判を押し

万札をソロリ押し込む両替機

玄関で妻が念押し忘れ物

広人

酔舟

凡兵

千流

源五郎

宙宙

牛歩

美保

峨峨

与呂志

しげお

喜酔

黄八丈 躰のままで孫を抱く

菜の花の黄色目に沁む試歩の道

信号の黄色に男試される

オムライスが人気メニユーの洋食屋

気まずさの二人へ激む春の運河

練瓦倉庫へ古いクレインのある運河

溜息を漕ぐは心の運河にて

運河の国境の水せちがらい

先生が決めると揉めるお年頃

鍋煮えて上戸も下戸も箸がでる

新幹線どこまで速く走る気か

塩漬けの鯛が届いて雪とける

登代子

女

蕨児

とく子

薫

しげお

幸子

悟郎

芳子

一笛

吉太郎

つゝ子

合格で天神様をつい忘れ

カタカナで言って教養寮にかけ

共稼ぎ米寿の婆や使われる

人生は噂立つ時花盛り

月給日 軽い財布がお持ちかね

軽い気度言った言葉が引つ掛かり

一人っ子同士の恋がはかどらず

受験子に悲喜交々の春休み

和服着た明治女にある魅力

幸せを今日も日記へ打ち明ける

正雄

金吾

たま

たま

たき

つね

まつゑ

静代

久子

柳華

きん

山火事は自然をこわす種なんだ  
 情熱の火を吐く心惜いほど  
 母の火は温いらしゅうて人が寄る  
 ギョツとする蛇の姿が私かも  
 尽くすだけ尽くした泣かぬことにする  
 希望に適うものを天が下に聚る  
 わが家にも父の希望という男児  
 燃え尽きるまでにと思ふ種を蒔く  
 情念に狂う蛇なら雪も消す  
 尽きるまで走って白いテープ切る  
 マムシ酒夫婦和合の謎を解く  
 蛇を殺してやがて心が冷えてくる  
 蛇に生まれて蛇の鏡をみつめない  
 満腹になればコブラも踊らない  
 趣味多彩 年金暮し尽きぬ夢  
 イヤリングつけて福耳らしくなり  
 火の中もとわず先に征った人  
 呑み交わし語り尽くせぬ戦友といふ  
 空想と希望と本音からみ合う  
 少年の脱皮に父は希望かけ  
 飛び起きた蛇も花見の酒に酔い  
 悔いはなし力の限り尽くしたよ  
 共白髪いつも変らぬ夫婦仲  
 許せるなら四万十川で余生でも  
 つけ睫あしたの夢が見えますか  
 これからは欲八分目守り抜く  
 愛と希望抱いて明るく生きてゆく

あき子  
あづま  
きみま  
房子  
みさ子  
諷人  
圭子  
正恵  
実満  
和子  
黙光  
きみ子  
汲香  
静生  
芙美  
喜与志  
節子  
信江  
智恵子  
三千代  
かつ乃  
早苗  
静江  
明美  
くに子  
弘子  
八重子

蛇いちこの朱は悲しい愛ですか  
 瞳千両 女の武器をそなえてる  
 凍結卵 春に希望を持っている  
 また希望もたせて君はするい男  
 星祭 念念の火が舞い上り  
 パチンコ屋を負けた仏頂面が出る  
 どの道を行っても尽きることがない  
 話が尽きる頃には飯も炊けている  
 修身を習いポックリ寺に行く  
 憎しみも尽きて仏に近くなる  
 努力して希望大きくふくらんだ  
 人間をよろこぶ祭り火の中で  
 山燃えて無尽の水を貯える

幸代  
睦子  
忠良  
美つ千  
しげる  
八太郎  
富恵  
はるお  
隆風  
みさ江  
正道  
公弘

鳥取県川柳大会開く

第15回鳥取県川柳大会は3月29日、鳥取市のさざんか会館で約2000人が参加して開かれ、西出楓楽さんが知事賞を獲待した。当日の各題秀句は次のとおり。

拝観料お寺の庭も身構える 八木 千代  
 消毒のにおいにつづく傷がある 西出楓楽  
 終の日までかなかなかのりハーサル  
 江原とみお  
 スキップでする人から逃げてゆく  
 澤田 千春  
 太い幹まもなく傘となるだろう 野口節子  
 火よ水よ女に守るもの多し 長谷川博子  
 ためらいの影が通うた裏通り 大家 都

新同人紹介

島 祥庵	富田 蘭水	板垣 草丘
— 薫風・紫香・代仕男・青湖推薦	— 薫風・紫香・代仕男・青湖推薦	— 薫風・紫香・代仕男推薦

淋しいので正体見せることにする

文学を発酵させている壺だ 小島 蘭香  
 八木 千代  
 川柳塔社常任理事会 (4月1日)

▽鳥祥庵・富田蘭水・板垣草丘(いずれも出雲市) 3氏の同人推薦を承認。  
 ▽全日本川柳和歌山大会の準備状況報告。  
 ▽紫香副主幹から鳥取県川柳大会参加報告。  
 ▽平成4年度同人総会・本社句会(鳥取)の窓口責任者を河内天笑氏に決定。  
 ▼「芳志 井崎ミサ子さんから受賞記念として金一封を拝受いたしました。」

# 私の川柳修行

川柳こぼれ話

田中正坊

朝日新聞の大阪版に川柳塔社理事長橋高薫、番傘川柳本社副幹事長片岡つとむ両氏の交互選による「朝日なわ柳壇」欄がある。

週一回掲載の課題吟で、他の全国紙地方版や地方紙にも同種の欄があるが、さすが二大柳社のベテランが選者をつとめているだけに、その水準は群を抜いて高いとされている。

この柳壇が設けられたのは昭和五十五年六月で、間もなく十二年目を迎えるが、私が投句を始めたのは同五十七年からで、初期のころの感想を、同柳壇のPRを兼ねて本誌の同六十年八月号に「私の川柳道場」としてまとめたことがある。

川柳作家の多くは、新聞川柳への投句からスタートしたと言われているが、私の場合もなにわ柳壇への投句が川柳に首をつっこむ端緒となったわけで、その最初の句――

笑つても目は笑わないガードマン

が昭和五十七年十一月一日号掲載の片岡つとむ選「警戒」の一席に選ばれた。

まくれあたりもいいところだが、これが病みつきとなって、それ以来せっせと投句を続け、毎週の発表を見ては一喜一憂する羽目となった。その中でいつしか私は百句入選を目ざすようになったが、今年の二月二十二日号でようやく目標を達成することができた。すでに百句を突破した方は、数人いや十数人はおられるであろうし、九年余もかかったのは決して誇るに足ることでないと思う。

さて私にとっての川柳は、文字どおり六十の手習いで、多くは望めないとしても、やはり始めたからには少しでも上達したいと願うのは人情の常であり、それには何か物指しになるものがほしいと思つた。そこで思いついたのが、なにわ柳壇における年間入選句数でひそかに記録をとってみた。

最初の年は十一月から始めたので二句、年間フルに投句した二年目は七句、それから八・九と毎年一句ずつ増えて五年目には十句となった。他の人と比較する相対評価は採らないので、絶対評価の観点からすれば遅々たりと言えども進歩は進歩であり、六年目には十二句、七年目は十四句とテンポが速くなり、八年目は十八句と自己最高を記録した。

この間、選者のコメント(評)がつく天・地・人にあたる上位句も次第に増え、

夢のない年金で買うジャンボくじ  
告白のできぬ戦記を抱いて老い  
モナリザの微笑は何の返事だろう  
虚飾には遠く神父の黒い服

イヤリング微かに揺れる無言劇

が一席となり、「告白の……」は橋高薫風選の昭和六十一年度最優秀句に選ばれた。

しかし、この辺りで気がゆるんだのかスランプの谷間に落ち込み、九年目はガタンと七句に急落し、十年目はようやく十二句に復調したものの九十九句でストップ、二か月のブランクを経て百句目――

定年後 自分で決めているノルマ

が片岡つとむ選「ノルマ」でようやく陽の目を見た。ちなみに、入選百句の内訳はつとむ選五十一句、薫風選四十九句であった。

この文章のタイトルを「私の川柳修行」としたが、進歩と上達の要諦は一にも二にも継続であり、自ら目標を決めて努力する以外にないことを肝に銘じた体験であった。そして今回の百句達成は、その修行過程における一つの記念碑でもあると思うので、両選者の序文を得て『なにわ柳柳一私の百句』を刊行することとした。ご高評をお願いしたい。

# 柳界展望

編集部

★平成3年度のふあうすと賞・紋太賞が、『ふあうすと』4月号に発表された。

## 〈ふあうすと賞〉

明け暮れの疾さ心の雨季  
乾季 赤井 花城

幕降ろす時の微笑を身に  
つける 大西 言彦

前略と書いて線路の果て  
しなく 上村さな恵

海しまく天馬乗り継いで  
もゆかな 上藤 多織

## 〈紋太賞〉

驟雨はげしひとつふたつ  
の蹟きに 進藤 一車

冬うららおもいうらうら  
辻電話 吉田 浪

内祝い父系母系の川に寝  
る 樋口 裕海

貧しくて思わずお辞儀し

てしまう

永田 暁風  
★平成3年度の川柳高知賞に次の3氏が入賞した。

太陽に恥じない汗をかいて  
いる 松岡 栄珍

幸せと思えばそんな気にも  
なり 百田 幸

我が俣を言える相手のい  
る安堵 時久 清子

★川柳「路」平成3年  
賞が次のとおり決まった。

〈最高賞〉  
謝罪していい半旗が鼻  
にある 瀬々倉卓治

〈優秀賞〉  
原燃忌ドームに積もる鳩  
の糞 清水みつる

★第14回津山川柳大会は6  
月7日午前10時から津山市

総合福祉会館で開かれる。  
会費1000円、兼題と選  
者次のとおり(各題2句)

布〓樋口由紀子〓岬〓岡田  
千茶〓涙〓佐々木三〓公〓オ

アシス〓久保田元紀〓乱〓

大谷晋一郎〓恋〓海地大破

▽いのち〓前田夕起子〓港  
〓保地桂水〓美人〓伊藤千  
代麿〓勇氣〓定金冬〓。欠  
席投句辞拜。

★日本南画院理事長直原玉  
青氏寄進の黄葉一の庭(玉  
青苑)の落慶法要が5月20  
日、宇治市の黄葉山塔頭瑞  
光院で行われる。

★青森川柳倶楽部では鶴彬  
祭誌上川柳大会の「雑詠」  
(2句・未発表作品)を募  
集している。選者は齊藤大  
雄など13人で投句料は10  
00円。用紙は自由で締切  
は7月20日、投句先は青森  
郵便局私書箱11号・鶴彬祭  
誌上川柳大会係。

志上川柳大会係。

▼句集刊行▲

■川柳岡山社は3月16日、  
川柳ますかつと臨時増刊号  
として459人の自選作品  
集『吉備団子』第42集(A  
5判・120頁)を刊行。

■田中正坊氏(常任理事・  
豊中市)は5月1日、『な

にわ川柳〓私の百句』(B  
6判・72頁)を刊行。

▽同人消息△

■浜野奇童氏(参与・岡山  
県)は山陽新聞3月3日号  
に「趣味の会」と題して津  
山市の軽費老人ホームの川  
柳グループについての随想  
を執筆している。

■堀長江さん(同人・茨木  
市)は3月31日付で茨木市  
教育委員会委員長に選任さ  
れた。堀さんは平成2年4  
月から教育委員在任中。

■上田登志実氏(理事・豊  
中市)は3月下旬、脳しゅ  
よう手術のため、大阪脳神  
経外科病院に入院、術後の  
経過は良好。

▼訂正▲

■4月号〓P49下段12行目  
「金色を借りて猫く…」↓  
「金色を借りて描く…」▽  
P101中段13行目「私利私欲  
重ねた罪をなすりあい保  
州」の作者名は記録の誤り

州」の作者名は記録の誤り

岸和田会 川柳	28日(木)午後6時から 機嫌・工面・軽率・広告	岸和田市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助
※京都塔の会は吟行 37頁参照。問合先		〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 TEL 075-681-5067

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内  
原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

## 5 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(金)午後1時から 考える・中心・押す・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2丁16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	1日(金)午後1時から 相 談 ・ 渦 ・ 自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 塔 まつえ	9日(土)午後1時半から アルバム・絆・流行	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	10日(日)午後1時から 組む・苦行・加える・(口紅)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後6時から 光る・踏む・糠・哲学	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後1時から 色・たっぷり・植える・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚 <b>各題2句</b>
南 海 川 柳 会	15日(金)午後6時から 悪友・飲み屋・通知・趣味	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	17日(日) 正午から インタビュー・青い・恩・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から 緑・応援・正しい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(火) 正午から 景色・詫びる・教師・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 <b>各題2句</b>
南大阪 川 柳 会	19日(火)午後6時から 抜・常・狡・苦	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
富 柳 会	21日(木)午後1時から 後押し・安心・道	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
川 柳 東大阪	23日(土)午後6時から うっかり・甘い・淑女・軽い	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
はびきの 市 柳 川 柳 会	24日(日)午後1時から 値段・背負う・スクラム・(好意)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

## 編集後記

★今月は実務的なことを書きたい。以前にもふれたことがあるが、最近、また二重投句が目立つ。①同じ欄

に前月の掲載句をダブって投句するケース②同じ句を複数の欄に投句するケース③本誌と他誌に同一句を投句するケースなどである。

意識的な二重投句は、明らかに作家としてのモラルに欠けるが、そういう人はま

ずいなくと思う。★そこで編集部としての対応だが、③のケースはどうにもできない。①と②の場合、原稿または初校ゲラの段階で発見したときは、該当句を削除したり、選者に別の句を選んでいただくこ

とによって、事前に解決することができ。今年に入つてからたまたま数件を処

理したが、これは言うべくしてむずかしい。しかし、掲載されてからでも本人が気付けば申し出てほしいし他の方からも指摘いただいたき、その句の削除を紙上で明らかになりたいと思う。

★この二重投句は、たとえ不注意によるものであつても、作者は責任を免れることはできない。原因はいくつか考えられるが、まず自作の句の管理不十分があげられる。メモに走り書きし

出句すれば破棄する人を見受けるが、これはどうかかと思つ。特に複数の柳誌・句会に出句する人は、句帳を常備して作った句をすべて記入し、できれば入選句は別に記録しておくぐらいの周到さが望ましい。

★五月三日は、世界ではじめて戦争の放棄を宣言した日本国憲法が施行された四十五周年にあたる。(正)

◇編集後記も誌代の一部になつていきます。川柳塔愛読者の皆さんへ、いい句ができてもできなくとも、一寸誌代の取り返しにパチンコでも如何。絶対勝てる方法をお教えします。

◇まず土地柄、サラリーマンの多い所では客を遊ばせる店が多く、職人の多い下町では、波が荒く勝ちつぶりも負けつぶりも大きい。プロ向きの店と一般向きの店があつて、出る台と出ない台の割合をハッキリさせているのがプロ向き、全台平均しているのが一般向き。

◇店がビルの二階や地下にある所は、一―二割出玉率をよくしている。なぜなら一階の店に比べ、上つたり下つたりのハンディを埋めるためである。本日開店の店をよく入る。総じてふだんの出玉率(七〇―八〇%)に比べ、二三〇―一五〇%

は確實。◇決してしてはならないことがある。複数で行かぬこと、パチンコは孤独の遊技であるから、魅力が味わえず、集中力も妨げられる。そして給料日以後数日は行かぬこと、よく出る台の隣は避けること。入口に近い所にある台を狙い、店員と顔なじみになるのいいとは、パチンコ村の村長さんの弁。(し)

☆「違つ自分に変身してみたい」こんな変身願望を入は持つことがある。アメリカの工業デザイナー、パット・ムーアはとても興味深い実験をした。二十六歳の彼女は、メイク・服装・態度を変えて、見事に八十歳の老婦人になりすました。

☆美貌・若さ・健康が自信となつて、怖いものは何もなく、周りからもちやほやされて当然と思つていた彼女

は、老婦人になつてみて街を歩き、買い物をして周りの人々の対応に、非常なショックを受ける。三年間の変装の旅から、彼女は老人のためのより適切な家や便利な設備・商品などを考えることができた。しかしそれらの注意深くデザインされた環境よりも、何よりも大切なことは、一般の人からの思いやりに満ちた態度であり、老人を価値ある人と見なしてくれる目であることを悟つた。

☆私たちは、いろいろな人に変身することはできないが、想像することはできる。相手の身になつての思いや

りには必要だが、それが満ちると自分がなくなつてしまふ恐れがある。気付かぬ間に他人を傷つけることもある。一粒飲むと、人間関係がスムーズになる妙薬はできな

いだらうか。(み)

きないだろうか。(み)

## 作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞選  
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香選  
 銀河系 (3句) 河内 天笑選  
 茴香の花 (3句) 八木 千代選  
 吟 (栄える) 松永 すすむ選  
 課題 (3句) 「水晶」 小田川 智重子選  
 「提灯」 寺井 東雲選

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

8月号  
 課題吟 「床」「届ける」「羽根」  
 初歩教室 「拝む」

## 本社5月句会

日時 5月7日(木) 午後5時半  
 会場 メンズファッションセンター3階  
 中央区内本町1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

おはなし  
 兼題 「泣き虫」 河内 月子  
 「キャンセル」 春城 武庫坊選  
 「知恵」 宮口 笛生選  
 「地方」 河内 天笑選  
 「味噌」 西尾 栞選

席題 1題 当日発表 各題2句以内  
 会費 500円  
 投句 柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、  
 投句料310円(62円切手5枚)同封のこと

## 本社6月句会 8日(月)

兼題 「指輪」「焼く」「出る」「針」「凄いい」

## 夜市川柳募集

第12回「芸」 西尾 栞選  
 ハガキに3句 5月末締切  
 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## NHK川柳作品募集

課題「料理」 森中恵美子選  
 ハガキに3句 5月10日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43  
 NHK大阪放送局  
 「ラジオセンター」川柳係  
 発表 5月24日(日) ラジオ第1放送  
 午前11時5分から

## 西日本文字放送作品募集

課題「化粧」 橘高 薫風選  
 ハガキに3句 5月15日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
 大手前ウサミビル3階  
 西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料51円)  
 半年分 三千八百円(送料共)  
 平成四年 四月二十五日印刷  
 平成四年 五月一日発行  
 編集兼 西尾 童心 社 蔵  
 印刷所 藤原 童心 社 蔵  
 大阪市阿倍野区三好町1-10-1六  
 ウエムラ第2ビル202号室

〒545  
 発行所 川柳塔社  
 電話 (06) 561-6914 番  
 振替口座大阪 8133368番

## 賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで  
住居の事なら何でも相談できる店

# 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

関大正門前店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 330-0006(代)

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6102

FAX (06) 388-6886

## 第16回全日本川柳和歌山大会

日時 6月14日(日) 午前10時開場

会場 和歌山県民文化会館大ホール

交通案内 JR和歌山駅からバス①番乗車県

庁前下車徒歩5分・南海本線和歌山

市駅からバス⑩番乗車県庁前下車

会費 3000円(昼食・記念品代共)

宿題 第一部(事前投句・5月10日締切)

「はるかに」 塩見一 釜選

「陽」 竹本 瓢太郎選

「城」 西尾 葉選

3・5×18センチの句箋1枚に1句ずつ記入

各題2句、無記名、封筒に住所氏名を明記し、

投句料1000円(定額小為替、現金書留)を

同封のうえ、左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11

ステツブイン南森町702号

日本川柳協会大会係あて

宿題 第二部(当日出句・締切正午)

「砂」 北山 紀世選

「和む」 小林 由多香選

「宴」 卜部 晴美選

「加減」 荻原 柳絮選

各題2句・各部の各題とも未発表作品に限る